

---

# Left Alone

廣瀬 るな

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Left Alone

### 【Nコード】

N5694D

### 【作者名】

廣瀬 るな

### 【あらすじ】

ボクシングだけが生き甲斐で女を捨てたなんちゃって少年Yと彼女に恋する選手兼親友のM。そんな彼女がボクシング以上に愛してしまったのは彼の兄貴その人で。トラウマ満載。リアルでシリアス、かなり痛い恋のお話。

## プロローグ

嫌な思いはいっぱいした方だと思う。でもそれは特別に自分だけじゃないし、他の人はもつとひどい目にあっている事も知っている。それに誰かがいつでも助けてくれるから、育ちに恵まれなかった割には幸せだったのだと感じている。

不幸比べは無駄だからしない。

だから嫌な事は忘れる。

私にはいい友達もいて、学校も楽しかった。勉強はまあまあだったけど、部活は普通以上に満喫できた。

就職して、仕事も順調。スタッフは良い人たちばかりだし、お客さんも喜んでくれていると思う。資格試験も通って、今の世の中で失業しても食っていける自信はある。

だから今の自分はそれなりに幸せだと思う。

言い忘れたけど、人並みに恋をした事もある。クレイジーラブを地でいって、何もかもぶち壊した。若気の至りってヤツね。それがどんなに惨めな結果を残したかだなんて、話したくない。それほど熱い恋をした。

だからもうこれ以上の人生なんか望んじやない。

だからもうかまわないで。いいから。私は独りがいいの。放つという。大丈夫だから。寂しいなんて、子供の言う事だから。

だってそうでしょう？取り残されるより、自分が選んで独りの方が踏ん切りがつくってモノだから。

つづく

L e f t   A l o n e

## プロローグ（後書き）

書きたくてもしょうがなかったお話です。書けるって、嬉しい!!

## 第一話 懐かしい顔

はてさて、今日はセントバレンタインデイ。私は定刻通りに終わった職場を後に、ボクシングジムに向かう道を急いだ。男女問わずお客さん達やスタッフからもらったおチョコは紙袋の中で軽やかに弾んでいて、私を何となく幸せな気分にしていた。

2月の夕暮れは微かに雪をはらんだ空気の匂いがした。

案の定そこには近くの東東高校あずまひがしの制服に身を包んだ女の子達が、きやあきやあとひしめきあっていた。自分にもあんな時代があったんだなあ、などと、噓っぱちを呟きながら、

「寒いね。」

なんて声を掛けてみる。寒さが厳しくなると頬の傷が疼くから分かるんだ。

彼女達の半数は私目当てだったのは分っているし、週2回しか来ないとはいえジムの人寄せパンダを買って出ている者としては、愛想が良くなるのは必然。人畜無害をイメージした笑い顔で紙袋を隠しながらそばをすり抜ける。すると最近見慣れたピンクのマフラーの女の子が綺麗にラッピングされた小箱を私の前に差し出した。

「あの、これ受け取ってください。」

中身はもちろん、というか多分チョコレート。

「ごめんね、気持ちは嬉しいけど、私、甘い物は口にしないんだ。」  
とりあえず社交辞令で言ってみる。この子達の気持ちは何となく分かるから、絶対に嫌と言う気はないのだけれど。

「知っています。」

女の子達は胸を張るように口を揃えて言った。

「でも、ジムで誰が一番チョコをもらったか賭けをしているんですよ。」

女の子の情報網って凄い。確かに私も一口千円で強制的に参加させ

られていた。

もちろん、ヴァーム5箱も捨てがたい。ライバルのホスト君達もかなり貰って

くる事だろう。

「私たち、優里<sup>ゆうり</sup>さんに勝って欲しいんです。」

「受け取ってください。」

ご丁寧にもこれまた大きな紙袋が取り出され、一人一人私の顔を見つめなが

らその中に落としていく。こりやどうやっても受け取るしか無いでしょう。

「お返しなんかいらainです。受け取ってさえもらえれば。」  
そう言われてもしない訳にいかないでしょ。

最近の格闘技ブームでボクシングファンの女の子も増えていて、こうやってジムに来てくれているのだから、せつかくのチャンスだ。ぜひ生の試合を見てほしいと思う。3月の練習試合のチケットを返しに贈ろうと考えた。多分、練習終わりにやって来る塾帰りの男の子達の分を併せればかなりの枚数のチケットが必要になるだろう。こして私の給料は消えていくんだなあ。でも、それも良い。

「ジムの他の人たちと分けてくださいね。」

彼女達は砂糖菓子のようにくすくす笑った。なるほど。他の連中はもらえないと踏んでいる訳だね。私は苦笑いを浮かべた。

確かに、もらう奴はもらうが、そうでない男も実際の所かなりいる。

## 結局

「ありがとう。」

って名前を確認しながら紙袋を受け取ったその時、

「相変わらず勇利<sup>ユリ</sup>は女にモテるなあ。」

とその声は聞こえた。高校時代の3年間呼ばれ続けていたその懐かしい響き。振り向いたそこにはきちんとしたスーツにステンカラーのコートを着た、柔らかな黒髪の見慣れない男が立っていた。

「おいおい、俺の事忘れたか。別れた“女房殿”にせっかく会いにきたつていうのに。」

彼は少しうつむきしょうがないなと笑った。女の子達が声を落とす。誰でしたっけ、そう言えたらいいのに、なんて少し思った。姿形が変わって

も忘れられないんだ、そう知った事が少し悲しかった。

「久しぶり、基もとがあんまりいい男で誰か分んなかったよ。」  
携帯が鳴って、畠山からのメールが届く。

“木下がお前を捜している。悪いがジムの場所を教えた。”  
悪い。

しかも、遅い。

私は肩をすくめた。どんな顔をして会えばいいのか解らない。正直二度と会うつもりは無かったから。

「勇利は変わらないな。ハンサムなままだ。」

その一言に思わず左の頬に指を這わせた。基の瞳が曇る。それでも私を見つめている視線を少しも逸らそうとはしなかった。

「少し、話を聞いてもらえないかな。」

その声は私が覚えている彼の声より一段と低く、でも確かに基の声だった。

これからトレーニングの予定だし、その後ジム友に夕飯に誘われていた。明日は休みとはいえ早朝から町内会の大清掃だ。

私には自分の“今”が有り“生活”が有る。

「嫌だ……。」

遮るように彼はそのチャームिंगな顔を歪めた。

「俺の一生のお願い、な。」

それは私が抗う事の出来なかったあの笑顔。

まさかまたあの間違いを犯すはずは無い、もう学習したのだから。私は自分にそう言い聞かせた。



そうして私たちはジムに背を向けた。

まだ早い時間の居酒屋はガラガラにすいていた。馴染みの大将にお願いし2階の座敷に上がる。そこなら静かに話せるはずだった。彼のくだけた雰囲気とは裏腹に、今晚は飲まない訳にはいかなくなりそうな予感がして気が重い。こいつとの複雑な関係を今まで誰にも話した事はないし、打ち明けたいとも思わない。だからどんな用件でこいつがやって来たにせよ、今夜の私は酒に逃げ場を求める、そんな気がした。

ビールのジョッキを軽くあわせたものの二人とも唇を触れさせただけ、飲んだポーズをとっただけだった。

二人とも余裕をみせる振りをして、思いのほか緊張しているらしい。

「6年になるな。元気にしていたか？」

基が少し長い前髪を払う。私が覚えている基はいつも短い髪をしていた。当然と言えば当然だ。あの頃の私たちにとってボクシングが全てで、二人とも当たり前のように髪は短かったのだから。そして今の私は肩まで髪をのばし、それらしく後ろで束ねている。

「ああ、それなりに。基はどう？」

「まあまああって所か。俺は大学出てから東京で就職したんだ。弁理士っていう資格取って、特許がらみの仕事しているよ。毎日がデスクワークだけど、楽しいと言えば楽しくやっている。」

「よかったな。」

それからしばらく当たり障りの無い話をした。早く本題を切り出せばいいのに、そう思う反面、基が何を言いに来たのかまるで解らず不安で胸が苦しく、この再会を無かった事にしたいと思った。無性に咽が乾くからジョッキを一気に飲み干して、その勢いで話をつなぐ。

「俺の方は希望がなつて鍼灸師になれたよ。今じゃボクシングジムのサポーターみたいな事やりながら、時々練習にも参加させてもら

つてるんだ。」

「俺はあれからボクシングをやめた。」

その事は風の噂で聞いていた。

「不思議だなあ。最近じゃ女がボクシングするのが流行ってるって言うのに、男のお前が辞めるなんて。」

基といくと、なぜか昔の男口調に戻る自分がいた。

「勇利の言ったとおり、俺には資質はあっても、才能は無かったかな。」

ああ、そんな事まで覚えているのか。彼の記憶力のよさに脱帽だ。

「それに俺にはボクシングを続けるだけの情熱が無かったんだ。お前みたいにな。」

その言葉は私に向かっての皮肉というよりも、彼が自分自身に言い聞かせている、そんな風に聞こえた。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第二話 知られなくなかった過去

今でも良く覚えている。その日は昨日までの寒さが嘘みたいになくなっていて、暖かい日差しに咲き初めの桜の花びらがきらめいた。それまでこれから始まる全く新しい生活に不安が有って、本当にこれで良いのになって、自分の選択に迷いも有った。だからそんな祝福された始まりに高校生活は明るいんだ、なんて勇気づけられる気がした。

そんな入学式当日、整列の並びで近くになった木下基は初対面の私にためらい無く声を掛けてきた。切り立てのなじみの悪い髪型、良く動く瞳、えくぼの浮き上がるその笑顔に彼の第一印象は

“ やんちゃな中学生が紛れ込んだ ”

そんな感じだった。そのくせ36人いるクラスメートのうち仲のいい知り合いが女子しかいないと恥ずかしそうに頭を掻いた。

「正直、俺、さびしんぼなんだよなあ。だからさ、仲良くしようぜ。」

┌

私は女子では無いらしい。まあ、当然と言えば当然だった。私はその日着ていたのは、紺ブレにチノパンという、とうてい女子高生には見えない入学式スタイルだったのだから。しかも彼の着ているソレは正に私の着ている服そっくりで。ただ違うのは胸元のエンブレムぐらいなものだった。今思い出すと笑えるのだけど、紋章の作りは私たちの育ちを象徴するかのように天と地ほども違っていたことにその時の私は気がつきもしなかった。

15歳という未成熟な年齢は、同じ身長、同じ体型、同じ髪型、同じ服装の私たちを同じ性に見せていた。

だから勘違いは当たり前前の事だった。

何しろ私は自分が女になんか見えてほしくなかったのだから。

城北高校は自由気質を重んじる私服の学校だった。私にしてみればこの学校にはボクシングのマネージャーをする為に入りたかったのだから、男ばかりのボクシング部に早くとけ込む為にもこんな打鬱陶しい“女”という性を捨てるつもりでかかっていた。

名簿に載せた私の名前は

“山口 勇利”

なんて事は無い“ゆうり”は“ゆうり”でも

“遊里”

の“ゆうり”が本名だったのだ。

同じ呼び名でも全然違うその名前。

遊里、女遊びの色里、郭。常識で考えれば自分の娘にそんな名前つける親なんていないと思う。でも私の場合は違っていて。

「これじゃ“ソーブランド山口屋”ってのと変わんないじゃないですか。」

合格発表の直後に私は城北高校の校長室に直談判に行っていた。

「本当は男の名前で“勇利”ってつけるはずが、女が産まれて来て慌てたもんだから、同じ音の“遊里”で届け出を出してしまったんです。」

“勇利”の命名の半紙も持ちだし必死に頼み込んだ。

「父親が尊敬していたボクサーから名前をもらったんです。ねっ？確かに漢字じゃ男名前になるけど“遊里”よりはずっとましでしょ？法的にきちんとした名前に改めるまで、お願いだからこっちの名前を使わせてください。“遊里”って名前を絶対、戸籍からも抹殺したいって気持ち、分つてくれますよね。こんな、色気違いみたいな名前、大っ嫌いなんです！高校に入ってまでその名前と呼ばれるのって、耐えられないんです！」

校長先生は頷いてくれ、それ以上追求しなかった。

そして正式な通称名として学校から認可された。

そんな私の名前を彼は

「するどく（利）も勇ましいかあ、むちゃくちゃカッコいい名前だなあ。」

と褒めてくれた。その一言で私は彼が自分の味方だっと思った。

彼は中学でバスケットをしていたと言う。体が小さい割にはそれなりの大会に出ていて、花形とはいかないまでもそこそこだったと。「でもさ、俺、自分が団体競技に向いていない気がするんだ。無理に協調性取り繕ってもなあってさ。しかも高一でこの身長じゃ先思いやられるし。そこで考えたのが、ボクシング。カッコいいだろ？俺、身長166センチで体重54キロなんだけど、いくら食っても太らない体質みたいなんだよな。だから、減量とかちよるいと思うのさ。ここのボクシング部って県下じゃ有名なんだって？ボクシングなら高校から始めても仕上がるだろ？そうしたら俺でもインターハイ、もしかしたら狙えそうじゃん？」

そう言っただけで、ざわめき戯れる同級生達の片隅で袖をまくり上げ、マッチョな筋肉ポーズをとってみせた。

見事に、柔らかに膨らむ筋肉。贅肉が無く、太すぎず。緩んだ瞬間柔らかくほぐれる組織。

ははは、と笑う彼に我を忘れて見惚れた。

彼の売り込みは嘘じゃなかった。一目で分かるバランスのいい肉体。癖の無い骨格。有名中学でバスケットをしていたという事は走り込みに耐えられる訳だから、持久力も有るはずだ。何よりバスケットなら動体視力も期待できる。しかも普通は膝やどこかに故障が有るはずなのに、一つも無いと言う。

正に私の理想の体だと思った。

女はリングに上がれない。だから強い選手を育てて、自分の代わりに勝ってもらう事が長い間の夢だったのだ。

その放課後、小学校からのジム友、といっても1コ年上の武に連れられ部室に向かおうとする私に、つるし上げを食らったと勘違い

した基がついて来た。

本当は怖かったと思う。身長は無いけれど周りのみんなはごつくって、何よりボクサー特有の“目”というものが有るから。それなのに彼はついて来た。

私が女だと知った後でも、友達としてのスタンスを崩さずに。

そんな彼を神様がくれた贈り物だと思った。自分はこいつの専属トレーナーになろう。そして二人でインターハイにいくんだ。

この時生涯の夢に一步近づいた気がした。

結局私が説得する必要は全くなくて、彼は嬉々として入部した。

二人の仲は順調で、教室にいても部屋にいても男とか女とかいった壁はみじんも無くふざけ合っていた。そして周りの誰もがそんな私たちを、まあいいかと見守っていてくれた気がする。毎日ボクシングに明け暮れ、とにかく楽しかった。基と一緒にだともかかもがハッピーで、この世のすべてが輝いて見えた。

私は彼の中で次々と開花していくその才能に目を見張り、こいつの為に生きるのが自分の青春だって信じて疑わなかった。

基は私を“女房”と呼び、私は彼を“だんはん”（旦那様）と呼んでいた。ふざけた話だった。お互いそんな気が全くなかったから言い合えた呼び名だ。

そんな関係が変化したのは、二年になった夏の終わり。

基は9月の地区の新人戦で準優勝し、私たちはそのあり得ないような勝利に浮かれまくた。拳を突き上げ吠えながらお互いを讃えた。一生の親友だと抱き合い、肩を組み、二人の絆が決して切れないものだと思ひし合った直後の事だった。

中学の時の事だ。その頃の私には畠山孝之と言うパートナーがいた。それは高校に入ってから基と私の関係に似ていた。ただ違う

のは私が孝之に抱かれていたという事だった。

その事が基にばれた。

づく

L e f t   A l o n e

つ

### 第三話 間違いは繰り返す

孝之に抱かれたのは成り行きだった。お互い恋愛した訳じゃない。私たちは子供で、セックスに興味が有って、処理しなければいけないと言う漠然とした強迫観念を持っていた気がする。

でもやはり辛かったのは確かだ。

とあるきっかけと違う学校に進学した事が幸いし、高校入学と同時に孝之との関係は卒業した。もちろん二度と連絡を取ろうなどとは思わなかった。

女にとって愛情の無いセックスをするという事がどういう事なのか、気づかない振りをしている事が出来なくなっただけだった。

だから私にとっては、蓋をしたい浅はかな過去だった。

なのにまた私は別の理由をつけて同じ間違いを犯してしまう事になる。

私はどうしようもない馬鹿なのだ。

同じボクシングというフィールドにいる限り、また彼に会う事は予想していた。現に小さな交流試合でのニアミスはたびたび有ったのだから。その“再び会う”という嫌悪感よりも私はボクシングを愛する事を選んだ。それに彼だって純粋にボクシングが好きだって事を私は知っていたつもりだった。

だから正面から顔を見合わせても自分は強く立っていられるとその時まで信じていた。

よりによって、孝之は基の事実上のライバルだった。そしてその再会是最悪な形で現実になる。



ブロック大会、フェザー級決勝戦。私たちはお互いのコーナーにいた。その時の私は基以外の人間は見えていない、ある意味とても“幸せな”人間だったのだ。青コーナーの畠山は昔関係のあった男というよりも基の対戦相手以外の何者でもなく、私にとっては分析の対象だった。

思い出すのは彼の昔の癖、ジャブの時反対の肘が下がりやすいだとか、疲れてくると奇妙に足をスイッチし切り替える事だとか。

試合は接戦で、判定次第では負けたかもしれないと思った。だから基が優勝を決めた瞬間、私達は人目を気にせず抱き合って喜んだ。その退出の時、破れた孝之が私を呼び出したのだ。

“話したい事が有る。”  
と。

行きたくはなかったけれど、その事で後から部の人間にちよつかに出されても嫌だった。その時は上手く話をまとめる自信があったのだ。

でも、現実には甘くない。

人気のない地下のトイレの目の前で、開口一番彼の静かな罵声が私の中でこだました。

「勇利ってさ、今でもダッチワイフしてんの？」  
って。

痛い言葉だった。

その昔私は彼のトレーナーになる事を夢見て、孝之は将来の世界チャンピオンを目指していた。私はただマグロのように、好きだとかの感情も無く彼の欲望を処理してあげていた訳だから、そう言われても仕方が無かったのかもしれない。

気分が悪くなり、話なんか出来る状態じゃなくて逃げ出そうとした。その腕を掴まれた。

「俺、本当に勇利が好きだったんだ。それなのに、なんでこんな事になったんだよ。このまんま、ライバル続けるのか？もう一度、俺

んとこに返ってくる気はないのかよ。」

そんな言葉、聞きたくなかった。

もう終わった関係だから。

彼が無理矢理かぶさってくる。身長はさほど変わらないのにその力の差は想像以上に大きく、ある意味予想のついた“差”だった。

この絶対的な“差”が私にボクシングを諦めさせたのだと心の中の冷たい声が囁いた。これが現実だからって。

逃げようとする私に彼はキスをした。ガチガチと歯があたり彼の汗の匂いが鼻孔を満たす。

耳鳴りと同時に聞き慣れた声がして、蒼ざめた基がそこに立っていた。

一部始終を聞かれたのは明白だった。それでも彼は私をかばい、悔しさからか恥ずかしさからか、今ではもう分析なんか出来ない感情に身動きも取れないでいる私をそこから連れ出してくれた。

でも、孝之が投げつけた“不信心”という石は、基の心に波紋をよんだ。確実に。

彼に負けて欲しくなかった。私なんかの關係に悩んで、せっかくの才能が潰れてしまうなんて耐えられなかった。基にはまだまだ可能性があつて、これから羽ばたいていくのに、私のせいでリタイアなんかして欲しくなかった。

3年前の私はセックスの意味がよくわからなかった。その事で子供ができるってことも知らなくて、孝之に教えてもらったほどだ。避妊するから大丈夫と言われ、平気な顔をしながら大人になれば誰でもする事だから言い聞かせ、でも怖くて体をすくめていた。

あの頃からは少しは成長し、男と女の知識も増えたつもりだった。

だから基に抱かせた。

どうせたいした体じゃない。

私は他に問題の解決方法を知らなかった。ただ、孝之に許した事を基にも許す事で価値を量り合い、とりあえずはイーブン。現在進行形という事で基の方が上、という、今思えば情けないほど子供のやり方で自分を、いいや自分たちを納得させ合っていたんだと思う。

l o n e

つづく

L e f t A

### 第三話 間違いは繰り返す（後書き）

痛々しい話が続きます。 勇利のバッウグラウンドです。 嫌いな人、  
ご免ね。

## 第四話 悲しい関係

基はいつもすまなそうに抱いた。高校2年と言えばやりたい真っ盛りだ。その頃には身長が一気に174センチまでのびた基は、恵まれた体格とうらやましいほど純粋なその気質でかなりモテていたと思う。

部室の裏で告白される姿を何度も目にしていたのだから。

ひらひらとしたスカートを翻す蝶の様な女の子達。お人形のような手足。年頃の男の子にとって可愛い彼女は夢だったろう。デートして、見せびらかして、じゃれ合って、ごく普通の高校生の“えっち”して。

最初の頃彼が本気で誰かに恋をしたら私との関係は終わると思っていた。

現にほんの少しの間基には彼女ができて、私たちの仲は立ち消えになった事もあるのだから。

何しろ彼には気取られ無いようそうなるようにしむけたのは、この私。

私は自分に女として魅力が有るなんてうぬぼれてはいなかった。たしかに小学校の頃にはそこそこ可愛い分類だったと思う。でも今は男にしか見えない短い髪型に、筋肉質に作った体。表情も厳しすぎると思う。怒声も罵声も何でも有りだ。現にジャージを着ていたら男ばかりの大会会場でさえ女だと扱われた事は一度も無かった。でも彼は必要以上に律儀で、結局インターハイを目指したいと言う私の夢と一緒に見る事を選んだ。

つまり、恋愛をする余裕が無いほど二人はボクシングに打ち込んでいた。

基とのセックスは苦痛だった。抱かれるたびに、したい訳でもな

いのに濡れてくれる自分の体が不思議で、私って変だ、狂っているよと思った。

その現実が、自分は当たり前前の女の子の様に恋をする人間じゃないんだって思わせてくれた。

そして私は再びダッチワイフの役目に徹する事になる。

マンガや小説に有るような恋人同士の語らいや、甘い睦言は皆無だった。それどころか、一度も自分からキスをする事はなかったし、私の指は最初から最後までシーツを掴んでいた。

それなのに、重なる毎に基の心が私に傾いてくるのが解った。

いつしか彼は私の顔をうかがいながら歡ばせようとするようになり、じつと見つめながら愛撫を繰り返し、信じられないほどの絶頂の世界に連れて行ってくれるようになった。

耳元で囁かれる

“勇利”

と言う私の名前は

“好きだ”

の代わりに発信されているようで、その響きにどうしようもない歡びと哀しみが沸き上がった。

彼は誰が見ても理想の恋人だった。

ボクサーとして華やかに決めている基。だからといって地味な努力もコツコツやる事の出来る根性が有った。プロは無理だとしても、その輝きは私に取ってワールドチャンピオン並みだった。

友人の信頼も厚い基。

いつしているのか解らないが、それなりにいい成績も維持していた。

パンチをもらわないようにガードを確実に固める彼の顔はボクサーらしくらぬ綺麗なもので、笑うとえくぼの浮き出る横顔にすれ違う女の子達が騒いでいた。

私だって基が好きだった。愛していたと言っても過言じゃない。

でもはつきり言えるのは、私が恋をしたのは彼の才能と将来にだつて事。

そう、何も持たない素の基に恋をしていた訳じゃない。

そんな自分が嫌いだった。純粹に彼を愛する事ができたらどんなによかっただろう。そのたくましい肩に腕をまわす事ができたらどんなに楽になれただろう。

でも、できなかった。

こんな中途半端な心で応えてしまつたら、基を心底傷つけると思つた。

私は彼の気持ちに値しない女なのだから。

そんな心の隙間に、雨の雫の様にしみ込んだのが基の兄貴だった。

それは偶然が重なっただけだった。

L e f t  
A l o n e

つづく

## 第五話 不審な男（前書き）

未成年の飲酒は法律で禁止されています。物語はフィクションです。



## 第五話 不審な男

初めて会った時の彼はあまりよく覚えていない。

新人戦の後の打ち上げで、せっかくのお祝いだからお酒を飲んでみようという話が決まり、一軒家の基の家に白羽の矢が立った。2年のうちで一番年をくってみえる井ノ原と栄が酒を買ってきて、幼く見える加藤と幸治は食い物を買ってきて。俺と基は減量のためしばらく遠ざかっていたお菓子コーナーで新製品を山のように選んだ。

初めて口にしたお酒のせいでみんなふざけていた。いつしか王様ゲームが始まり、井ノ原と幸治が一本のポッキーを二人で食べると言う罰で盛り上がっている時、仕事帰りの基の兄貴がやって来たんだ。目の前に広がる男同士の痴態に慌てる事もなく、むしろにやつとわらったスーツ姿の男。

それから視線が合った気がする。

基とはあまり似ていないなと思った。身長は確かに一回り大きい気がするが、細身な事には変わらない。でも、なぜか違うと感じた。6年も歳が離れているとそんなものかもしれない。

そして俺はこのときかなり馬鹿な事を彼に向かって言ったんだと思う。仲間が一齐に吹き出し、手を叩き、その人は目に見えるほど動揺し部屋から出て行った。

それっきりの事だった。

次に会ったのは数週間後の週末の繁華街。

その頃には、俺は基と寝るようになっていた。

俺は仕事で酔いつぶれる予定の母親を馴染みの交番で待っていた。母の絵里子さんは水商売をしていた。子供の俺から見てもとても綺麗な人だ。俺が小学校2年のとき父親が事故で亡くなって、それがお仕事のきっかけになった。

お店のオーナーは父の古い友人とかで、絵里子さんを快く引き受けてくれたと言う。ママさんは少し小太り気味だけどいかにもママさんと言った感じの優しい人だ。

その店はいわゆるスナックに毛の生えた様なクラブとでも言うのだろうか。絵里子さんはそこで夜6時から2時まで働く。平日の仕事はそんなにキツくない。ただ、給料日直後やボーナスが出た後、年末年始や年度末はかきいれ時になる。

そんな時絵里子さんは無理をする。

お店が終わるまでお付き合いし、新しいボトルの為に無茶をする。だからいつしか酔いつぶれた母さんを介抱するのは俺の習慣になっていた。

お迎えがかかるのはだいたい4時から5時と決まっていて、その日も時計は4時20分を指していた。

さすがにその時間帯に明らかに10代の俺がほつき歩くのは都合が悪い。最初の頃は喫茶店で時間をつぶしていたが、ひよんな事から顔見知りの交番のお巡りさんに声をかけられ、それ以来図々しくもその人が居る晩は交番で過ごすようになっていた。

眠い。俺はその交番の片隅で船を漕ぎだしていた。

そこに突然の女の人ののしり声。

「ぼったくられた!!」

ここではそんな言い争いがしょっちゅうだ。俺は睡魔と仲良くおててを繋いでいた。

断片的に店の名前が聞こえる。

ああ、またあそこか、なんて思いながら頷く。うんうん、あそこは悪いね。でも、たいした金額はボラレ無い。せいぜい3掛けつてとこだろ。薄目でサラリーマン風のその集団の人数を見る。4人。4人×1万×3倍 12万かあ。確かに安くはないよな。まあ、やたらと身なりがいいから5掛けいったかなあ。でも、ヤバいの分っ

ていて入った口調も感じていて、ま、金持っている奴が社会勉強したって話しか？なんて見ていると、その中の一人と目が合った。どこかで会った事が有る？身長180センチ弱の中肉中背。広い肩幅によく似合う背広。手足の先が少し出ている変わったデザイン、きつと海外ブランドものだ。整った顔つきは“生徒会長”のあだ名の同級生を思い出させた。歳は大卒2年目と言った所か。その人は俺に向かつて、奇妙なモノを見るかのように目を細めた。

この時は俺の事を“売り物”だと勘違いしているBL系かと思っ  
た。

その女の人がひとしきり文句を言った後、一緒にいた男の人達になだめすかされて交番を出ようとした時（こういうトラブルは処理が難しいらしい）、もう一度眠るつもりだった俺の腕を強引に引っ張るヤツがいた。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第六話 基の兄貴

「どうして勇利君がこんな所にいるんだ。」

予想もしていなかった事、しかも名前まで呼ばれて俺は一発で目を覚ました。

そいつの吐く息はやたらと酒臭かった。

「すみません、笹川さん。先に返ってください。この子知り合いません。」

笹川とよばれた派手な女の人は、さっきまでの攻撃的な声とはうって代わり、

「ふうん。」

と首をかしげた。

「肇<sup>はじめ</sup>ちゃんの恋人？」

「馬鹿言わないでください。」

男は苦笑いした。残りの男達がおおとどよめく。自分で言うのもなんだが、俺は美少年の部類に入るらしい。

「ここからはプライベート、はい、帰ってください。」

お仲間を強制送還した後、男は広川巡査に私の事を訪ね始めた。広川さんは答えに詰まっていた。何しろ、俺が

“このひとだれ？”

で顔していたんだから。迂闊に他人にいらぬ事を話してはいけない。常識だ。

彼はその沈黙を勘違いしたらしかった。

「さっきも言いましたが、この子は僕の弟の友人なんです。僕はこういうものですが」

と言って名刺を2枚差し出した。なるほど、この人はこういう場慣れをしている人らしい。酔っぱらいの割にしっかりしているじゃないか。2枚出した名刺は、名刺が本物である証なのだから。

「弟は高校でボクシングをしています。この勇利君は、そのマネージャーなんですよ。」

「どうやら俺を、補導されたまではいいけれど黙んまり決めた少年Aと勘違いしたらしい。」

「僕でよかつたら話を聞きたいんですが。」

「何ともお固い人だ。広川さんは名刺を私に見せた。」

「木下肇」

「なんだ、基の兄貴かよ。」

「私はずっとんきょんな声をあげていた。」

「その時携帯が鳴った。」

「案の定マスターからのお迎えコールだった。」

「じゃ、そういうことで。広川さん、ありがとう。」

「俺はお巡りさんに手を振ると兄貴をそのままに置いて交番を出た。」

「おつ、ちよつと、待ちなさい。」

「彼は慌ててついてこようとした。振り切れないだろうなあと思いつつ、自分のこんな生活を他人に知られるのが嫌で、厄介だと思った。」

「これからお仕事だから。」

「勝手知ったる道を酔っぱらいやアフターのアフターみたいなお姉様の間を交わしながらすたすたと歩く。かなり酒臭く、相当酔っているはずのこの人はそれでもがんばって付いてきた。」

「君は、何なんだ。」

「しつこく腕を掴まれた。」

「ちっ。」

「面倒くせえ。」

「あそこの交番は、俺にとって喫茶店がわりなの。俺はこれから仕事明けの母親を迎えにいつて、彼女を休ませて、お店掃除のバイトにいそしむ訳。オッケー？」

「眉間にしわを寄せた顔。ま、解るはずが無い。」

「詳しく説明してくれ。仮にも君は高校生だろう。」

それからこう言った。

「こんな事が学校に知れたら、あまりいい顔をされないと思うが、どうだろう？」

なるほど、さすが有名どころ出版社勤務。俺はさっきの名刺を思い浮かべていた。さすがに言葉の使い方が適切だった。

別に学校にばれてもたいした事は無い。その為に絵里子さんのお迎えの時には必ず交番に顔出して悪い事していませんよってアピールしているんだから。でも波風は立たない方が良くに決まっている。だから俺は諦めた。

「ついて来なよ。そこで、説明してやつからさ。」

案の定絵里子さんはソファで酔いつぶれていた。こう見えてお客さんがいる時はしゃきつとしてっているって言うからいたものだと思う。片付け途中のマスターとママさんに付いて来たいらないお客の事を説明する。

「親友の兄貴。来る途中で見つかって、不審がるから連れてきた。」

二人は、

「あつそう、じゃあ、後はいつもどおりよろしくね。」

って感じで何事も無かったかのように帰っていった。さすが水商売。何に動じる事も無い。

俺は兄貴の事は放っておいてミネラルウォーターのボトルを開けると、とりあえずソファに横たわっている絵里子さんの口に含ませた。二日酔いは辛いから。

「この人が私の母親。綺麗な人だろう。いつもは絵里子さんって呼んで。で、ここが職場。かきいれ時は絵里子さんがんばりすぎて潰れちゃった。そのお迎えにくるんで、あの交番でスタンバイしていた訳さ。交番のおっちゃんも古い馴染みだし、ここから家まで車で30分有るから、あそこで待っていた方が都合いいんだ。」

夜遅くなるとここまで来るのに足が無かった。まさか自転車でくる

事はできない。帰りは一応お店持ちだからいいとして、来るのにタクシーなんか使ってられなかった。それなら24時間営業の喫茶店にいた方が金がかからない。

俺は彼にも水を渡した。兄貴は遠慮する事無く

「ありがとう。」

ときれいな仕草で飲み干した。

時計は午前5時を少し過ぎていた。

「絵里子さんはこれから少しここで休ませてもらうんだ。」

この時間に捕まるタクシーは少ない。

「その間、ここの掃除をしたり、在庫の確認をするのが俺のアルバイト。ま、兄貴も疲れていそうだから、そこに座って寝てれば？」俺はそう言いながら椅子をテーブルの上に乗せ始めた。

「でもさ、こんな事、基に話さないでくれるか？」

俺は何気なく切り出した。兄貴のさっきまで見せていた険しい表情はなりを潜めていて、俺のやっている事をじっと見つめていた。この人は真面目な人なんだなって思った。きっと基の事が心配なんだ。仮にも弟の親友が週末の繁華街で交番にいるようじゃ、そりゃ不安だろうから。

自分だってこんな生活が好きな訳じゃない。できるものなら絵里子さんにこんな仕事を辞めて欲しかった。自分の体を切り売りしている様なものだ。でも母さんには母さんのプライドが有って、どうしても自分の力で俺を高校だけは卒業させてやりたいって思っている事も知っていた。

手に職のない綺麗なだけが取り柄の女、しかも40歳だ。親子二人が食っていく為には、自給880円のスーパーのパートなんかじややっていけなかった。

そのくせ俺にはバイト禁止と言うから変なものだ。

唯一やらせてくれるのがこの店の掃除バイト。絵里子さんが酔い

つぶれた日にだけの臨時の仕事。

俺はお店の電球をぜんぶチェックし、傘を雑巾で拭いた。

「俺の自宅での生活と学校の生活は関係無いから。それに俺達は上手くやっているつもりだしな。」

それは兄貴に言うというよりも自分自身に言い聞かせている言葉だった。

少し間を置いて、静かに響く声が

「それはどういう意味で言っているのかな？」

って言って来た。

ああ、頭のいい男は嫌いだ、と俺はため息をついた。

「勇利君は基のことを見くびっているのかい？それともこの僕が君を軽蔑する事を牽制しているのかな？」

そう言う意味でとってほしくなくて、もったいぶった言い方をしたって言うのに。

「まあ、それも有るし。」

俺は少し口ごもった。

「別に親が水商売しているからって基が俺の事を馬鹿にしたりさげずんだりする訳ないって知ってるさ。それに兄貴は仮にも基の兄貴だぜ。そんな人間じゃない。でもこんな」

って俺はあごで周りを指した。

「暮らしをしている事を惨めだと思われたくない。」

そこに有るのは安っぽい調度と糖質のこびりついたボトルキープとイミテーションの“退廃”

「俺の母親がこういう仕事をしてる事、基は知っているけど、見ると聞くとじゃ全然違うだろう。」

俺は兄貴に背を向けた。お店の中はアルコールの据えた匂いといふされたタバコの香りともう一つ、人間特有の嫌な匂いが染み付いていた。

「基の兄貴は俺にとって他人だし大人だから良いけどさ、基は親友だろ？だから同情されるのは辛いんだよ。」



もうそれ以上何も言えなくなっちまって……。

「ああ」

って兄貴はそこで一息ついた。

「そうかも知れない。」

その声は静かで、何もかも呑み込んでいてくれるようだった。振り向くと彼は何とも言えない穏やかな表情を浮かべていた。

「別に軀を売っている訳じゃなし。君は君の生き方を誇ればいい。」だから

「ありがとう。」

俺はいつになく素直な気持ちでそう言った。滲む目を隠しながら。

俺はソファで寝ている二人に毛布をかけた。それから小さな扉を目一杯開いて朝の空気を入れる。

こんな場所でも朝になると朝の匂いがするから不思議だった。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第七話 平凡な幸せ

当たり前のようだがお店の中は汚れていて。それを洗剤をつけた雑巾でひたすらに擦っていく。

本当は業者さんにやつてもらった方が確実に、お金もかからな  
いに違いない。絵里子さんも早くお店から追い出した方がお店の管  
理も楽だろう。

それでも俺を使ってくれるマスターに感謝。その分、業者さんじ  
ややらない所までやらなきゃって思うのは、ほんの少し操られてい  
る気もする。それでも、感謝。

ゴミを出しにいくと、3件となりのスナックのママが大きなゴミ  
を出そうとしていた。この前腰を痛めたと聞いていたから代わりに  
運んだりすと

「ありがとね、勇利ちゃん。」

と優しく声をかけてくれる。どういたしまして。この人は以前帰ろ  
うとする絵里子さんと俺に絡んだ客を上手い事追っ払ってくれた人  
だった。それ以来のご縁だ。

「少年、おしぼりくんない？」

時々見かけるお姉さんが声を掛けてきた。口元を見ると吐いた様な  
跡が有る。

「お姉さん、大丈夫？」

俺はあわててお店に戻りおしぼりと水を差し出した。彼女は水を飲  
み干すと、化粧の崩れなどいっさい気にしないで顔を拭いた。

「ぶあつ。生き返る。」

一瞬でその表情が変わった。

「いつもあんがとう。お礼っていつちゃんだけど、これあげる。」  
そう言って紙袋を手渡した。

「馴染みのお客さんからもらったんだけど、あたしにはどうもって感じでさ。悪いけど、貰ってくんない？」

この人はいつもこうだ。いらないと言っても、人にものをあげるのが好きらしい。多分中身は食べ物だ。

「ゴチになります。」

「うん、いい子だ。」

彼女は俺の肩をポンポンと叩くで行ってしまった。案の定中には北海道産の豪華乾物セットが入っていた。自腹じゃ買えない代物だ。

思わず笑ってしまう。

世の中普通にしていればいい事が巡ってくるもんだなあ、なんて思った。

気がつくと8時を過ぎていた。兄貴を起こそうと声をかけるとすると彼はやんわりと体を起こした。

それから表情の読めない顔つきでこう言った。

「勇利君、こんな事言っちゃ何だけど君には誘惑が多いだろう。最高で一晩いくらって言われた事が有る？」

何を言われているかすぐに解ったけど、まさか基の兄貴からこんな台詞が出てくるなんて思いも寄らなかったから、

「40万……」

って正直に言ってしまった。

「ああ、もちろん、ふざけてだけど。」

慌ててごまかそうとする。いくら何でも絵空事の金額だし、さすがに軀を売るのは勘弁だ。兄の端正な顔がため息をついた。

「いや、妥当な金額だと思うよ。知ってるかい、ホモセクシユアルの男が綺麗な男の子のバージンに払う相場は、女の子の3倍だ。」それからゆっくりとソファに座り直した。

「ただ、そう言う事に直面した時、忘れないで欲しい。いくら大きい金額がついたとしてもそれはお金でしかない。そして値札がついた時点で君は物になってしまう。買われてしまった消耗品は使い古

され、壊わされて、価値が無くなったら捨てられる。君の人としてのコア（核）が無くなってしまふ。その事を肝に銘じていて欲しい。

「なんて説教臭い言葉だろう。それにそんなの今時中学生でも知っている。それでもこの人が真剣に俺の事を心配してくれているのが解った。」

「こんな話しをしたら傷付くかもしれないが、君は男受けするタイプだ。綺麗な顔をしているし、筋肉質の割に線が細い。情にほだされやすくって、純真で、多分だか騙されやすい。タイミングさえ合えば50萬の声がかかるかもしれない。きれいごとは言わない。心も傷付くかもしれないがそれ以上にHIVのリスクもある。現に僕の知り合いで一人、感染者した人がいる。僕は彼を責めるつもりは無いが、周りの人を不幸にしまっている事実は目の当たりにしている。だから君にはいろんな意味で誘惑に負けないでいて欲しい。君を必要だとしている人のためにも知っていてほしい。」

そう言うのと、俺から目を逸らした。

このことを言うのに、大の男でもさぞや勇気が必要だっただろうと思う。

「ありがとう。」

この言葉が好きだ。

「ありがとう。俺、大丈夫だから。」

俺は兄貴の前に立ちその額から鼻筋を指でなでた。

「俺には大切な人がいるもん。絵里子さんに、基。ボクシング部の連中もそうだし。ジムの連中も。さっきのお巡りさんもそう。俺の事、支えてくれているもん。」

切れ長の瞳が緩く開かれ、俺を真っすぐに見つめた。その口元が少し緩んだ。

「ああそうだ。たった今、基の兄貴も加わったぞ。」

俺は自分でも信じられないくらい穏やかな表情を浮かべてしまった気がする。

平凡かも知れないけれど、俺は幸せだった。

e

つづく

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n

第七話 平凡な幸せ（後書き）

兄貴が好きっ

## 第八話 酔い（前書き）

未成年の飲酒は法律で禁止されております。

## 第八話 諍い

それから時々基の家で兄貴と会う事があった。

その度に俺は穏やかな視線を感じていた。

俺は日頃基や他の部員の食い物にうるさい。食い物は筋肉を作るだけじゃなくて脂肪になるし、時として内蔵を痛める事が有る。若いから無理がきくけど、その溜まったストレスが本番直前に出て来るかもしれないからだ。頑張りどころで頑張れなくて後悔するなんて悲惨だと思う。だから毎日体重と体脂肪を測らせ自制を促す。

かといって高校男子、しかも運動部がそんな事聞くはずが無い。

という訳で、月に一回はわざとはめを外すようにみんなに言っているのだ。好きなもの食って、好きなもの飲んで、一晩中騒げ、と。

人というものは変なものでこういわれると欲が減退するらしい。

しかも日頃節制していると、フライドチキンだとかジュースをその日一日にたらふく食べようとするとか体が受け付けなくなっていたりする。だいたい胸焼けがおき、脂っこい食べ物や甘ったるい食い物が嫌いになってしまうものだ。

その反動か、みんなめっぽう弱いくせに酒は好きだった。

基と俺がゲーセンやカラオケやさんの周りにいると事情を知らない女の子が声をかけて来る。いわゆるナンパ？基が乗らない時は、まあだいたいほとんどがそうだけど、ヤツが俺に指を絡め、二人見つめ合つてにつこりすれば解決する。今はやりのアレだな。

でもあんまり頻回にそれをしてっていると他の連中に

「シヤレにならん。」

と笑われるし、別の意味で危ない男から声がかかる事もある。二度三度とストーカーまがいの目に有った事もある。しかも男だし。

ホストになんないかって勧誘も結構しつこい。髪は短いのに私服のせいか18程度には見えるらしい。年齢言つて退散してもらおうとすると、誕生日を教えろとまで言ってくる。



“ 大人になったら男のロマンを見せてやる ”

その意味が分からず少し話を聞いてやったが、たいした事じゃなかった。要は金と女と車の話した。

欲しくないものはいらない。

だからボクシング以外、外で遊んでもつまらなかった。

てな訳で、月に一回ぐらいは仲間と基の家で宴会をするようになった。

やたらとでかいテレビと恐ろしくいい音の出るスピーカーのあるそのリビングは完全防音だそうで、騒ぐならこっちにしろと兄貴に言われ、それでは遠慮なくとおおいに盛り上がった。快適なソファに毛足の長い絨毯。モデルルームみたいに整理され、ともすれば冷たく感じそうな部屋なのに、そこには温かい家庭の匂いが有った。

男二人で住んでいるのに、おかしいや。女二人で暮らしている自分の小さなアパートの方が、80年代のテレビのセットみたいに作りの臭いって思えるなんて。

俺は心の底で小さなため息をついた。

いつだって11時を過ぎた頃に基の兄貴は帰って来る。そして風呂に入った後、もうぼちぼち眠くなり始めた俺たちと、時々一緒に飲む様になっていた。

一応俺達は未成年な訳で、大人というものは注意する義務が有るはずなのに、この人は至つてのんきだった。自分用のウイスキーを持って来て（さすがにこれは飲ませてくれない）いつの間にかまぎれて話しに加わっていたりして。

結構飲んで酔っぱらうんだけど、いらない説教をぶったり、人の悪口を言ったり、責めたりする事は無くて。だからもちろん俺の秘密も守られていた。

今から思えば、そうやってやってくるのは、基や俺たちを心配してくれていたんだと思う。

そんな兄貴だから俺たちは密かに慕っていた。

彼が手にする“バカラ”とか言う重たいグラスを見る度に、この人は成熟した大人で、この7年という歳の差は一生埋まらないんだって思った。でもそれと同時に、超えられない存在がいる事に何とはなしに喜びも感じていたんだ。

兄貴が基の自慢だつて事はみんなが知っていた。頭がいいとか、カッコいいって事じゃない。兄貴は俺達“子供”を“大人”と対等に扱ってくれていたからだ。

だからその夏休みの夕方も特になんの問題も無いはずだった。

基は俺を抱きたいとき下唇を噛みながら俺を見つめる癖が有る。部の帰り道に二人で歩きながら時々感じる気配で分かるようになった。

部の練習はキツく、全員がへとへとだった。その反動だろうと思うけど、基の性欲は増していた。

それは基との約束だから。基が抱きたい時に抱いてもいいと。基がボクシングに打ち込める為なら抱かせてやると。ただしあくまで体だけの条件だった。

ダッチワイフ。それがこの時の俺の名前だからな。

その日もいつものように彼の為にダッチワイフになった。

彼の家に着き部屋に上がる。扉が閉まったその瞬間から俺は基のモノになる。

2度の行為の後、シャワーを借りた。微かに疼く女を俺は冷たいシャワーで完全に洗い流す。

基の部屋を出るとまるでスイッチが切り替わったように俺達は親友に戻った。

基はできた男で、たとえ暗がりの部室でも、深夜の帰り道でも、二人きりのリビングでも一片たりともそのそぶりを見せた事が無い。見事なまでに自制されていて、ともすれば油断しがちな瞬間でも決して気を抜かない。だからこそ最近では抑制が外れた彼のベッドの上が怖かった。

彼はそんな俺の不安を知らない。

それでもいつもみたいに夕飯を作り、ボクシングのタイトルマッチを見た。

スーパージョー級だから基より少し重い。というか、本来基の身長でフェザーは軽過ぎだと思う。もしかしたらそこがこいつの限界かもしれないと薄情にも思った。彼はボクシングだけをするにはあまりに魅力的だ。高い身長に長い手足。よく動く足。優秀なアウトボクサーだけれど、彼の“太らない”は“筋肉も太くなれない”と同義語だから。

でも大会まで残り10日。その不安はもう忘れる事にした。

俺達は試合展開の話しなんかしながらじゃれていた。もちろん、友人として。

そこに兄貴が帰って来た。

早い帰宅だというのに、いつもよりも疲れて見えた。

案の定不機嫌で、俺は何となく嫌な予感がした。

「帰れ。」

兄貴の言葉は簡潔だった。その言葉にはあからさまに俺を嫌がる響きが有った。

何が気に障ったのか分からない。

なんだよ、いつの間に俺の事がそんなに嫌いになったんだよ。何か悪い事したって言うのかよ。俺は動揺した。俺はこの人が大好きだったのに。俺と基の関係にお前は関係ないじゃないか。それに俺は好きでここに来ているんだ。そう思いながら、胸がちくちく痛んだ。

好きでいる？嘘だ。

本当はそれだけじゃない。それを思い出したとたん、俺は無償に腹が立って来た。

そうだよ、俺は薄汚いよ。兄貴みたいにいいお育ちで、順風満帆いい大学でて立派な仕事に就いている人間になんか分ないだろうよ。俺は自分の事切り売りしているみたいなものだもん。援交してんのと変わんねえよ。もらうものが現金かどうかの違いでさあ。でもさ、それでも手に入れたいもんが有るんだよ。俺にはそれが必要なんだ。

でなきゃ俺だって壊れちまう。

「俺にはボクシング以外、しがみつけるものが無いんだから！！」  
気がついたらその言葉を吐き捨てていた。

何も言えなくなった俺を兄貴は送ると言った。あいにくの土砂降りだ。自転車じゃ帰れない。しかも金曜日。俺は引きずられるように車に押し込まれた。

「勇利君がそこまでボクシングに固執するのはどうしてなんだ。何か“好き”以外の理由があるはずだ。」

兄貴の口から出た言葉は空気の様で何を言われたかすぐには分らなかった。でも、ほんの少しの時間を置いて、なにを言われたのか解ると、それは痛い痛いカマイタチになって俺を襲った。

「はっ。」

きつとこの人は俺の悲しみを分かっちゃい無いんだ。そう、悪気

なんか無いんだと自分に言い聞かせる。

兄貴の車は時速60キロを保ち、俺の家へと向かう。この人は自制心の固まりで、急ブレーキを踏む事すらさえ無い。そして俺は信号機の赤を滲ませた。

「君は泣き虫だな。まるで女の子みたいだ。」

彼はそう言うところさいほどによく降る雨の中、車を路肩に止めた。「僕は君を泣かせたい訳じゃない。」

でも、俺は泣いていた。泣くつもりなんかあるもんか。誰が泣きたくてなくんだ？それでも涙は止まらなくて、悔しさのあまり、噛み締めた唇が千切れた。

泣くつもりなんか無かった。

彼は俺を抱きしめた。

何考えてんだ、こいつ。

でも、俺の涙は止まるどころか、勢いを増していた。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第九話 理由

どうして話す気になんかなったんだろう。それは多分、兄貴の腕の中があまりに暖かくって俺はほだされていたんだと思う。

「父ちゃんが死んだ時、俺は8歳だった。」

俺には人には言いたくない秘密がまだまだ沢山あったんだ。

喧噪の中、ひどく大人のその人たちは汗を飛び散らせていた。パン、パン、パンとリズムカルにパンチングを繰り返す音。リング越しに怒声を放つおっちゃん。ボクシングジム。普通の子供は近寄りもしないだろうけれど、俺にとってそこは遊園地だった。

「ゆーりちゃん、ゆーりちゃん。」

オナーが俺を呼ぶ。

「今日も可愛いな、ゆーりちゃん。大きくなったら、ここのジムのマスコットになるんだよ。」

すると父ちゃんが大きく頷く。

「そうだ、そうだぞ、遊里。お前は父ちゃんの自慢の子だからな。」

「うん。」

「大きくなったら、ここのジムを宣伝して盛り立てるんだぞ。」

「うん。」

父ちゃんは白い歯を見せて笑った。14オンスのグローブが似合っていた。

父ちゃんはボクシングが大好きだった。今じゃ目を悪くしているけれど、昔はプロをしていた事が有ると言う。だから今でも時々こうやってアマチュアのジムで遊ばせてもらっていると言っていた。そんなカッコいい父ちゃんが大好きだった。

通って来ている人達はみんな父ちゃんの事を

“先輩”

と呼んで、隣りにいる俺の頭を撫でてくれた。

「いい子だね。ボクシング、好きかい？」

もちろん答えはこうだ。

「うん、大好き！！大人になったらボクシングの選手になるんだもん！」

みんなに笑われても恥ずかしくなんか無かった。

「そんな良い子の遊里ちゃんに、良いものをあげようね。」

そう言われて受け取ったのは見た事も無いほど大きなチョコレートケーキで。どうやらジム出身の選手がプロの初戦で勝った記念に貰ったものらしい。

父ちゃんは祝賀会が有ったから、俺は一人飛ぶように家に帰ってもらったケーキを母さんに見せびらかした。

その晩父ちゃんは死んだ。ジムの友人達と飲んだその帰り、酔っぱらいのけんかを止めようとして入ったその先で、軽くこずかれもつれた足下の小さな縁石に足を取られ、帰らぬ人になった。

てこの原理。そんな事だ。

したたかに打った頭蓋骨。

病院搬送直後に死亡確認されたと言うから、人の人生って何だと思っ。

父ちゃんもかなり飲んでいたと警察の人は言った。広川と名乗るそのお巡りさんはひどく申し訳なさそうに話した。

「双方、酒に酔っていたようです。」

少しずつ大人になりながら、双方の“双方”って誰のことを言っていたんだろうと時々思い出す事が有る。

けんかしていた人たちか？それとも、父ちゃんか？？と。

俺と絵里子さんに残されたのは、3冊のアルバムと楽しかった思い出だけだった。

いつしか、絵里子さんは夜の街に働きに出るようになる。いわゆる、母子家庭だ。お酒の飲めなかったはずの絵里子さんは気がつい

たらザルと呼ばれるようになっていた。朝になるといつの間にか隣りで寝ている、ひどくむくんだ顔の母さんに水を飲ませてから学校に行くのが俺の生活になった。

だから

「夢にしがみついて、ナニが悪い。」

俺の声は震えていた気がする。

「父ちゃんと俺を繋ぐものはボクシングしか無いんだよ。」

ジムのオーナーは俺を実の子供のように可愛がってくれた。時代の流れか健康ブームでボクシングの人气が高まり、沢山の人がジムに出入りしていた。学校帰りから深夜まで俺はそこにいた。だってそこには俺の居場所が有ったから。

「基には、こんな話、しないでくれ。」

ほとんど懇願に近い形で俺は呟いた。兄貴にだからこそはなせた話なんだ。

「あいつにこんなしみつたれた話なんか聞かせたくない。」  
本当は誰にも話したくなかった。

「こんな女々しい俺は、本当の俺じゃないんだから……」  
本当の俺は、もっと強いんだ。決して誰にも負けない。俺は泣いたりするもんか。泣いたって勝てやしないんだから。

気がついた時、俺の携帯が鳴っていた。

「もしもし。」

声の揺らぎが相手に伝わらないように囁く。

マスターからだった。時間は１１時を少し過ぎたばかりだ。



今晩は雨降りで客の入りは少なかったと言う。そのせいで彼女は常連さん相手にピッチを早めてしまったらしい。

「今、行きます。」

俺は明るい声で返事をした。店のオーナーはいい人で俺達を大切にしてくれているんだから、つまらない心配なんかかけたくない。

不意に兄貴が車を 発進させた。

「お母さん、迎えに行くのか？」

「うん。」

「こんな夜はタクシーだつてすぐ捕まらないから、濡れないように送っていつてあげよう。」

その声に同情とか哀れみなんか無くて、ただ物静かな兄貴がいた。

隣りにはありがとうさえ言えない俺がいた。

俺達をアパートまで送ってくれた兄貴は帰りがけに言った。

「インターハイまでは全力を尽くしなさい。でもそれが終わったら今度は君自身の人生を生きるんだ。今の君を否定しているんじゃない。でも今しか出来ない事もある。学生だからこそできる勉強や、学校での生活とか。だからもう少し自分に甘くなりなさい。力を抜いて。君は一生懸命すぎるんだ。一人で何もかも背負う事は無い。重すぎる荷物は人に預ける事も必要なんだ。基に相談できなければ、僕でもいい。いくら頼ってきておかまわないから、もし話を聞いてほしいと思ったら、その時は連絡をくれないか。」

名刺を一枚手渡された。また泣きだしそうになる俺を見ずに兄貴は去っていった。

どうしてこの人は基の兄貴なんだろう。

どうして神様は俺にもこんな兄貴を授けてくらなかったんだろう。俺にも基の兄貴みたいな人が欲しかった。

その時の俺はボクシングのベルトよりもっと大事な事が有るって気づいてしまった気がした。

つ  
づ  
く

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

## 第九話 理由（後書き）

ゆりの名前がややこしいと感じだと思います。 勇利・遊里・優里 すべて“ゆり”とお読みください。 どうして表記が違うのか、後半で出てきますのでお待ちくださいね。

## 第十話 青春の終わり

真夏のインターハイはあっけなく終わった。

ボクシングは総体全体の一番最後の日程で、蝉が地鳴りのように鳴いていた事を覚えている。

そう、何もかも終わった。俺はうなだれる基の腰を抱き引き寄せた。

「いい顔しろよ。」

それから控え室の方へ足を向けると、応援席にいた友人達に大きく手を振った。カメラのフラッシュが真っ白い旗のように翻る。俺は拳を突き上げ、歯をむき出して笑った。基にかけた腕に力がこもる。そこでようやくと彼が顔を上げた。

呆然とした、やるせないような顔。

俺は無償に腹が立った。基には全力を尽くしたと言う自信が無いのだろうか。あれほどまでに出し尽くしたのだ。勝てなかった事に価値が無い訳では無いのに。泣き言を呟く基を蹴り倒したいほどだった。可愛さ余って憎さ百倍というヤツだ。

俺は中途半端な慰めの言葉をかけようなんて思わなかった。

少なからず俺はやった。基の為、ボクシング部の為、何より自身の為、この2年と半年全力を尽くす事ができた。その結果がたとえ他人には不本意だったとしても、俺は堂々と胸を張っている事ができる。

「俺にとってお前はスーパースターなんだよ。」

インターハイベスト8。それを人はなんと評価するだろう。

“ 緩い（ぬるい） ” なんて言うヤツがいたら俺がぶっ飛ばしてやる。

そして2学期が始まり、生活は別の忙しさを見せ始めた。

ボクシングにかまけていて手つかずだった諸々が押し寄せてきたんだ。さすがに進路の希望も具体的になる。体育祭もあり、学祭もあり、目白押しだ。部の引き継ぎも思ったより大変だった。

今まであまりに自分一人で背負い込みすぎていた事をさすがに反省した。あの時言われた兄貴の言葉を思いだし、ともすればため息が出そうになる。その引き継ぐ内容をまとめる為に土曜日だというのに登校し、やっとの事で一段落つける事ができた。あとは新しい主将とマネージャーで仲良くしているライバル校に挨拶に行くだけだ。その帰り道、基が

「久々に勇利の飯が食いたいなあ。」

なんて言い出した。この1ヶ月ほど基の家に行っていなかった。

「もう減量の必要も無いからさあ、たまには肉が食いたいなあ。第一さ、お前が夏休み中毎日まともな飯作るから、食えなくなると辛いんだよ。」

基は男のくせによく口が回る。

「作んねえぞ。」

俺は笑った。

インターハイも終わり俺達の関係も一段落つくはずだった。話し合ったことは無かったが、距離を置き始めていたし、暗黙の了解だと思っていた。

「頼むよ女房殿。俺達さあ最近ろくなもの食ってないんだよな。脚気になりそう。」

“俺達”が誰を指しているかすぐ分った。今日は休みの日で兄貴が家にいると言う事だろう。

あれ以来基は兄貴と俺に気を使っていて、俺に向かって兄貴をかはうような事を言う。

「兄貴も勇利の事、気にしているんだぜ。」

などと。でもそんなこと分っていた。離れていても兄貴は俺の事心

配してくれているって知ってた。

「じゃあねえなあ、今日だけだぞ。」

さすがに兄貴のいる家で基も手を出してこないだろうし。それにもう寝たくない事をはっきり告げて、決着をつけたい気持ちも有った。俺達はスーパーに寄り基の家に向かった。

兄貴はいなかった。何となく騙された気もするが、とにかく飯を作る事にする。

基はダイニングテーブルノートに参考書を広げ勉強しようとしているかの様に見えたが、思いついた様に床に転がりストレッチを始めていた。

俺はそれを漫然とした気分で見ていた。

彼は大学進学希望組で、しかもかなりレベルの高い所をねらっているから、本当はもつとがつつ勉強しなければいけない身分のはずだ。

いったい何をやっているんだろう。そんな余裕は無いはずなのに、と。

インターハイで獲ってきた盾は飾られる事も無く、リビングにあるゴージャスな食器棚の上の耐震用の突っ張り棒の横に置かれ、埃を被っているようだった。

親友としての基に迷いが有るって事を俺は感じていた。

俺の方はというと専門学校が希望でそこまでする必要は無い。ま、奨学金とるにはいい成績とらなきゃいけないんだけど。

いつもの習慣で俺は作った食べ物情報をノートに書き残していた。カロリーや栄養バランス、味の特徴を記録しておきたかったから。

3年後鍼灸師の専門学校を卒業し就職したら、お金を貯めて通信の大学に行きたいと思っていた。そこで栄養学の単位を取り、いつか本当のトレーナーになりたかった。さすがに大学に行くほどの余裕は今の家には無い。だからいつかそうなりたいと思う、その気持ち

ちを込めて書いていた。

プレートに今日のメインのミートローフの固まりを乗せる。それからトマト、カボチャ、ジャガイモ、パプリカも加え、表面を油で掃いた。オーブンにそのプレートを入れ扉を閉めた瞬間、そのガラス越しに、いつの間にか背中に立っていた基と目が合った。

彼は唇を噛み締めていた。

ああ、来る。そう思った。

ゆっくりとオーブンのスイッチを入れる。もう、話さなければ・・・。

「もと・・・」

言いかけて、後ろから抱きしめられた。

L e t A l o n e

つづく

## 第十話 青春の終わり（後書き）

昔、勇利・アルバチャコフ というボクシングの選手がおりまして、彼のボクシングが大好きでした。とにかくそのスタイルがクール！！無駄な動きがなくて、的確で、軽やかで。クロスカウンターって天才の武器だっと思っていましたね。あはんっ。

拳を突き上げて“ノープロBLEM！”ってのもかつこ良かったあ。

この話に出てくる“俺たちのガッツポーズ”は二人が彼のスタイルを意識していたというオタクな暗示なのですが、さすがに“ノープロBLEM”と言わせたならボクシング大好き様達から嫌われると思います。

ながっ



## 第十一話 亀裂（前書き）

合意の上ではない行為が書かれています。お嫌いな方はパス願います。ご免なさい。

## 第十一話 亀裂

「勇利……」

柔らかに抱きしめられているはずなのに身動きが取れない。

「こうしていると、俺達新婚さんみたいだと思わないか？」

彼の唇が首筋に当たる。彼の軀はしなやかで決して不快な訳じゃない。むしろ心地いい。だから、それがいけない。

「約束が違う。」

俺は首を回した。基のため息がかかる。腕が離され自由になったと思った瞬間、彼の肩に抱え上げられていた。こんな事は初めてだ。

「ちよつ、何すんだよ。」

その状態で抵抗なんてできなかった。ずんずんと階段を登られそつとベッドに下ろされる。

俺の目を基が覗き込み、何か言いたげに瞬いた。

「基……話しがしたい。」

「ああ。」

彼はそのまま俺を見つめた。

「分っている。でも、後で。」

唇がやんわりと当たる。初めて基に抱かれたときは天と地のやり方で彼は誘いをかけるようになっていた。

「後で必ず聞くから。でも話しは後で。今日は部でさんざん話したからさ。」

唇が軽く噛まれ、放され、再び合わさる。

「少し、休ませてくれ。」

紙一枚も入らないほどの近距離で唇越しに囁かれる。彼のこつこつした指からは想像できない様な繊細なタッチが頬を伝わる。

「何を話したいか、分っている。だから……。今までの分のこ寝美をくれないか？」

彼には俺がもう寝たくないと言いたい事が分っている、そんな気が

した。だからこれが最後だと自分に言い聞かせた。

基の腕の中で乱れる自分の映像が頭の中で揺れる。本能のままに彼を受け入れ、その快楽に身を任せてしまいたい。好きだとか、愛しているだとか友情だとか何も考えずに済む世界に行けたらどんなに楽だろう。肩に手をまわし、引き寄せ、体中を摺り合わせ、しならせ、唇を噛み声を殺す事も無く。

彼の熟知した愛撫が俺の全身を這う。それでも何かが違うとどこかで囁きが聞こえる。何かが逆らっている。

俺はシーツを選んだ。それをキツく掴み、基が期待する様な反応のすべてを否定した。

それでも二人は高まった。もうすぐ放り出されてしまう。その気配を感じ始めたその時、音がした。玄関の柵が開く音、そして閉じる。その瞬間、俺の軀が石になった。

誰もいないはずの階下から呼ぶ声が聞こえたのだ。

その声の主は当然の事のように俺達がいると知っていた。そして俺の名前が呼ばれる。

嫌だ！！

俺の中で何かが蠢いた。嫌だ、嫌だ、嫌だ。

基を突き放した。ここは俺がいる所じゃない！！

全身に恐怖が走った。

兄貴には知られたくなかった。もし俺が本当に基を好きだったら

違ったと思う。もし本気で愛していたのなら、何も恥ずかしがる事など無くて、見つかつて堂々としていれたらう。愛し合ってさえいれば。

兄貴が帰ってきた事を基も気づいていた。だからあいつも少し体を引き距離をとったんだと思う。でもそのあきらめの表情の後、ゆるやかに目が吊り上がり今まで見た事のない顔つきにかわったかと思うと、離れようとする俺にのしかかってきた。

駄目だ！！

彼はあつという間に俺を押さえつけた。

嫌だと叫ぼうとする口を塞がれ、俺の四肢は意味も無くあがいた。基の全ての力を全身に受けながら、もうどうにもなら無いと悟る。

兄貴の気配を感じた。階段を踏みしめている感触が伝わる。もうすぐこの部屋にやって来る。

目の前が一瞬白くなる。

薄い壁一枚隔てて兄貴がいる。それをまるで鏡に映しているみたいに感じ取っていた。

肌が粟立つ。

来るな！！

心は嫌だと叫んでいるのに、軀の一部は女である事を歡ぶ俺を見ないでくれ！！

レイプと言えば身もふたもない。和姦というぐらいで勘弁つて所か。兄貴が入って来なかった、それだけが幸이었다。俺は基に背を向けた。激しすぎる行為のせいで俺は久々に血を流していて、あれほどつけるなど言っていたキスマークが胸元に残っていた。こんな事が有ったんだ。距離を置こうと切り出すのは簡単だった。

でも、言い出したのは基の方だった。

「しばらく二人きりなのはよそう。」

一瞬彼は視線を落とした。

「もう抱かない。な、聞いてくれ。俺達、普通の恋人同士じゃないって事分ってる。でもこのまま終わらせるのは嫌なんだ。」

基はあごを上げると思い詰めた顔つきで俺を見据えた。

「愛してる。愛してるんだよ、勇利の事。一生大事にしたいんだ。」  
その目は悲しいくらい澄んでいて。

「きちんと距離を置いてみせる。大学決まっつて、高校卒業したら、改めてお前の事迎えに行く。それまで心を決めていてくれ。それまで辛抱する。お前に愛してもらえる様な男になるから。」

基は諦めないと言った。そう、彼は諦めないだろう。

この日初めて彼は俺を愛していると言った。

彼がずっと口にしたかった言葉だつてこと、俺は知っている。それでも彼はそれを隠して来た。

それだけ基の気持ちが深い事に気づいていた。

この時の俺はきつとまだ基に未練が有ったに違いない。だから彼にきっぱりと別れを告げる事が出来なかった。動揺させ試験が失敗する事を恐れていたんだ。

その事を俺は一生後悔する事になるとも知らないで。

ただそれから二度と基の家には行かなくなった。

元々クラスは違う。学校の廊下ですれ違えばいつもと変わらなかった。たまに覗きに行った部室で時々会う事もある。帰り道が一緒になる事も何もかも以前と変わらなかった。つまり、寝なくなった。それだけの事だった。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第十一話 亀裂（後書き）

あの、皆様。よろしければ感想など頂けないでしょうか……。家内制手工業的に黙々書いておりまして、少々寂しく感じております。

あ、ちなみに最後はきっちりハッピーエンドさせますんで。御心配なく。

## 第十二話 会いたい人

記憶に有る限り元旦の朝は必ず晴れる。どうしてだろう。

俺は薄暗がりの中で夜明けの匂いを嗅ぎ取っていた。

昨夜は皆さんスパークしたらしく、お店の床は紙吹雪やらワインの栓やら紙でできた帽子やらでぐちゃぐちゃに汚れていた。

ぐっすり酔いつぶれている絵里子さんを起こさないようにそっと床を掃く。今日はお湯で床を洗い流した方が良さそうだった。本当は洗剤を直接ぶちまけたかったけどさすがに絵里子さんにキツいなあ、なんて考えてやめた。

あの夏の日以来基との距離は保たれたままだった。つい6時間前、ボクシング部恒例の初詣で会った時には少し顔が丸くなっていて笑えた。

3年生は全員絵馬を書いてきた。

“ 希望大学に合格しますように ”

と癖のある字で書き込む基を尻目に、

“ 世界平和 ”

と書き込む。

「 勇利はミスユニバースかよ。 」

笑う部員に、

「 世の中平和じゃなきゃ、いいタイトルマッチが巡らないだろ。 」

と返すと全員がなるほどと頷いた。

隅っこで嫌にこそこしている井ノ原の手元を基が覗き込み、一瞬表情を止め

「 上手くいくと言いな。 」

と呟いていた。

“ 彼女と幸せになれますように ”

隠すように取り付けられた絵馬にはそう記していあった。

その帰り道、深夜2時。基が途中まで送ってくれた。こんな日だからこそなのか絵里子さんはお仕事で、俺はお迎えの為に待機しなければいけなかった。でもさすがにこの夜は交番に行く事もできない。交番も超のつくかきいれ時だ。いつもの週末なら担ぎ込まれて来る困ったちゃんの相手をしてやったりする物だけど、年末年始は様相が変わる。ヤバい事もある。

インターハイが終わった後、暇を持て余していた俺は最近家の近くに出来たジムに遊びに行く様になっていて、そこで知り合ったホストの駿ちゃんしゅんちゃんと仲良くなっていた。それで彼が先輩と共同生活している、母さんのお店に近いマンションで時間つぶしをさせてもらう事が多くなってきた。どうせ夜はお仕事だから彼らはいない。その間俺は部屋の掃除や洗濯といった事をして時間を潰していた。でも基には話せない事情だから、何の説明もせずそこまで送ってもらった。

見るからに賃貸のベランダの無いマンション。

基もなぜそこに送ったのか聞かなかった。聞きたかったに違いない。彼の目は俺をにらみ伏せられた。

「じゃあな、受験勉強、がんばれよ。」

言い捨てて、基が何か言い出す前にエントランスを抜けエレベーターまで走った。

その事を思い出しながら、俺はお店の中で空き瓶を数え仕入帳にメモを残した。基の気持ちに応える事は出来ない。でも受験を控えた今の彼に言う事も出来なかった。

その時だ。店の外で車の止まる音がした。そのくせドアの開く音がしないから誰か道にでも迷ったのだろうかと俺は気になって外に出た。

そこにいたのは兄貴だった。

3ヶ月ぶり、かな。俺の胸がじんわり熱くなった。

疲れた顔に無精髭が浮かんでいた。いつもは飲んで酔っぱらって



いる時でさえエリートサラリーマンらしくしているのに、今日に限ってリストラされた会社員のようにはやえない。

分かって来ているはずなのになぜか彼は俺を見て驚いた様な顔をした。声を掛ける気はなかったのかもしれない。ああ、不味い事したのかな、そう思っただけで喜んでしまった事を後悔した。

そうだ、兄貴には俺と基が寝てる事知られてるんだった。

それでも兄貴の態度から冷たさは感じられず、特に用はないと言う。

「たまたま帰る途中だった。」

の口調に俺はわざわざ会いに来てくれたって事を感じとった。嬉しくないはずが無い。だって、さっきは涙が出るかと思うぐらい感動したんだから。

期待を込めて寄って行く事を勧めた。汚い店内だけとかまわなかった。兄貴には既に知られている事だし、取り繕うのは柄じゃない。今度は何をつつかれるか正直びくびく物だったが、肝心の兄貴はさつさとこの前のソファまで行くところりと横になってしまった。

家まで送って行くよ。とそう聞こえた気がする。タクシーがつかまらないだろうからと。

兄貴がいると空気が変わる。文句無く仕事が楽しくなった。

兄貴が基の兄貴じゃなかったらいいのに。

基の兄貴じゃなかったら、ここに寄る事なんてないんだろう、そう分っちゃいるけど、でも、兄貴が純粹に俺の事を気にしてくれてここに来てくれた、そう思い込むのも正月ぐらい許してもらえたらどう？

L e f t   A l o n e

つつく

## 第十二話 会いたい人（後書き）

応援のコメント有り難うございます！

## 第十三話 消えない罪悪感（前書き）

幼児性愛者の話が出てきます。ふぁっく！！な人は後ろ半分でお願  
いします。・・・でも惨い事にはなってません。

### 第十三話 消えない罪悪感

結局兄貴は俺達のぼろアパートに来た。兄貴が俺の事を男だと信じてくれていてよかったと思う。どう見ても治安の悪い、1階角にある日当りの悪い最低賃貸料の我が家は、とうてい母娘が住む代物じゃなかった。もっとも身寄りの無い母子家庭はもっと酷い所に住む事もある。融通の利かない母子寮で内職しているよりましなんだろうなんて、えげつない事を思ってみたりして。そう考えて、自分の馬鹿さ加減に落ち込んでしまう。

兄貴は失礼の無いようにとそつと部屋を伺っていた。どのタイミングで帰るか迷う兄貴を食い物で呼び止めた。コンビ二弁当のご常連さんは案の定食いついてきた。

俺の顔色を見ながら雑煮をすすする兄貴が理由なんか分らないけどおかしかった。

「毒なんか入っちゃいないよ。」

悪態までついてしまう。まるで迷子のグレーテルにおやつをあげている気分だった。騙しやしないって。

三杯目も平らげた兄貴は少し眠そうに目を擦った。

もう少し、ここにいてくれると嬉しいなあ。

その肩に手を置いた。思ったとおり酷くこっついていて、俺の指の方が音を上げそうだった。

「かってえ、兄貴、働き過ぎ。」

無理矢理うつぶせにして肩を揉んだら兄貴が悲鳴を殺した。そりやそつだ。俺のマッサージはスポーツマッサージから教えてもらっているんだから。初歩的な技術だけど効く事は請け合で、その分かなり痛い。気合いを込めてのしかかるから時々俺の髪が兄貴の襟足に触れていた。

兄貴の体は一見した所身長や歳の割には細かった。兄弟で太りず

らい体質なんだろう。うらやましい限りだ。俺は生理の後に油断するとときめんに太る。だからケーキやチョコレート、スナック菓子なんか絶対食べられなかった。ラーメン餃子も御法度。でも正面から見るとほっそりしている兄貴の体は以外とがっちりしていて、日本人らしからぬ体格だった。いわゆる身が厚いと言うヤツだ。特に背面の筋肉が発達していた。

「兄貴もボクシングやつとけばよかったのに。」

そうしたら基よりも前に兄貴に会えたかもしれないのに。

ぼうつと夢みたいな事を考えていた俺に、兄貴は突拍子も無い事を言い出した。なぜ今時の若者らしく髪を染めたり伸ばしたりしないのかと。

その質問に一瞬凍った。いやな過去を思い出す。せつかくいい夢を見ていたのに叩き起こされた気分だった。

「髪の毛いじるのってさ、頭の悪い馬鹿な女みたいだと思わないか？」

「君らしくないことを言う。」

兄貴はそんな風に俺のことを言った。

誰かが優しい声で諭すように言う。

「遊里ちゃん、遊里ちゃん。遊里ちゃんはママが大好きだよ。」

「うん。」

「そしたら、ママの為に何でもする？」

「うん。」

「じゃあ、おじさんというママが幸せな事、知っているよね？」

「うん。」

「それならおじさんがママの事これからもずっと幸せにしてあげね。」

「うん。」

「その代わりおじさんの事は遊里ちゃんが幸せにしてくれないとね。」

「遊里が？」

「そうだよ。ママの為にね。」

おじさんはネクタイを緩める。

「それでママが幸せになるの？」

「そうだよ。おじさんのこと遊里ちゃんが幸せにしてくれたら、それ以上にお母さんの事を幸せにしてあげられるんだけどなあ。ママに新しいお洋服を買ってあげるし、三人で遊園地に行つてアイスも食べよう。チョコレート味でもバナナ味でも何でも選んで良いよ。」

「本当に本当？」

「約束したじゃないか、遊里ちゃん。おじさんが嘘つくと思つた。」

「分らない。」

「おじさんの事信じておくれ。」

おじさんはやわやわと髪を梳く。それから時々口を含む。汚いつて思つた。

「でもね、この事ママに言っちゃいけないよ。ママね、おじちゃんが遊里ちゃんのこと好きだつて知つたら怒るかもしれないから。そうしたらママと一緒にいらなくなつちゃう。」

「うん。でもどうして？」

「だつて、ママは遊里ちゃんも好きだけど、おじちゃんの事も好きだろう。おじちゃんが遊里ちゃんの事一番愛しているつて勘違いしたらいけないじゃないか。ママの事はおじちゃんも遊里ちゃんも同じくらい大好きなんだから、ね。だからこれからおじちゃんとする事、ママには絶対言っちゃいけないよ。」

「言っちゃいけないのね。」

「もちろんだよ。お約束。二人でママのこと幸せにしたげようね。」  
その手は奇妙にべたべたしていて、おじちゃんの荒い息が怖かつた。  
凄く、凄く、いやだつた。でも、我慢しなくちゃいけない、ママの為に。

絵里子さんはそのとき既にお店に出勤した後だつた。

おじさんは金縁の眼鏡を外す。

「おじちゃんね、遊里ちゃんのこの髪がとっても好きなんだよ。」

おじちゃんが電気を消そうと立ち上がったその時、部屋をノックする音が聞こえた。

その音に俺は救われた。

「遊里ちゃん、いる？」

それは親父が死んだ事を伝えにきてくれた警察の人だった。あれ以来時々俺達の事を心配してくれていたのだった。

「はい。」

俺は心の内をおじちゃんに読まれないようにしながら奥の間を飛び出しドアを開けた。

「うわあ、カッコいい。お巡りさんってやっぱり違うね。」

いつもは自分の服を着ているのに、今日に限って広川さんは制服を着ていて、とても凛々しかった事を覚えている。

「今日はもうお仕事終わり？」

「そう、今日の勤務は終わり。帰る途中だったんだ。遊里ちゃんは今日独りでお留守番なの？」

「うん……。ママ。お仕事だから。」

すると広川さんは俺の頭を優しく撫でてくれた。

「お利口さんだなあ、遊里ちゃんは。ご褒美に、ほら、チョコレートを持ってきてあげたよ。何たって今日はバレンタインだからね。」

「わあい。」

俺は相変わらずチョコレートが大好きだった。

「ありがとう、おじさん。」

すると広川さんは苦笑いした。

「そっか、“お兄さん”って呼ばなきゃいけないのね。」

手にしたハート型の箱が嬉しかった。そのままぴょんぴょんと飛び跳ねるから、短いスカートがパアツとめくれ上がる。

「遊里ちゃんは女の子だからそんなおてんばしちゃういけないよ。」

広川さんがたしなめる。それまで誰にも

“女の子だから”

なんて叱られた事は無かった。

「どうして？」

首を傾げる俺に広川さんはばつが悪そうに言った。

「女の人はね、子供を産む事ができる事知っているよね。もうすぐ遊里ちゃんも産めるようになるんだよ。だからその時まで大切になかを隠しとかなきゃいけない。ほら、遊里ちゃんは美人だろう。」

「うん。」

俺ははずかしげも無く頷いた。だって、みんなが俺に向かってそう言うものだから。

「美人さんは特に大事に守っておかないと、いい赤ちゃんが産めなくなっちゃうんだよ。知ってるよね？」

「うん、知ってる！」

本当は知っているはずも無く、少しでも背伸びをしたくって返事をした。

広川さんが帰った後一緒にチョコを食べようとおじさんを誘った。さっきの続きをしたくなって延ばそうとした。

と、おじさんは急に用事があると立ち上がり、家を出てそれっきり。

俺は一晚中泣きたい気分で待っていた。でもおじさんは帰ってこなかった。

ワタシが素直におじさんの言う事を聞かなかったからだ。嫌だっ  
て気持ちが悪かったんだ。だからおじさんは幸せになれなくなってしまっ  
て、出て行ってしまったんだ。本当はもっともって我慢しなく  
ちやいけなかったんだ。ワタシがママの事を不幸にしまったん  
だ。

そのくせあの髪を撫でられる感触を思い出し、鳥肌が立った。  
そうだ、この髪が悪い。その時はそう思った。このみんなが褒め



てくれる綺麗な髪が悪いんだ。綺麗な顔も悪い。もしおじちゃんがこの髪を気に入らなかつたら、こんな事にはならなかつたのだ。俺は見境無く髪の毛を切つた。裁ちバサミでじょきじょきと。広げた新聞紙の上に黒い蛇がとぐろを巻いているみたいだった。

何もかも自分が悪い、そう信じていた。

自分がママの幸せを奪ってしまった。なんてね。

今じゃそうじゃない事ぐらい、頭では解っているけどさ。

でもね、あの時の不快感以上に、その罪悪感が消えないんだ

L e f t   A l o n e

つづく

## 第十三話 消えない罪悪感（後書き）

勇利の事をいじめている訳ではございません・・・。

## 第十四話 誤解

静かになってしまったせい、しばらくマッサージをしていると兄貴は小さな寝息を立てていた。全く無防備な顔をしている。この人でもこんなだらしない顔をするのかと不思議になるくらいだ。マジックでちょびひげを描いたら怒られるかな、いや、いつそのこと写真を撮ってみようかしらん、などと考え独りで笑った。

予備の布団なんか無いから自分の布団を持って来る。しかも床暖なんて高級な物も無く、兄貴の下に敷き込むように布団をかけた。仕方が無いからその横に潜り込む。寒いのは苦手。体脂肪12パーセントは女の子の身にはキツイ。まあ、女の子って言うほどたいした物じゃないけどな。現に生理だつてようやっと2ヶ月に一度だ。大きくあくびをして枕を直した。これは、やらん。俺の物じゃ。

このとき兄貴が動いた。

「……………」

何かを呟き、俺の体に腕をまわした。

「あつたけ……………」

そのまましっかりと抱きとめられた。俺の両手は拳つたまま下ろしようが無い。

こいつ、俺の事猫か湯たんぼとまちがっちゃいないか？

のび始めたひげがざらざらと額に当たる。そのまま兄貴はくふくふと笑い喉を鳴らした。こいつが猫だ。

半ば押さえられた状態で俺は身動きが取れなかった。

もしかこいつは真性のゲイかよ、なんて事が一瞬よぎる。でもそうじゃなさそうだった。兄貴は気持ち良さそうに

「むにやむにや」

と言った。

とりあえず腕をリラックスすると兄貴の頭を抱え込むようになった。不思議な事にその体の凸凹がジャストフィットでちつとも苦し

くない。のしかかっている重さも、まるで重たい布団のようで自分の好みだったりする。

俺って阿呆だ。

でもまあ、しゃあない。

目覚めたとき、この人はどんな顔をするんだろう、なんてたちの悪い事を考えた。裏声で悲鳴を上げたりしてね。まあ自然に寝ていりゃこの腕もほどけるだろう。俺は瞳を閉じた。本当は今、途方も無く嬉しくてドキドキしている事を自分自身に悟らせないように。

目覚めると兄貴はいなかった。その代わりに置き手紙が一つ。

“世話になりました。飯も旨かった。ありがとう。えりこさんによろしく。”

よどみのない性格そのものの筆圧。万年筆のブルーブラックの濃淡が綺麗だった。

「絵里子さんにはよろしくで、俺の名前は無いのかよ。」

ちえっ、なんて舌打ちしながら俺は手紙を畳んだ。お年玉をもらった気分だった。

後で知った事だけれど、兄貴が使っている万年筆はシェーファーというブランド物らしい。高校時代からの愛用品でメンテナンスが大変だと笑っていた。

その次の土曜日の朝、再び兄貴が店に来た。

仕事のローテーションで夜勤になってしまったと言う。今しばらく毎週木金曜日は午後10時から午前8時まで会社にいななければいけないらしい。その帰り道に寄ってくれたというのだった。

「どうせ帰る途中だし、送って行ってあげるよ。今まで基が世話になった事だから、少しぐらいは役に立たせてもらえると嬉しいんだが。」

買って来たコンビニおにぎりを平らげ、ソファアであくびをして、

俺の仕事が終わるまで缶コーヒーを啜っていた。俺の手にはホットウーロン。

二人で他愛無いおしゃべりをした。実は兄貴は俺達の高校の先輩だった事、剣道部の副主将だった事、そして団体戦でインターハイに出た事が有るなど。他にも最近のトレーニング事情やスポーツ医学についても兄貴はよく知っていた。

「俺の夢は鍼灸師になって、スポーツトレーナーになる事なんだ。」  
いつの間にか俺はいつの間にか熱く語っていた。

「ほら、ボクサーってそれだけで食って行ける選手なんてほとんどいないだろう？トレーナーもそれとおんなじでさ。それに俺このとおりだし、ジムで一生お世話になる事もできないし。特殊技能つけて、それで生計立てて、その隅っこで選手の応援もできたらいいと思わないか？好きな事して生きて行けるんだったら最高じゃん。別にチャンピオン育てたいとか夢みたいなのは言わないけどさ、でもアマチュアでも良いからこれからのボクサーの力になってやれたら本当に幸せだと思う。」

独りでしゃべりまくる俺に、兄貴はうんうんと嬉しそうに頷いてくれた。

仕事が終わると二人を乗せて家まで送ってくれた。

いつもみたいに絵里子さんを寝かせた後、二人で残り物の煮物をつついた。

「もしかして僕は役得しているのかな。」

兄貴は体の割りによく食う。どんぶり一つが空になる。

「残ったら基の土産にって思ったけど、無理だな、こりゃ。」

笑う俺に兄貴は済まないと言をすくめた。

それから何とはなしに兄貴の肩を揉む。夫婦みたいだと思いがら。いや、待てよ、今の所基が俺の旦那だから、この人は愛人か、なんて。俺って本当、阿呆だなあ。この人は愛人のタイプじゃない。豪商の若旦那だ。おおらかで坊くさくって頭はいいけど人も善い。むしろ後先考えず熱くなりやすい基の方がそのタイプだ。

「ここに来る事、基、知っている？」

うつぶせの兄貴にさりげなく聞いてみた。

「んん。」

多分知らないの返事だと思った。

「あいつにはしばらく黙つといてくれないかな。」

また基に秘密が増えた。

「ほら、あいつもうすぐ受験だろ。ぎりぎりの所狙っているって話だし。」

ああ、相変わらずこっている肩だ。

「こんな事で動揺させたくないから。」

本当に硬い。

「俺達春まで遊ばない約束してるのに、兄貴とこんな事してるのがばれたらあいつ、いい気がしないだろう。」

なんだかその言葉が卑猥に聞こえた。

「別にやましい事は無いんだけどさ。」

俺今墓穴掘った？

その兄貴からは何の反応もなく、寝てしまっているようだった。

せつかくうつぶせな事だし、その腰周りを軽く揉んだ。なるほど、これが剣道をしていた人間の体か。微妙な左右差を感じながら、しばらく指先でその体を揺すり続けた。

このまま寝ていくんだろうと布団を取ってくると、兄貴は起きていてコートを手にしていた。

「もう帰るの。休んでは行けばいいのに。」

俺は目を擦った。かなり眠かった。兄貴は何とも言えない表情で俺を見た。

「いや、止めておくよ。君の“だんはん”は嫉妬深いからな。」

その背中を啞然と見送った。

「マジかよ……」

俺の眠気が吹っ飛んだ。兄貴は俺が誘っていると思ったんだ。

ああ、でも仕方ない。仕方ないさ。現に俺は基と寝てんだから。

そう思われたって・・・。

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

つ  
づ  
く

## 第十五話 禁句

もう兄貴は来ない、そう覚悟していたけれど、次の週末もコンビの袋を持ってやって来た。何事も無かったかのように。

今いるのは報道班で警察絡みが多いと話してくれた。最近結婚した高校の時の親友の奥さんというのが、同じ時期に剣道をしていたライバル校の選手の妹だと言う。ライバルの人は警察官になっていて、偶然にも広報担当の部署で会ったらしい。

「人の縁って分らないと思ってるね。」

彼はにやにや笑った。

「その後飲みにつき合わされたのはいいけれど、仕事の話しは一切なしで、義弟の悪口をさんざん聞かされたよ。僕はその義弟の友人だっけ言うのにな。」

兄貴はいつもと代わらない。俺は胸を撫で下ろした。

家に帰ると兄貴は自然にちゃぶ台に座った。

「運べよな。」

俺は温め直した総菜や箸、取り皿を差し出した。

「すまん、すまん。」

同じようにご飯を食べる。二人で眠そうにあくびをする。

「土曜の練習が有る時はどうしていた？」

「11時には間に合うから、遅れて行く事になっていた。」

「タフだなあ。」

「若かったから。それに気を張っていると何とかなるもんでさあ。」

我ながらよくやったと思うよ、うんうん。

「17で若かった、かあ。」

兄貴は苦笑した。

「18、俺この前18になったんだよ。これで晴れて深夜バイトアンド夜歩きオツケー、補導よさらば。」

「じゃあ、お祝いしないとな。」



兄貴は少し考える様な仕草をした。俺はそつとその背中に周り首筋を揉んだ。

「何がいいかな。」

兄貴が使っている万年筆がいいなあ。あのカッコいいヤツ。

「みんなで旨いものでも食べに行こうか。」

みんな？

「来週勇利君の試験が終わるんだろう。基もセンターが終わるし。

息抜き兼ねてみんなで懷石なんてどうだ？」

ああ、そうか。この人は基の為にここに来ている様なものだもんな。俺は少し意地悪く考えた。もしかしたら俺が受験直前の基に近づかないように監視しているのかもしれない、なんてね。

「イタリアンの方がいいかな？」

「そんな事無いよ。ほらさ、きちんとした所に着ていく服無いからさ。それに基は二次試験の方がキツいだろう。そんな暇無いよ。」

「そうか。」

俺は広い肩を指先で押して行つた。本当は恐る恐るだった。この前みたいにたくなかった。いつ兄貴が嫌悪感を示すか分らない。それでも少しでも兄貴の役にたちたかった。

「だったらスーツにしようか。」

俺は一瞬手を止めた。思ってもいなかった。高給取りはプレゼントの額も違うらしい。確かに俺のサイズだと吊るしのスーツは売っていないだろう。いくらやせていてもウエスト58の男はいないからセミオーダーだ。でもまさか高校卒業してまで男装しようとは思わなかった。まあ確かに似合うだろうけど、俺は別にそう言う疾患を持っていないわけじゃない。中学校はセーラー服を着ていたし、春には女物のパンツスーツを買おうと思っていたぐらいだ。はっきり言って兄貴ほど騙される人間も珍しいと思う。確かに入学当初、俺と基は二卵性の兄弟みたいにそっくりだった。でも俺の体型はあの頃から卒業まぢかの今まではほとんど変わっていないし、反対に基は一周り半でかくなっている。再び揉み始めた指先に思い切り力を入れ、

痛みが出るほど押してやった。

「つつ。」

兄貴が呻く。ここまで騙してしまうと、今更女ですって言えないよなあ。てか、兄貴鈍すぎ。

「今回は遠慮しとく。知り合いが作ってくれるっていつてくれるんだ。」

俺はいい男3人スーツ姿で闊歩する様子を想像した。見るからにエリートサラリーマンに現役運動会系男。それと自称小柄ジャニーズ。自虐的だなあ。すっげえ格好いいじゃん、ちよつと着崩せばそのまんまホストクラブの1・2・3なんてね。

「はい、おしまい。」

最後にびたんと平手で背中を叩いてやった。

話しは終わり、そう言っているのが分ったんだらう。兄貴はさっくりと立ち上がった。

「ありがとう。欲しいものが決まったら教えてくれ。」

それから振り返る事無く部屋を出て行った。

またやった。肝心の俺が、ありがとうを言っていないじゃないか。

その夜軽く走りに行つて帰つて来ると、絵里子さんがテレビを見ながらぼんやりしていた。

「ただいま、絵里子さん。」

母さんは軽く頷いた。今日はお店が休みの日だった。いつだって疲れている。そんな彼女を昼間だけでも静かに休ませてあげたかったから俺はなるべく家にいない。二人分の朝ご飯と、お昼の弁当。夜に軽くつまめるものを用意して。

いつからだろう、お互い一緒にいても話しをしなくなってしまった。時々俺といるのが辛いんじゃないかと思う気がしてならない。

だから彼女から話しかけてくれて本当に嬉しかった。

「最近、明けで送ってくれている人、だあれ？」

寝ているように見えて母さんは気づいていたらしい。

「ああ、あの人ね。友達の兄貴。仕事がえりに拾ってくれるんだ。」  
俺は話を続けたかった。

「とつてもいい人だよ。俺達の事、心配してくれてる。送ってくれて頼んでいないのに、世話してくれるんだ。」

絵里子さんは返事をせず、テレビを見続けていた。

その反応はいつもと変わらなかった。

風呂に入り髪を乾かす俺に彼女が何気なく言った。

「遊里はあんまり友達の話ししないわよね。」

「うて。だって母さん、聞いてくれないじゃないか。」

「あの人、本当は遊里の恋人？」

「まさか。」

違うよ、そんなはず無いじゃないか。あの人は“高嶺の花”だよ。俺なんかが好きになっちゃいけない人だ。

「違うよ。」

「じゃあ、送ってもらうの止めなさい。これからはタクシー使うの。」

一瞬何を言われたか分らなかった。テレビの奥で誰かが笑う。

「人に借りを作ると、ツケを払わされるわよ。」

「えっ？」

指で摘まれたメロンソーダ色のゼリービーンズが彼女の口元で止まった。

「真面目そうに見える人に限って、裏が有るからね。」

それはゆっくりと体の中に吸い込まれて行った。

頭に浮かんだのは、金縁眼鏡にワイシャツを着た中年の男。その男は俺を膝に乗せ、囁く。それから、髪の毛を梳いて、撫で付け、口に含む。それから……

「冗談じゃない！！兄貴はそんな人じゃない！！どこ見てんだよ！！」

人には沸点が有る。その時の俺はまさにそれだった。

「あんたみたいに、糞みたいな男につかまるもんか!!」

気づいた時には両の手を握りしめ、ぶるぶると震えながら立っていた。

絵里子さんはびっくりと振り向き俺を凝視した。その顔は蒼ざめていて・・・!!

俺は何を言っただろう。

その手をじんわりと開いた。

「ごめんなさい。つい、かつとなった。」

引きつるのもかまわず、必死に笑った。

「ほら、今週俺、受験だからなんだかさ、ぴりぴりしちゃってさ。」

俺はザックの中から持って帰って来た教科書をバラバラと出した。

「正直、自信ないし。ごめん、八つ当たりしちゃったね。ああ、今日はもう寝るわ。なんか勉強疲れかな? 知恵熱出たりしてね。」

彼女は挑みかかる様な顔で俺を見つめている。

「ごめん、母さん、本当にごめん。母さんにひどい事言っつもりなんか無かったんだよ。謝るからさ、忘れてくれよ。もう二度と言わないからさ。」

「そうだ、受験の日は朝早いから、迷惑かけたらごめんね。」

俺はじりじり下がった。

「言いたい事が有るんなら、はっきり言いなさいよ。」

低いながらきつぱりと彼女はそう言った。

「嫌だなあ、母さん。言いたい事なんて……。実はさ、ほら、よくある話でさ、最近男の事で友達と揉めていたんだ。でさ、兄貴だけはいつも中立でいてくれる人だから、ありがたかったんだよ。さすがにその人の事、あんな風に言われてさ……。」「

どうして俺は泣いているんだろう。

「悲しかった。」

最初に目を背けたのは絵里子さんの方で、俺はそれを合図に隣の部屋に行った。

泣いたって意味が無い事ぐらい中学に入る頃には学習した。疲れるだけだ。そんな事するくらいだったら、たっぷり寝て、走った方がいい。

それでもその夜俺はマウスピースみたいにタオルをがっちり噛んで声を殺していた。お守りみたいに手に持っていた兄貴の名刺が涙でよれよれになってしまっている事に気づいてもそれは止められなかった。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第十六話 悩み事

朝起きてどんな顔で母さんに会えばいいのだろう。そんな心配をよそに、次の日の絵里子さんはいつものように寝ていて、俺は飯を作り学校に行った。

何も変わらなかった。

そんなこんなで受験は終わり、まあ合格はしただろうとは思う。

そして週末、兄貴はまたやって来た。

断んなきゃいけない、いつまでも甘えてらんないって分かってる。でも勝手にソファに座り込んで疲れた顔で缶コーヒーを啜る兄貴を見ていると、何も言えなくなった。もしかしたら兄貴も同じで誰か頼ってくれる人がいないと生きてゆけない人かもしれない、そんな事を思った。

うんにゃ、違うだろう。この人はそんな弱い人じゃない。この人は独りで生きていける人だ。

俺は最近、絵里子さんとの関係をサドとマゾの関係じゃないかと思えてならなかった。別に彼女が俺をいじめようとしているという事じゃない。問題は俺の方だ。酔いつぶれた彼女を迎えに行ったり、彼女のしない家事の一切をしたり、面倒を見る事を苦痛だと感じる一方で、彼女に尽くしたく思う俺がいる。これじゃあ、支配されるという形の依存だ。犬が主をほしがるのに似ている。

だから自分が嫌になる。俺はいつしか独りで生きていけるようになりたいと思った。

そんな事を考えながらぼんやり手を動かしていると兄貴が見つめていて、目元に微笑みを浮かべていた。

「今日は静かだね。」

その低くてよく響く声が俺の耳元でこだました。この人はなんてまろやかに話すんだろう。

「そうだね、疲れてんのかな？」

うつむきながらその視線を感じた。もう一度見つめ返すと、笑顔がその口元にも広がり俺を包む。

なんて温かいんだろう。

ああ、どうしよう。あれほど辛いと思っていた悩みが、一瞬頭の中から消えていた。

俺は軽く首を振り笑っていた。兄貴といると俺は真性の阿呆になる。

そうだ、俺の悩みなんてそんなものさ。吹けば、飛ぶんだ。兄貴さえいれば悩む事なんか無いんだ。

出来るなら、もし願いが叶うなら、俺が強くあれるように、兄貴にずっとそばにいてほしい、そう思った。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第十六話 悩み事（後書き）

兄貴バージョン” P a i n ” 始めました。

廣瀬のセックスは” ゆに ” なのですが、男性視点で書いていますと、女性視点とはかなり違います。男性の方が純粋な気がするのです。書いていて正直身悶えする有様。これからも御贔屓に。



## 第十七話 失態

結局送ってもらう事にした。

大丈夫、絵里子さんには適当に言い訳を考えよう。

“タクシーを待ったけど来なかったんだよ、それじゃあつて事になつてさ。”

こんなとき女でよかったって思う。嘘がすらすら浮かんで来るから。

家についた後も彼女はぐっすりと寝込んでいるようだった。

俺はコートを脱ぐ兄貴を横目で見ていた。最近兄貴には兄貴の香りがあるって気づいた。兄貴はタバコを吸わないけれど、着ている服はいつもヤニ臭い。職場で吸う人がいるらしい。その中にエッセンスみたいに兄貴の香りが混じっている。コロンを付けているんじゃないさそうだし、アフターシェイブローションとも違う。とにかく兄貴の香りだ。

俺はコートをハンガーにかけながら深呼吸して、こっそりその香りを吸い込んだ。

その日はおだまきを作ろうと思った。茶碗蒸しの中に餛飩が入っているアレだ。

圧力鍋をセットして強火にする。

兄貴が来たらと思うて頂き物の煎茶を用意しておいたんだけど、なんだよ、日切れしているじゃん、どうしようこれ。味落ちてるかなあなんて悩んで、新しいのを探した。その時突然響いた蒸気の轟音。

「うあつ。」

慌てて火を弱くしようと身を乗り出し、その指がつまみに掛かった瞬間、

「勇利!!!」

俺はその声よりも早く兄貴に後ろに引き寄せられ、両手でかかえら

れていた。兄貴は少しして抱く腕に力を込め、二人の体は隙間無いほど重なった。

兄貴の心臓の上に俺の耳があたっているから、背中越しに兄貴の早鐘みたいな心臓の鼓動が響いて来て、それに気づいた俺の心臓はもつと早いリズムを刻み始める。

ガスの火は消えてしまっていて。

しゅんしゅんという音が少しずつ間隔を置く。という事は、二人ともしばらくそのままだったって事だ。

・・・俺達は何をしている？

「だ、大丈夫。」

体を硬くする兄貴の腕をポンポンと叩いた。

「圧力鍋、初めてだよ。これ、音はうるさいけど安全なんだぜ。そんなに驚くなよ、だらしない。」

その手はゆっくりと放され兄貴のショックを物語っていた。

「全く、男って結構気が小せえよなあ。」

そのままもう一度火を付け、再び圧力がかかり鍋が鳴りだすのを待つ。今回は二人とも驚く事は無かった。火を絞り、圧力弁が緩やかに回るのを見ていた。

「な、怖くないだろう。」

兄貴はばつが悪そうにしながら、渡された箸と茶碗を持っていった。二人ででか碗のおだまきをお玉ですくって食べた。

こうしていると貧乏だけれど幸せな夫婦みたいでおかしかった。

この前と同じ。俺は恐る恐る肩を揉む。

「兄貴、何かに憑かれたんじゃない？こり過ぎ。」

口は平然を装いながら、心臓はドキドキしていた。

「相変わらず、硬てえ。ちよつと服脱いで。」

暖房のスイッチを最大にしてジャケットとベストを脱がせた。脊柱にそって指を下ろす。つばにはまる度に、うって声を殺して唸るのが可愛いと言えば可愛い。

特に腰は硬い。本当にディスクワークが多いんだな。

「あんま、無理すんなよ。」

一度腰壊すと、一生駄目になっちゃうぞ。

なかなか筋肉に入っていない指に業を煮やし、俺は額を兄貴の背中につけて指を押し込んだ。こうすれば額が支点になってやり易いんだ。

「ぐえっ。」

潰れたカエルの様な声。

「我慢、我慢。」

俺は意地悪く囁いた。

「絵里子さんが起きちゃうから静かにしろ。声たてんなよ。」

この言葉はさすがに効いたのか、それからはいじつと耐えているようだった。指の抵抗が少しずつ軽くなる。揉みほぐれて来た証拠だ。指の刺激を“押す”から“揺する”に替えた。こうすると深い筋肉に刺激が入る。体の奥の疲れが取れて楽になるはずだった。ただそれだけのはずが兄貴の腰に当たった俺の手のひらがその肌の感触を吸収し始めた。痛み刺激の後に弛緩を始めた筋肉が薄いワイシャツ越しに伝わる。

ヤバかった。

糊の利いたワイシャツが言葉の無い部屋にかさかさなった。

気づくと二人とも息を殺していた。

「もう、こんなもんだよな。」

俺は名残を惜しむように手を放した。

自分の中に渦巻くものの正体を俺は知っていた。

そう言えば基と最後に寝てから3か月経つか。それまで週2でしてたもんなあ。そりゃ、したくなるよな、普通。体ってそんな風にしてるもんだよな。何てったって、後半は好かったもの。

俺はそんな“女”の自分が嫌いだ。誰でもいいなんて惨めだ。ま

してや兄貴に欲情するなんて馬鹿げている。

「ありがとう。もう、帰る。」

兄貴はさっさと服を身に着け玄関をくぐった。

その後ろ姿はぴりぴりしていた。

慌てて後を追いつ、送ってくれた礼だけは言おうとした。そのはずが言えず、結局振り向かず歩く兄貴の背中を見ながら車の所まで来てしまった。

兄貴は車に乗り込んで助手席の窓を降ろし、何か言いたい事が有るのか、そんな目で俺を見た。

「あ、ありがとうを言おうと思つてさ。」

それからちよつと頑張つて口の端を上げた。

「でももういいから。お店もそろそろピークシーズンはずれるし、俺も受験終わつて2月から絵里子さんの職場の近くでバイトする事になったし、何とかなるから。そのバイトが上手くいけば中古の車が手に入りそうなんだ。だから、もう送ってもらわなくてもいいよ。今まで本当にありがとう。助かった。」

するとこわばつた顔が言つた。

「迷惑だつたか。」

この人でもこんなに冷たい声が出るんだ。でも言わしたのはこの俺。

「違う。」

女は嘘が上手。

「でもさ、基がいい顔しないだろ。」

本当は兄貴といるのが怖いだけ。自分の中にいる“汚い女”が目覚ましそうで。

「あいつが頑張つてんのに、俺ばつか楽したら悪いじゃん。それに兄貴は本当は俺の兄貴じゃなくてさ、基の兄貴なんだし。独り占めしたら駄目じゃん。」

俺の手はポケットに入つたままだ。俺の方に身を乗り出していた兄

貴が座席に戻る。きっとこのまま会わなくなる、そんな気がした。

「信じて欲しいんだけど、俺さ兄貴が本当の兄貴だったらどんなに良かったかって思うんだ。本当に、俺……。」

苦しくて言葉が詰まった。

「今度産まれてきたら、弟にしてくれよな。」

その言葉が終わらないうちに目の前でウィンドウが上がり、兄貴の車は滑らかに行ってしまった。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第十七話 失態（後書き）

もしこの時、彼女が行動を起こしていたらどういう事になっていた  
と思います？

## 第十八話 日常（前書き）

ホストクラブについての記載有ります。汚い内容なので、そう言うの嫌（綺麗な所だけ見ていたい）人はパスしてね。ついでに、フィクションだから。

あつ、ついでに高校生はホストクラブお出入り禁止ですから。

## 第十八話 日常

部屋に戻ると襖がほんの少し開いていて、なんとなく絵里子さんが起きている気配を感じた。

「あの人、もうここに来ないから。」

俺は自分に言い聞かせていた。

「二度と来ない。お迎えなんていらなからって、はっきり言っただから。」

今度という今度は二度と来てくれるはずが無い。

それから俺はぐずぐずと毎日を過ごしていた。

考えたくないのにふとあの人の香りを思いだしてしまう。

兄貴の事が大切だった。もしかしたら基よりも。俺にとって産まれて初めて抛り所になってくれた人だから。それなのに兄貴の事を汚してしまった、そんな気がした。

よりによって兄貴に抱いて欲しいだなんて。

あの人に組みしかれ、その体重を受け止めながら軀を交じり合わせる事を想像して熱くなってしまったなんて。

もしあの時、兄貴の軀に手を回してしまっていたらどうなっていただろう。そのとき兄貴が応えてくれたら？もちろん抱かれていた絵里子さんは寝ていると信じて、彼の背中にしがみついていたと思う。それが、部屋を抜け出しどこか二人きりになれる所に向かったに違いない。そこで狂ったみたいに欲しがっただろう。

失うものの無い人生だと思っていただけけど、たった一つ、兄貴の事を大切に想う気持ちだけは壊したくなかった。

俺に兄貴はふさわしくなんかない。俺の汚れてしまった生き方をあの人の人生に交わらしてはいけない。

だからもう兄貴にはもう二度と会わない方がいい。



そんな思いの中、2月に入ってホストクラブでバイトを始めた。といっても内勤だけど。少しでも先立つものが必要だったから。

週4日の裏方さん。お店は19時から1時までと朝の5時から二部営業で、働くのは木曜から日曜の夜の方、土日祝日は都合がついたらその後もヘルプしてほしいと言われていた。1時から5時までの休憩の間にお店を掃除し仕切り直しをするからだ。絵里子さんの仕事とほとんど同じ時間だから、彼女には頼み込んでやらせてもらった。

「ほら、もう子供の気分じゃいけないだろ？どうせ春になったらなにがしかのバイトと始めるんだし。どうせだったら顔見知りのいるところで働いた方がいいからさ。それにそこだったら絵里子さんと一緒に帰れるから絵里子さんも安心だよ。」

そこは近所のジムにトレーニングにくるホストさんが沢山いるお店だった。駿ちゃんもその一人で、他のスタッフのお兄さん達とも以前から会った事が有り気が置けなかったし、今川さんもそこならいいんじゃないかといってくれた。とは言っても未成年だし、なにより偽物。

俺には“プレミア”がついてたらしい。自分じゃ知らなかったけど、俺は交番詰めめの男の子イコール箱詰め息子。訳して“ハコムス”と呼ばれた有名人だったらしい。我ながらど赤面な名前。そんな事もお酒を断れる理由になるから幸いだった。でもお店のオーナーはそのセールスが上手い。

“ハコムス”

の価値を最大限利用し、裏方のはずの俺の“将来の”指名料にとんでもない金額を付けていた。その4割が俺の手元に入ると聞かされ、目眩がしそうだった。しかも

「この子はまだ未成年なんですよ。お酒がまだ飲めないんで飾り物なんです。ここいらじゃ結構有名な子で無茶させられないんですよ。だから今のところ内勤つけているんです。それにこのとおり

うぶなんで、まだ染めたくない所もありましてね。もう少しして（ここで2年後って言わない所がオーナーだ）成人したら道理の分ったご常連さんにだけご指名いただけるようにって考えているんですよ。」

と売り込むらしい。

つまりこういう事だ。プレミアがつけばつくほど欲しくなる。駄目だと言われるとこり押ししたくなる。同じ品物でも、1万で買うより100万で買った方がいい場合が有るという事だ。とりあえず俺の事が気になったお客さんは

“道理の分った常連さん”

になるべくお金を湯水のように使い鷹揚な上客を装う。こういうお店はそういうものらしい。

人間の心理なんてそんなもんだ。手に入らないモノほど欲しくなる。

これって俺にも当てはまるなって思った。だから欲しいんだよって。

ホストの世界は思ったよりも厳しかった。

最初はこんな高いお金をとるなんてぼったくりみたいで正直抵抗が有った。

でもだんだん現実が分って来た。

お客さんの女性達の半数以上は風の人達で、みんな何かを背負っていた。

お店のピークは10時1時。週末のこの時間は厨房（といっても洗い物したりするぐらいだけ）に入った。この時間席を外す事でたちの悪いお客さんにつかまる可能性が低くなるからという店長の配慮らしい。つまり、服を脱がされたり、プロレス技かけられたり、焼酎10本開けるから一気飲みしろとかだ。

それに偽物だから、下手に本物と一緒にいるのもまずいらしい。

だから俺は12時半過ぎにフロアに戻って、酔いつぶれたスタッフの世話をしながらの接客にまわる。

日が進むに連れてどうして体を壊すほどお酒飲んで頑張るのか、ホストって不思議だと思った。

飲む量が普通じゃない。

なんでこういう所の男子トイレが店の奥に有るのか知ってる？それは後半になると半数以上が便器に顔突っ込んでゲロ吐いて果てているから、それを見られないようにする為さ。いくら絵里子さんが飲んで酔いつぶれていても吐くほどじゃない。ましてや意識が飛ぶなんて事はない。声を掛ければ起きるし、肩を貸せば人並みに歩ける。でも彼らは違った。まるで何かに追い立てられているようだった。

それでも飲まない訳にはいかない。しかもそのうちの何人かは4時間後の日の出営業のスタッフだ。だから吐かない訳にはいかない。「噛むんじゃないぞぞ。」

俺はそう言ってタオルの巻いたスプーンを彼らの口の奥へ押し込んだ。

それが悲しくて、出来るだけお店に残って後始末を手伝った。どうせ短期バイトだからと体に無理をきかせた。

報酬は時給1300円。プラスチップ。何よりもオーナーが使わなくなった車をくれると言ったから。あと3年と3ヶ月で車検の切れる中古のワゴン。免許は無いけど、今回の仕事で教習所に通えるお金ができる。絵里子さんのお迎えが楽になる。

駿ちゃんやオーナーは笑いながら俺の肩を叩いた。

「勇利は気質はホストだけど、性格が仕事に合っていない。」と。

金曜は明けた足で学校に行き、冷たいシャワー浴びて、保健室で寝て、出席を取って昼には家に帰る。移動は自転車から電車で切り替えその間爆睡した。家事をしてまた寝て出勤。その一日だけでも精神的にも肉体的にもキツかった。俺にはこんな仕事続けられない

いと思った。

昔同じマネージャーの幸治からもらったオーデコロンの強いバラの香りが、そんな俺の軀に染み付きつつ有る吐瀉物の匂いを消してくれた。

人はみんな何かを抱えて生きている。それでも、生きている。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第十九話 夢落ち

とろとろとまどろんでいる時その人は来た。てか、ここお店の中じやん。

俺は不覚にも店を掃除している最中に寝ちまつたらしい。

「あははっ。」

笑って誤摩化しながらソファアから起きようとすると、

その人は当たり前前の様に俺の隣に座った。

「大丈夫か。」

そう言われた気がする。兄貴だった。無精髭を生やして疲れているけれど格好いい事には変わらない。

その人が笑った。

「仕事はどうだ？」

「ああ、これね。」

誰が兄貴にこの事教えたんだ？

「まあまあってとこ。」

俺は肩をすくめた。紺地にピンストライプの借り物のスーツ、でかすぎるウエストをベルトで絞っていた。青い化繊のシャツにはだらしなくネクタイが引つかかっている。

いつも仕立てのいいスーツを着ている兄貴とは天と地の差だ。

「ここでどんな事するの？」

彼は俺の顔を覗き込んだ。

描き込んだ眉毛がめっちゃくちや恥ずかしいから思わず前髪をなで付け隠してしまう。

「とりあえず今は掃除。他はおつまみ運んだり、お絞り出したり・

・

「ふうん。」

その顔は、嘘付けて言っていた。

「あ、その、少しぐらいはお客さんの相手するよ。」

『どんな風に？』

ああ、嫌だ。この人、分っているくせに。からかわれているって知っていても顔が紅くなる。

「担当さんが席外した時に女の人の話し聞いたり、おしゃべりしたり、とか・・・」

そんなに顔、近づけるなよ。息かかっているし。

『愛している、とか、言う訳？』

その顔は兄貴らしくなく、にやにやしていた。拳げ句に

『僕でもなれると思うかい？』

何言ってるんだ。

『勇利だったら、僕にいくら払うかな？』

その指先を俺の鼻に当てた。目が笑っている。

『勇利、愛してる。』

まったく。馬鹿にしゃがって。そう思いながら俺はおかしかった。

こんな兄貴初めてだ。いつもウイスキーをがぶ飲みしていても、こんなになるほど酔っている所は見た事が無かった。

彼の唇が降りてきて、耳元で囁いた。

『愛している。』

鳥肌が立ち俺は思わず彼のコートを掴んでいた。

“ ふざけるのもいい加減にしろ。本気にしたくなるじゃないか！ ”

その瞬間兄貴の香りに包まれた。染み付いた紫煙と兄貴の肌の香り。それを胸一杯に吸い込んでいた。

兄貴はキスをした。躊躇うように、軽く。

俺はどうすればいい？彼を押しつける？唇を閉じる？それとも？

俺はそつと兄貴の上唇を舐めた。

何も言わず、ただ唇を割り、兄貴の舌が俺のそれに絡んだ。

駄目だと言われても俺はしたと思う。

これはきつと夢だ。こんな事有るはずが無いんだから。

だから、夢だから、兄貴に抱かれていたい。

「俺も、愛してる……」

両手を彼の体に回し強く引き寄せた。温かい軀。まるで現実みたい  
に兄貴の体の重さを感じる。

キスが深まり、閉じた瞳の奥で火花が散るようだった。

その感覚のあまりの生々しさに身震いがするほどだった。

これは夢だ。見ちゃいけない夢なんだ。起きないと。早く起きな  
いと……！

目を見開こうとし見上げた天井は白い。

そうだ、俺は保健室で寝ていたはずじゃなか。しっかり目覚めな  
くっちゃ！何かがおかしい。

ぼんやりとした目に映ったのは兄貴なんかじゃなくて、瞳を大き  
く見開いて見つめているえくぼの男だった。

「基……」

俺は彼の名を呑み込んだ。

両手は基にしっかりとしがみついていた。その手から力が抜ける。  
自分の唇に触れると、さっきまで感じていたそれは確かに基の感触  
だった。

彼は俺の額にキスをして、目尻を細め唇を引き締めた。それから俺  
たちのポーズ、拳を作り天に向かって突き上げ歯を見せて笑った。

俺は兄貴のコートのハデな裏地を翻しながら去って行く基の後ろ  
姿を啞然として見送った。

明日は彼の二次試験だった。

この時感じた嫌悪感。そして俺は自分の気持ちにはっきりと気が  
ついた。

俺は兄貴の事を好きなんじゃない。それ以上に愛しているんだっ  
て。

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

つ  
づ  
く



## 第二十話 卒業エキシビジョン

日が経つのなんてあつという間。

卒業式は午前中で終わり、俺は友人達とではなく来てくれた絵里子さんと昼食を食べた。

この歳になって親と食事するのが嬉しいなんておかしいかもしれないが、俺は本当に嬉しかった。

母さんと一緒に外食するのは小学校以来だ。最後に食べたナポリタンの味をまだ覚えていて、この日も思わず同じものを注文していた。ファミレスのランチがこんなに美味しいなんて正直思いもしなかった。その上今日の夜、彼女は仕事を休んだ。家に帰ってからお祝いしてくれると言っ。昨日何が食べたいと言われ、思わず、

「赤飯が食べたい。」

なんて事を言ったから、きっと今晚作ってくれるんだとわくわくした。

それはもしかしたら、これから基と決別しなければいけないっていう重たい気持ちが無理矢理ごまかしていた事なのかもしれない。

午後は部の用事があるから7時過ぎには家に帰ると約束し、絵里子さんと別れた。

ボクシング部には恒例の行事が有る。それは卒業生を送るエキシビジョン。2年生が階級関係なしの総当たり戦をして、3年がそれに賭ける。

一対戦1ラウンドオンリー。3分勝負。相手の様子見はいつさい無し。とにかく連打が条件。今年の選手は9人。午後2時開始のお祭りイベントだ。OBや観客も沢山集まり、ヤジを飛ばす。

Rush!! Rush!!      ラッシュ!ラッシュ!責めやがれ!

これが結構キツイ。

500メートルの全力疾走インターバルを8回やる。こんな感じじゃないかな。

下手すると20キロを90分で走るくらい次の日にへたる事請け合いだ。だからこそやるのだが。試合も最後の方は泥仕合になる。それがまた面白い。

Rush!! Rush!! 頭真っ白!! 止まるな! 手を出せ!!

みんなが踊る。

Rush!! Rush!! その瞬間は、死ぬ気で連打!!

去年は危うく出させられそうになりえらい目に合った。おもしろがる先輩や基を男子マネージャーの幸治が止めてくれた。

いくら何でも本気のスパーは無理だ。まあ、他にやる女子がいて、女同士でやるのなら乗るけどね。俺より本質的に重い男の拳をもらうのはいくらおふざけでも頂けない。

今年の優勝候補は主将の菊池と副将の山下。主将の方が一階級軽い。でも彼は粘り強い、なんて3年同士で話しながら賭けになる。現金を賭けるんじゃない。景品を持ち寄るんだ。提供品は一人何品でオツケー。賭けに勝ったヤツから選んでいく。そして大会選手も同様にもらって行くと言うシステムで、欲しい物がバッティングしたらジャンケンだ。

とは言ってもむずかしことじゃない。しかも外野まで参入し、最後は適当にみんなで分けきってしまう。

ある意味学園でも有数のエキシビジョン。

女子マネの京子と俺は、女で有る事の利点をフルに生かしものすごい景品を準備した。

部の男子の意中の女の子をリサーチして、その子達の写真を撮って来たのだ。

もちろん使用目的をはっきり言っただけ。だから写真を撮らせてくれた子は、少なからずボクシング部の誰かに興味が有るってことははっきりしてて。それを広げた時のみんなの顔ときたら。それぞれが一点で釘付けになり、まるで

“関係のある物同志を線でつなげ”

状態だった。俺と京子は顔を見合せてにやりと笑った。

結局この景品は一番人気になりそうだった。

「はい、もう一人。」

俺は京子に流し目をくれ、栄に向かってソレを取り出した。インタ―ハイの時に撮った京子の上目遣いが可愛いジャージ姿。でも、場所が悪い。布団の上。栄が真っ赤になった。

「そう来ると思ってた。」

彼女もにやりと笑うと、基に向かって一回り大きいフィルム袋を取り出した。

そこにはTシャツ一枚の俺が気持ち良さそうに寝ていた。しかもブラ半分透けてるし。

「それ、反則!!」

俺は真っ赤になっていたに違いな。

「ネガもよこせ。」

基の一声で周りが静まり返った。でもその後持ち前のチャイミングな笑顔を振りまくと、誰ともなくすすくす笑いが起こった。

「すんげー夫婦愛。」

「当たり前だろ、馬鹿。自分の女房を他の男にさらしてたまるか。」

結局基は当たり前のように俺の写真を手に入れ、ちょっと拝む様に持ち上げてから鞆にしまった。それを見てまたみんなが笑う。彼はこういう空気を読む男だ。

俺はオークレーの帽子、ミズノのシャツを手に入れた。まるで俺にしつらえたようにぴったりで嬉しかった。

それから胴上げた。

みんなでぎゃあぎゃあ言いながら、めちゃくちゃな高さで3年が宙に舞う。何しろ全員軽いから。

最後から2番目が俺って流れらしく、かなり照れくさかった。

でもそれ以上に俺はジェットコースターとか駄目なたちで、コーヒ―カップとか見ているだけでも目が回るから、正直怖くって。

誰かに足を取られた瞬間、俺の右手を基がつかんだ。

「夫婦だもんなあ！」

外野が冷やかかし、あつという間に俺たちは放り投げられていた。

「うあああああつ！！！」

落下の瞬間の怖さに思わず悲鳴をあげてしまう。絶対俺が一番高く放られて、一番低くキャッチされているって思った。

硬直する俺の手を基がぎゅっと握りしめた。ヤツをみるとしっかりと目が合い、左頬にえくぼを浮かべながら大きな声で笑っていて。今の俺たちは対照的だった。

降ろされてからもガクブルで引きつっている俺の腕を持ち上げ、ポーズまでとらせやがって。挙げ句に基は俺の顔をがしっと両手で掴むと、

「ぶちゅっ！！」

みたいなキスを額にしやがった。

後輩達まで、腹を抱えて笑っていた。

全てが終わった部室を後にし、送っていくという菊池と話しながら歩いていると、追い越して来た基が声を掛けて来た。

「預けておく。明日7時。待っているからな。どうせ今日は親と一緒にだろ。写真は明日返すからさ。」

それだけ言つと小さい金属を俺の手のひらに押し付け

「今日だけはお前に譲るよ。」

と訳の分からない事を言い、他の男連中と去っていった。

「勇利先輩、それって？」

「ああ、これね。」

俺はその固まりを指で摘んだ。見慣れたその形。でもキーホルダーはついていない。多分スペアキー。

「基んちの鍵。」

菊池が息を呑んだ。

「やっぱ、勇利先輩と基先輩、付き合ってたんだあ。」

「いや、そう言う事ではないのではないかと。」

俺は無造作にそれをポケットに押し込んだ。

明日。明日にははつきりさせないといけない。もういい加減、付けを払おう。不良債務は雪だるま状態だ。

そうならない様頑張ったいたはずなのに気持ちが悪くなった。

お互い軀だけの関係だって割り切って始めたはずじゃないか。

基が畠山に言われた事で動揺したからこんな事になったんじゃないか。

俺の事信じていてくれたら、あんな事言い出さなかったんじゃないのか。そんな責める言葉と同時に、関係が続けた優柔不断な自分が嫌になる。

明日。長過ぎた季節にさよならだ。

その時菊池が見つめている事に気づいた。こいつとは入部して来た時から気が合う。第二の基のようだった。基すらも菊池を俺のツバメとからかった。そいつが訳知り顔で微笑んだ。

「勇利先輩の好きな人って、誰ですか？」

思ってもいなかった質問に俺は狼狽えた。目の前をよぎる柔らかい

微笑み。その影に動揺した。

ああ、嫌だ。不意に会いたくなるこの気持ちをどうすればいいんだろ。もう二度と会わない方がいい、そう自分に言い聞かせていたはずが、今日はずっとその姿を探していた。もしかしたら基の保護者として来てくれているんじゃないかと期待した。

一目会いたかった。

そのくせ視線が合うのが怖かった。挙げ句の果ては基に兄貴は来ないのかとさえ聞いていた。

「さっきまでいたよ。でも急な取材が入ったからって帰った。」

「お前の兄貴、薄情だなあ。」

気づかれるのが怖くって笑ってごまかした。

黙り込んだ俺に菊池は、

「卒業式の時、探していた人ですか？」

と言い放った。思わず俺は顔を背けた。今の俺の顔を見られなくなかったからだ。

「上手くいくといいですね。」

彼の声はからかってなんかいなくって。

「卒業しても部には顔見せに来てくださいよ。」

「ああ、もちろん。」

うつむきながら、それさえも気まずいと思った。

校門の前では沢山の女の子が基を取り囲んでいて、彼は俺達を見ると不満げな顔をした。その嫌そうな顔と言ったら。

「ざまあねえなあ。」

俺と菊池は顔を見合わせて笑った。基は子供じみた所が有るせいか、女の子に騒がれるのが嫌いだ。しかも嫌いなタイプの

“ ちよいアダルト系 ”

に人気がある。

“ 女って何考えてるか解かんねえ。 ”

彼の声が聞こえるようだ。

かくいう俺もそこそこの女の子に人気があったりするのだけれど、所詮女同士だからこういう特別な日には至って静かだ。

反対にいつもは基の剣幕に遠慮し、遠巻きで見ている女の子達の方は本気モード全開で、さすがの彼も振り切れそうにないらしい。可愛らしい花束と、リボンにリボンを重ねたプレゼント。腕にしがみつく細い腕に、有り得ない事にキスしてくる女の子。カメラのフラッシュ。通り過ぎる他の男連中もその様子を呆れてみている。

そんなばつの悪い状況でも基はいつもの基のまま。そして俺たちは別れた。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第二十話 卒業エキシビジョン（後書き）

ぼちぼち盛り上げていきます



## 第二十一話 ミルクティ

朝の7時。

鍵をよこしたという事は、起こせという意味だろうと思った。

玄関脇の駐車場にシルバークレーのプリウスが無い事を確認し、ほっとしたような寂しいような複雑な気分で鍵を差し込み、

「おはようござんす。」

小さく声を掛けてから家の中に入り込んだ。

今日は基の大学入試の発表の日だ。偏差値59。ぎりぎりのボーダーラインに彼はいた。それを一緒に見に行こうと誘われたと思った。多分彼は受かっている、何となくその予感が有ったから。

それを一緒に喜ぼうと。

俺は彼の親友？それとも・・・？

最初から決まっていた事だ。俺が選択するのは基との友情以外にない。

暑い日も寒い日も一緒に戦って来た。単純に練習をする事だけじゃない。ボクシング部全体の士気を盛り上げる為に調整したり、いろいろな所に顔を出し練習できるきっかけを作ったり。全てをボクシングに費やした。確かに基と寝ていた事は恥ずかしい事かもしれない。でも、それ以上に俺たちは必死でやって来たはずだ。

彼の手を取れたらどんなに楽だろうと思う。きっと基はあの笑顔で俺を抱きしめ、一生大切にしてくれる。見栄えも良くて頭も良くてセックスも上手で。不満なんか無い。でも、一番大切な所が違うんだ。

ともすれば比べそうになる。兄貴は俺に絶対無理強いなんかしないし、俺がしたいと思えるまで待ってくれる。あの人は俺を見守ってくれる。

何よりも、まっさらになった何も無い俺が心に思い浮かべるのは兄貴ただひとりだから。例え実らないって分かっていたとしても、根付いてしまったこの気持ちを殺す事なんか出来ない。

関係を修繕したかった。10年20年後、親友としてのこの3年間を笑って話せるようでありたかった。俺たちがボクシングに明け暮れたこの時間は宝石のような時間だったんだと一生大切にしたいかった。

だから今更彼を傷つけない、なんて生温い感情は捨てた。

とりあえずすぐに部屋に向かうのは止めようと思った。基の部屋は危ない。

そうだ、携帯を鳴らそう。どうしてそれを思いつかなかったんだろ。

それから一度外に出て、電話をかけた。

鳴らした携帯は家の中では響かなかった。それどころか電話に出た基は寝ぼけてなんかいなくって、後ろで電車が発するアナウンスが聞こえた。

「今どこだよ。」

『どこって、筑波に向かうところ』

基気は同時に受験した友人とわざわざ大学まで結果を見に行く所だと言う。俺は拍子抜けした。

「なんだよ、7時って夜の7時かよ。」

電話向こうで基が笑った。

『なんだよって、なんだよ。俺んちにもう来てんの？そっか。じゃあ、できるだけ早く帰るから、夕方には必ずそこにいてくれ。上手くいけば5時には帰れるから一緒に飯食おう。今晚は俺が用意するから作んなくっていいよ。週末バイトがキツいって言うてだろう。俺のベッド使って寝てな。寝込み襲わないから安心しろ。』

その後ろで誰かの冷やかす声が聞こえた。

『電話じゃあ、何だし。もう、結果は出てるだろ。今晚直接会って話そう。ここまで来るとさすがに覚悟できている。俺も男だしな。』  
そうだ、結果なんか出ている。今更待つなんて意味が無いんだ。もう待つべきじゃない。分かっている。試験の結果がどうあれ、俺は基と別れる。

「ありがとう、でも、いい。その前に話しておきたい事が有る。」  
電話でなんて卑怯だつて分かった。でも、今まで引き延ばしすぎたんだ。

『今じゃなきゃ、駄目かよ。』

「今、言いたいんだ。」

俺は言葉を強めた。

「俺は、お前の事……」

“愛してなんかいない。”

それを彼が遮った。

「悪い、電車来た。じゃあ、夜に。会って話そうぜ。」

手の中の携帯は中途半端な音を奏でていた。

なんだか疲れてしまい、鍵をかけるのもそこそこに基の部屋に行った。

その窓際にはベッドがあつて。

俺はそこで何度も彼に抱かれた。その度に感情を殺していた。彼はその事に気づいていたはずだ。それなのにこのベッドで休んでいるという。

皮肉な話だ。俺はダッチワイフとして以外、この部屋にいた事、無いじゃないか。

ベッドの上で待つ気なんか無かった。かといってリビングに行く気になれず。結局布団だけ拝借し床に転がった。

ふわふわの羽毛布団は基の汗の匂いがした。

それから俺は泥沼のように眠って、目が覚めた時には10時を少し過ぎていた。人は一時間半のサイクルで寝るって言うけれど本当

だなあ。

と、丁度そのとき玄関の開く音がした。基気が帰って来たとともにそう思い部屋を飛び出し階段を下りかけた。

違う。

俺は足を止めた。

そのはずが無い。大学までは片道3時間。往復で6時間。結果を見たりしたら最低でも7時間はかかる。学校への報告もある。基だつて帰りは5時つて言つてたじゃないか。玄関の見える踊り場手前で足を止め、俺はそつと引き返した。

今帰つて来たのは会いたくないあの人だ。

俺は部屋の隅で膝を抱えていた。もう眠れなかった。今日は平日で会社員の兄貴が真つ昼間に家に帰つて来るなんて考えもしなかった。

イライラする。

いつその事、家を出ているんだつた。

こうやって挨拶もしないでじつとしているなんて、本当に子供だと思う。でもやりようが無かつた。あの人の顔を見たら何かが狂つてしまう気がした。

だからといってトイレを我慢できるはずも無く。

俺はそつと階段を下りた。トイレ手前で水の流れる音にしまったつて慌ててきびすを返したけど後の祭り。姿を消すのに間に合わず、ドアの開く気配にもう一度振り返りさりげなさを装つた。

「あ、お邪魔しています。鍵は基から借りました。」

少し頭を下げごまかす。目を合わせられない。

彼はいかにもくつろいでいるといった風情で俺を見た。カジユアルなブルーのストライプシャツにサーモンピンクのベスト。履きくたびれたチノパン。結局どこをとつても品がいい。そう言えばこの人は本当かどうか知らないが、司法試験現役合格のスーパーエリートだったと聞いた事が有る。この人だつたらつて信じてしまいそう

な噂だった。

「君が来ているなんて気づかなかった。久しぶり。」  
嘘つけ。知っていたくせに。俺は思わず目を上げた。

兄貴の瞳は乾いていて何を考えているか分らなかった。

「ああ、どうぞ。」

彼は素早く場所を譲るとリビングの方へ向きを変えた。開いているドアからは兄貴が好きだと言っていたバイオリンの音が聞こえた。クライスラーだ。

興味無さげな兄貴の背中に、さっきまで会いたくないって思っていたはずの気持ちどこかへ行ってしまう、反対にこんなもんだよなと俺はいわれのない寂しさに囚われた。

どうせ俺は弟の男友達でしかないからな。

閉まるうとするドア越しに、

「試験はどうだった？」

不意に声が掛かり俺に話しかけている事に気づく。

「おかげさまで合格しました。」

心なしか兄貴の声が緊張している気がした。

「おめでとう。頑張ったかいがあったね。」

さすがに今回はお祝い云々は無いらしい。

「さっき基から電話が有ったけど、結果知っている？」

「あ、いやちょっと。」

あわてて俺は顔だけを扉から覗かせた。

「後で本人から直接聞く事になっているから。ごめん。」

日差しを背に受けて兄貴の顔は見えない。ほんの少し見つめ合った気がする。

「良かったら、何か飲まないかい？」

ためらいがちにかけられた言葉を遮る様に俺は扉を閉めた。

せっかくの社交辞令を無視した自分の幼稚さがいやだった。

便座に座って落ち着くというのも情けないけど、頭を抱え、もう少し大人にならなきゃって思う。この年になって八つ当たりだなん

て。

「さっきはご免。切羽詰まってさ。」

俺はリビングのドアを少し開けて声をかけた。返事は無かった。

「じゃあない。」

そのまま引き返そうとすると、

「どうぞ。」

と柔らかい声が聞こえた。兄貴はキッチンエリアから出てくる所で、手には白い食器を持っていた。

「少し甘いからお好みとは違うと思うけど、たまにはいいだろう。」  
渡されたそれはミルクテイらしい。白濁した褐色。微かにシナモンの香り。

勧められた訳じゃないけど勝手にソファに座わり、彼の視線を感じながら含む。

「おいしい。」

ほっこり、そんな味だった。頬が緩む。確かにほんの少し甘いけど、ど味はなく、まろみがあって温かい。両の手のひらに吸い付く様な、これはカフェオレボールだろうか？その重さが心地いい。何となくはなしに兄貴の味だと思い、立ち昇る優しい香りを吸い込んだ。

兄貴の事を一言で言えば

“寛容”

だと思う。

俺はついついそれに甘えてしまう。そんな自分が嫌になる。限界ぎりぎりまで縋ってしまいそうで怖くなる。もうそうになったら俺は止まれないだろう。兄貴の迷惑そうな表情が目の前をちらついた。それでもきつと俺は引き返せない。

表面にできた薄い膜を啜った。まだ父ちゃんが生きていた頃、絵里子さんが作るホットミルクが好きだった。白砂糖じゃなくてザラメを使い、最後にシナモンシュガーをほんの少しふる。幸せの味だ。

その水面に張った膜をもぐもぐと食べるのが大好きだった。

天国の父ちゃんは何かをしてんだろ。今頃生まれ変わっているのかな？

つづく

L e f t   A l o n e

## 第二十一話 ミルクティ（後書き）

そろそろらぶあまモード入ります 激甘の予定です。温かいお部屋、二人っきりの密室

それと、基バージョン（未公開）よりえろえろシーン一部抜粋の「彼女。」投稿しています。

Left Alone ここまでおつき合いいただいた強者でしたら耐えられるような、かなりきつい内容です。

15禁すれすれ。エピソードの一言に力込めてます。ぜひごらんになってください。



## 第二十二話 壊れる（前書き）

作者：謎のロシア人 えろせ・シュラバスキー・ながる でござい  
ます。

## 第二十二話 壊れる

その時斜め向かいのソファに座る兄貴が少し動き、俺の方を上目遣いで見つめていた事に気がついた。俺と目が合った彼は小さなため息と共に、

「基との関係はいつまで続ける気だ。」  
そう言った。

予期なんてしていなかった。

突然の言葉に俺は体を硬くした。いずれ言われる事になるんだろうとは思っていたけど、その一言はフワフワと宙に浮いていて。

悲しい気持ちだけが湧いて来た。

関係、か。あいつと寝てるって事、兄貴に知られてる事ぐらい、知っていた。でも、俺だって別に好きでこんな関係になったんじゃない。できる事ならこんな関係、最初から無かった事にしたいよ。もう別れるって決めてるけど落ち込んでしまう。俺は好きでもない男に抱かれて平気でいられ、その上何度も何度も快感を貪って。やっぱり自分は名前通りの女なんだって。普通じゃないんだって。

その沈黙を

「済まない。」

兄貴はさも申し訳なさそうに謝った。

なんだよ。なんで兄貴が謝るんだよ。

兄貴は俺のトリガーを引く。心が弱くなっている瞬間を見越して引き金を引き絞る。

嫌になる。

俺は唇を噛んだ。

「基とは別れてくれ。」

続けられた言葉に俺は啞然とした。そう言う事だったのか、と、そうだ、この人は俺を未だに男だと思っているんだった。俺は笑いたい気分になった。男同士の関係はいかんと、本当はもつと前に俺に言いたかったはずだ。何しろ俺にHIVは怖いと説教したくらいなもの。

今までそれを言いたくて我慢していたんだよね。

「実はさ、俺、本当は女なんですけど。びっくりした？兄貴があんまり上手い事騙されるから、言うに言えなくなっちまってさあ。ご免。そんな訳です。」

そんな台詞が俺の頭に浮かぶと同時に、沸々と怒りが湧いて来た。

なんだよ、俺だけかい？弟の事は責めないのかよ。俺も基も同罪だぜ。そんなに俺が誘惑しているように見えんのか？これじゃああの時俺をスベタつてののしつた畠山の母ちゃんと一緒だ。でも、兄貴の方がタチが悪い。

兄貴は優しい顔で俺の事監視してただけだったんだ。

お願いだから少しは俺の話しも聞いてくれよ。

俺だつて辛いんだよ。

俺だつて誰かに解つて欲しい。愛してくれなんて言わないさ。でも、人並みに好きになつてもらえるくらい期待しちやいかなかった？

俺は基が好きなんじゃない。兄貴の事が好きなんだよ！！

手に持つボウルが震えた。こんな時変だけど、こんな高級そうな食器、割ったら弁償できない。そう思つて必死で震えを堪えた。

大きな両手が俺の手に重なり、そつとボールを取り上げる。その仕草があまりにも温かくて、この人が何を考えているか解らなかった。涙で滲む目で彼を見上げると、兄貴はゆっくりと唇を寄せた。

ほんの少し、口の端に触れるようなキス。

なんだよ。俺の事男だと思つてんじゃねえの？

兄貴は俺が座っていた独り掛けのソファに上がり込み、俺を抱き

しめた。それからもう一度、やんわりと鳥の羽が触れるようなキスすると、泣いて欲しくないと呟いた。

確かに兄貴の声で言った。俺の事が好きだから、泣かせたい訳じゃないんだと。

大好きな兄貴の香りに包まれて、俺は狂いそうだった。

この人は俺を壊そうとしているんだろうか。そんな風に言われたら本気になってしまう。

これは夢？

俺の頭をその手が撫でた。あれほど不快だと思っていた行為なのに兄貴がすると心地良い。

俺は思いつく限りいつも兄貴の腕の中で泣いていた気がする。

兄貴はいつだって俺を受け入れてくれた。兄貴だけは特別だった。この人を見上げながらどうしていいか解らず戸惑った。本気で好きだから。恋愛の経験は無いのに、セックスだけは覚えていて、それ以外のつながり方を知らない俺。手段も方法も知恵も無い。その上軀は彼の事を欲しいと言っていて。そんな俺を軽蔑だけはされなくなかった。

澄んでいる、でも少し困った様な瞳が俺を見つめていて。

「基じゃ無い。俺が好きなのは、基じゃ無い。でも……どうしていいか解らない。」

この人が何を考えているか解らない。俺の

“好き”

は、

“愛している”

の

“好き”

だから。

彼は俺を見下ろすと一瞬表情を止めた。それから大きく目を開くと俺の首筋に熱い唇を押し付けた。舌先で愛撫を繰り返しながら、強く、強く、強く！

俺は叫ぶように告げていた。

「好き、兄貴が好き。」

体に回した腕に全ての力を込めた。放さないで！

「兄貴が好きなんだよう。」

我ながら情け無い声で懇願していた。体中が疼き、どうしても兄貴が欲しかった。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第二十二話 壊れる（後書き）

やっとここまで参りました。

次はお待ちかね・・・いや、待っていないって？

## 第二十三話 恋（前書き）

R15 性描写有ります。お嫌いな方は迂回願います。

## 第二十三話 恋

兄貴の手が俺の体をまさぐった。その肌を滑っていく感触に目眩がする。その指が俺の胸に触れ彼が呆気にとられたのが分るから。

「女でご免。」

そんな言葉が頭に浮かんだ。同時に唇が塞がれた。

まるで津波のようだった。

一瞬の間に呑み込まれる。何が起ったか気づく前に攫われ、高波に押し上げられ、溺れそうになり、その体にしがみつく。

打ち上げられるように椅子から柔らかいリビングの絨毯の上に降ろされていた。

愛して欲しかった。俺は一度だって本当に好きな人に抱かれ事が無い。正確に言うと俺はこれまで恋なんて知らなかったんだから。だから一度でもいい。この人に愛されたかった。愛している人と軀でつながる喜びを知りたかった。

兄貴の唇が愛していると囁いた。何度も何度も繰り返される。

厚手のフランネルのシャツのボタンが外され、タンクトップがたくし上げられ、肌寒いはずの空気に晒されながら俺の軀は火照った。貧相な軀。それでも彼は満足そうなため息と共にそっと頬をすり寄せた。

彼の唇と掌が俺のすべてを知りたいと行き交い、体中に兄貴の熱を感じ、俺は焼き尽きそうだった。俺はしがみつくと以外何も出来なくて。それでもこの人から与えられる痛みにも似た刺激の一つ一つに悲鳴をあげて応えていた。

融けそう、燃えそう。俺は形を無くし、意識だけが宙に浮きそう。

でも彼は服を脱ごうとしない。こんなに激しく求め合っているの



に、兄貴はなぜか躊躇っている。

「ねえ。」

俺は彼の胸元に指を滑らせた。自分だけが夢中なのかと悲しくなりそうだった。

この境界線を踏み越えたかった。

その時やつと気がついた。俺は少し鈍いらしい。

「妊娠なんかしない。」

そう言っていると困った顔の兄貴は少し軀を引いて、それから俺を気遣う様な丁寧なキスを鼻の先に落とした。

「欲しい。でも、それだけじゃない。大切だから、大事にしたい。焦らなくても、君は僕の特別な人なんだ。」

その一言に限りなく愛されているって思った。

でも俺にとつては兄貴こそが特別なんだ、そう伝えたかった。

危険を冒す価値がある、そう思えた。もちろん可能性は低いから。だから他の男にコンドームなしでやらせた事なんか一度も無い、そう言つて反応を待った。

「リスクが有るとか無いとか、兄貴とだったらそう言つて、関係ないんだよ。」

すると兄貴は真剣な表情で、覚悟は有るのかと言った。

“覚悟！！”

思わず大きなおなかを抱えた自分の姿が思い浮かんだ。産みたいと思った。辛い生活には慣れているから大丈夫。俺の膨らんだおなかをこの人が支えてくれたらどんな気分だろう。

兄貴の赤ちゃん・・・！！

「産んでもいいの？」

それは賭けだった。自分から抱いて欲しいと思っているのに、兄貴にも責任を強要しているんだから。

それでも彼の顔はほころび、俺はキツく抱きしめられた。愛の言

葉をささやきながら、俺を覆っている全ての服を取り去り、体中にキスを撒き散らした。

初めてのときよりも怖かった。彼を満足させられるか心配だった。服を脱いだ兄貴はとても大きくて6年の歳の違いが目の前に迫ってきた。

その背中に必死で腕をまわした。

好き。この人が好き。

なのに見下ろす瞳が一瞬不安そうに揺れた。どうして？俺はこんなに幸せなのに？

俺じゃ駄目なの？俺は兄貴を悲しませているの？

もう一度その背中に力を込め

“お願い”

そう言いかけた時、彼はほっと緩んだような表情を浮かべると、俺はその腕の中にしっかりと包み込まれていた。

生物学の本で読んだ事が有る。どうして女が感じた後に動けなくなるのか。それは精子が体の外に流れてしまわないようにする、自然な働きだつて。

片肘を立てて微笑む兄貴。その手の甲が俺の頬を撫でている。見つめられて恥ずかしいのに、俺はぼうつとしたまま、彼から目を逸らす事ができない。

「できてたら、産んでくれるんだよね。」

兄貴は小声で囁いた。それから俺の腰を引き寄せ、自分の体の上に乗せた。

その感触に胃の辺りが沸き立つ。

この人と愛を交わした？

「嘘みたいだ。」

独り言のはずが彼はくすくすと笑って受けた。

「嘘だったら困る。」

その目はいたずらっ子のように輝いていた。

「俺の事、男だと信じていたくせに。」

なんだよ、この変わり様は。二人とも子供みたいだった。

不意に兄貴が俺の耳を噛んだ。思わず声が出る。あの蕩けた瞬間が蘇えり、軀を開こうとし慌てて身を隠す。今の恥ずかしい仕草を感じかれたかと兄貴の瞳を覗き込むと、そっちの方がもっと露骨で恥ずかしかった。

兄貴がしてくれたように、俺も俺のやり方で愛している事を伝えなかった。

でもよく考えると、こうやって自分から男の人に触れるのは初めてだ。

「がっかりさせたらごめん。」

俺には本当の意味で

“愛し合う”

事の経験が有る訳じゃない。

それでも不安は感じなかった。きっとさっきと一緒だ。軀の声を聞けばいいんだ。兄貴を感じていればいい。

「兄貴が好き。兄貴だけが好き。兄貴の事考えると他の事、どうでも良くなる。」

兄貴はこの世の全てだ。

両手についてバランスをとりながら、彼の感触を確かめた。それから彼の手を取り俺の腰に持つて来た。兄貴に導いて欲しかった。この人に愛される本能で俺は女に生まれ変わるんだと思った。

「兄貴の手で俺の事作り替えて。俺、兄貴の手で女になりたい。」  
俺の軀の中で嬉しさが弾けていた。

「肇。」

彼は名前を口にした。

「兄貴じゃない。肇だ。」

はじめ、はじめ。兄貴の事を名前で呼ぶなんて恥ずかしかった。照

れくさいけど、初めてその名前を呼んだ。

「は・じ・め。」

その響きに痺れた。

「肇が好き。」

大好き。肇が好き。肇が好き。

なんて好い名前なんだろっ。俺はその名前を繰り返した。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第二十三話 恋（後書き）

「彼女。」をお読みになった方ですと、基、兄貴、そして勇利の態度がそれぞれまるで違うとお気づきと思います。

性愛について、エリス・ピーター著 聖域の雀 に出てくるワンシーンは圧巻！タブーを犯したとしても、愛情に突き動かされて起こした行為は神々しささえ感じます。あんな文章を書ける様になりたいものです。

## 第二十四話 夢を見る

二人で少しまどろんだ。時計の針は一時を少し過ぎていて、南向きの部屋は午後の日差して初夏のように温かった。

先に立ち上がったのは兄貴の方で、大きめのタオルを持って来ると俺をその上に座らせた。最初何をしているのか分らずきよんとしていたけれど、すぐにその理由が分った。

その事に驚き軀を振るわせる俺を、兄貴はとても満足そうに見ていて。

恥ずかしかったけど、それだけじゃなかった。

俺の軀に刻まれていた過去の全ての傷跡が消し去られ、この人と愛し合った記憶だけが残っている。その事がとにかく嬉しかった。

だからシャワーを浴びる気にはならなかった。肌に残った兄貴の匂いをずっとまもっていたかった。

兄貴は完璧だった。単に格好良いとか学歴が高いって事じゃない。思いやりが有って優しくくて。

俺が身悶えるたびに

「怖くないから。」

って囁いてくれて。俺の不安の全て取払い、その瞳を合わせ、自分以上に俺を大切にしてくれた。

先に服を着終えた兄貴はソファにもたれながら俺を待ち、手招きをした。その隣に座ると引き寄せられ短い可愛いキスをしてくれた。まるで恋人同志のように。

でも現実に戻った俺は少し不安だった。第一兄貴と俺とじゃ釣り合わない。この人が軽い気持ちでこんな事をするとは思えないけれど、今有った事を無かった事にしたい、そう思っても不思議じゃなかった。

そんな俺の心を見透かしたかのように、兄貴は言った。

「俺たちは恋人同士なのかな。」

この返事で何もかも決まる、そう思った。

“もう、恋人同士だろう？”

そんな風にさりげなくふざけて返そうか。でも出て来たのは俺の抱える不安そのものだった。

「俺の事、彼女にしてくれる？」

何もかも兄貴次第だから。

兄貴はため息をつく、仕方ないなあ、と言った感じの笑い顔を浮かべ、どうしていいか分らずにいる俺に口づけた。

ほんの少し、つつく様なキス。そのくせ抱えている腕の力は強くなって身動きできなかった。俺は唇を開いて欲しいと誘う。ゆっくりと差し入れられた柔らかな舌が俺の中を擦るのに、すぐに戻され、じらされ、いつの間にか俺は喘ぎ声を上げていた。これが本当のキスっていうものだって思った。

追いつがろうとする俺をよそに、まるで意地悪なヒョウのようにこの人はゆっくりと唇を離す。でも彼の瞳に映っているのは欲望ではなくて、むしろ深くて見えない水の底の様だった。

この時やつと彼が何を言いたかったか解った。

「僕は君の

“ たった一人 ”

になりたい。」

それはとても落ち着いた静かな声だった。

俺が今日ここに来た本当の目的は、基と別れる為だったと告白した。

いつも兄貴の腕の中で泣いているものだから、それが習慣になっ  
てしまったらしい。俺はその胸に顔を埋めていた。

俺はついさっき感じた

“ 今まで生きてきて最高の瞬間 ”

と、これから基に言う別れの言葉で胸が一杯になりそうだった。

男と女の間に関係してあり得ないのかなあ。

俺は基に言うはずだった別れの言葉を心の中で思い出し繰り返していた。

始めから二人の間に恋愛感情は無いのだ。ただあの時はなり行きで軀を提供しただけだ。まるで教科書を貸すみたいに。そして俺は熱心な選手を手に入れた。ある種の取引だったんだ。二人は親友、でもあれは愛じゃない。俺達は繋がっているけど、それは男と女の情じゃない。

「兄貴の事好きになって初めて解った。」

そう、俺は兄貴を好きになって初めて

“愛している”

って事を知ったんだ。俺は兄貴から見返りを欲しいなんて思わないし、兄貴は無条件に俺を包んでくれる。何かをくれてやる事も奪う事も無い、心から受け入れたい。ただそれだけ。

「俺が愛しているのは後にも先にも兄貴だけだ。」

その事を基に分ってもらえるだろうか。俺は彼を愛していないと基が思い詰めている事を知らない訳じゃない。二次試験の前日にあんな事が有って、彼は舞い上がりそうなほど喜んでいて。きっと彼は俺がいい返事を返すと確信したに違いない。でも、あれは間違いだったんだ。

家の合鍵もそう。彼は“持っている”そう言う意味で俺に渡したって事分かった。

その彼があと4時間で帰って来る。多分、合格も決め、お祝いのシャンペンとお気に入りのデリの総菜と、ホールのチョコレートケーキを抱えて。頬にあのえくぼをたたえながら。

「ご免、基。」

それは声にならず、兄貴の胸元へと消えていった。

もっと早く基に別れを告げるべきだった。受験前に動揺させたく



ない、そんな気持ちではつきり言えずにいた自分が嫌だ。別れを先送りにすればするほど、基は傷付くというのに。

そんな俺を彼はただ頷くように抱きしめてくれていた。

この人は俺の中にある感情をありのままに受け止めてくれている、そういう気がした。だから俺を尊重し、俺自信で後悔しない様な結論を出せるよう待つてくれている、そう感じた。

「自分で言えるかい？」

この人は俺に勇気をくれる。

自分で決めた事を強い意志で貫けるように。

だから俺はきっぱり言うことが出来た。

「大丈夫。今の俺は誰よりも強いから。俺が基と別れを決めたのは、基を愛していないからだ。兄貴とこういう関係になったからじゃない。基と俺の関係は、もう既に結果の出ている事だった。」

俺達の別れに兄貴は関係がなかった。俺は彼を愛していない。それが理由だから。だから独りで決着を着けなきゃって思った。

「少し・・・時間がかかるかもしれない。」

俺の体に回っていた手にわずかだけれど力が込められた事を感じた。

「基には納得して別れて欲しいと思っている。」

兄貴には悪いと思う。でもそれは必然だった。

「自分でまいた種は自分で拾うから。はじめだけはつけないと。」

納得がいかない、そう言われもめる予感が有った。もしかして他に誰かいるのかと問いつめられるかもしれない。でも、それは基には関係ない。俺が誰を好きになろうが自由だ。だから兄貴を巻き込みたくなかった。

もしかしたら兄貴が間に入った方が話しは早いのもかもしれない。でもその考えはすぐに捨てた。けりはつくかもしれないがそれで彼が納得できるはずが無いから。

基は親友。だからこそ解って欲しい事が有った。

「決着がつくまで、会えないかもしれない・・・。」

頭の上で小さく頷く気配を感じた。

うやむやに流してしまつたら、俺は兄弟の仲を引き裂くだけで、いつか兄貴は俺という事が苦痛になる日が来る。俺は確かに兄貴を愛しているけれど、それを基や兄貴を犠牲にしてもいいという口実にはしたくなかつた。

兄貴はそんな俺に言つた。

「心の底から君が好きだ。君を誇りに思う。」

その一言で理解されているつて感じた。

「僕はいつまでも待つ。一生でもかまわない。勇利が勇利でいる事が出来る為なら、時間は問題じゃない。僕が生きてるつて事は、君が君である事なんだ。」

引き寄せられ、唇から愛をもらつ。真面目そうに見えるひとほど裏があるなんて嘘だ。俺は彼の上に軀を乗せ、その誠実な顔を両手で包み、はつきりと名前を呼んでいた。

「肇は神様が俺にくれた一番の贈り物だ。俺、肇に認めてもらつて初めて自分の事が好きになれた。」

それが本心だつたから。この人は俺の悪い所や醜い所の全てを浄化してくれる。この人がいて初めて俺は生きる事が喜びだつて知つたんだ。

「肇の全てになりたい。」

できるものなら。この人が俺に注いでくれた愛の分だけ、俺だつてこの人を大切にしたい。

「ねえ、お願いだからこんな俺の事見捨てないでね。俺が愛しているつて言つた事、信じてね。」

「馬鹿だなあ。」

その声は優しくて。

「僕は一生君のそばにいたいのに。」

この人の本音だと思つた。有り得ないほど幸せだつた。

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

つ  
づ  
く

## 第二十四話 夢を見る（後書き）

次回予告 ご免なさい、ご免なさい、ご免なさい！

## 第二十五話 蜂蜜色の時間（前書き）

ゴメンナサイ。結局どろあまセカンドストーリーを投入してしまいました。

## 第二十五話 蜂蜜色の時間

「少し休まなくても大丈夫？」

気持ちよくって兄貴にもたれている俺にこの人はそう言った。

「大丈夫。」

今はこうしていたい。兄貴の心臓の音を聞いていたかった。

「肇が好きだから。」

その一言で、鼓動が早くなるのが分かった。驚いて見上げると、兄貴は困った顔で俺を見下ろしていて。

「僕のベッドにおいで。」

そう言った。

「お姫様だっこは嫌いかな？」

照れくさそうに。

「うん。」

それは初めての事だったけど。

「して。」

そう言いながら彼の首に腕を巻き付けた。

兄貴のベッドは当然の様に兄貴の匂いがした。服のまま羽毛の布団に包まれ

「安心してお休み。」

って言われ、腕の中に囲われた。でも、当然、眠れるはずが無く。

「はじめ。」

そう言っで見つめている彼の気を引いた。

「ん？」

「もう、飽きちゃった？」

兄貴が息を詰めた。

「馬鹿だなあ。」

困ったような、それでいて欲望を讃えた瞳が俺の顔を覗き込み

「いいの？」  
って、聞いた。

シートが心地よかった。基に抱かれていたのが嘘の様だった。唇が合い、それを返す喜びを。内側の柔らかい所がこすれ合い、お互いの小さな違いを感じあう。ぴちゃっぴちゃっという小さな水音が頭の中でこだましていた。

「肇……。」

自然にその名前がこぼれた。

「んっ……。」

彼が差し入れる舌先に、自分の舌を丸める様にし、そつと下から絡めた。彼の喉が小さく鳴るのが嬉しくて、舌の先を揺らし彼を刺激する。なんて素敵なんだろう。自分一人が一方的に愛しているんじゃない。ましてや、受け取りを拒んでいる愛を強要されている訳じゃない。これって、お互いが分け与え合う感情だって思った。全神経を唇に集中して兄貴を感じうつとりしていた。そのはずが、

「あっ！」

この人の大きな手が動いて、俺の胸を包んだ。

「うくっ。」

摘まれ、こねられ悲鳴は彼の口の中。全てが飲み込まれ、ああ、蹂躪されているって、思った。俺はこの人に支配されている。俺はこの人の女だって。

従属している。それは均等な関係ではないのだろうけれど。それでも俺はこの人のモノになりたかった。

彼はゆっくりと唇を離す。

兄貴は意地悪だ。

欲しい、欲しい。この人の全てが欲しい。耐えきれなくて、しがみつき引き寄せる。

「お願い、ねえ、欲しいの。肇が欲しい。」

そしてこの人はいやらしかった。強すぎる刺激に怖くなり、思わず「嫌っ。」

って抗うと、

「好いから。」

って言ってもつと惨くする。奥歯を噛みしめ、反り返る俺に追い討ちをかける様にキスをして。

「声、聞かせて。」

いやらしい、いやらしい、いやらしい！！

身悶えが止まらない。快感がスパイラルで降りて来る。そのくせこの人の動きは緩慢で、俺の軀ばかりが別の生き物みたいに動いていた。

声かするほど叫ばされ、何度も意識が飛びかけた。でも兄貴は余裕で、俺は味わい尽くされている、そんな感じだった。

そしていつか羞恥心と快樂のないまぜになった渦に巻き込まれ、気を失っていた。

「恥ずかしい……。」

気がついた俺は両手で顔を覆って兄貴の視線を避けた。きっとAV女優並みに凄かったんじゃないかって、嫌になった。

とにかく、恥ずかしかった。

「俺は、嬉しいよ。」

そつと抱き寄せられた。

「俺たちは愛しあつたんだ。俺たちは特別なんだよ。」

その関係に堕ちていきたかった。

それから少し寝て優しいキスで起こされて。兄貴と離れるのが辛かった。

そんな風にぼんやりとしている俺の軀を兄貴が気遣う様に優しくタオルで拭いてくれ、張り付いている髪を撫でとかされた。

「風邪、ひかない様にね。」



なんて。

大切にされているのは分かってるけど、手慣れてる。俺が言うのはおかしいのかもしれない。でも大人ってこういうものかと思ってた。

すると俺の頭の上で、ちよつと笑う音がして

「俺だって、童貞じゃないさ。」

その上

「初めては高校1年の夏で、それからしばらくしてやってるとこ弟に見られて。親にはしこたま怒られた。」

意外な言葉を聞いた。

「俺は普通の男だから。」

そう言いながら、俺の首筋に甘く吸い付いた。

「愛してる人の事ばかり、考えてしまふ。」

その腕の中で揺すられながら、

「絵里子さんの休みの日に、改めて挨拶にいこう。」

って言うてくれた。

赤ちゃんができてたら、学校行けなくなるなって思った。でも兄貴が許してくれるなら、というか、できたらやっぱり産みたいし。

俺はまだ子供だから。子供が子供産むって反対されるかもしれないけれど。でも、多分大丈夫。この人は俺を一生守ってくれる、そんな気がした。

この人の赤ちゃんだっこして

『おかえり。』

なんて言いながら暮らす毎日って、どんなだろう。

兄貴に寄り添いながら、基の事を思い出していた。あいつの腕の中で何回も達した。動物って、本能に勝てないって思い知らされた。好きでもない男に抱かれて感じる事が惨めだった。

でも、違う。

兄貴と交わすキスの方が何倍も良い。奇妙な話しだけれど、それだけで自分の軀にスイッチが入った。彼を迎え入りたい。その準備を始め、何もかもが潤った。でもそれはとっても嬉しい感覚で、女でいる事がとても良い事だっと思えた。それに何よりも終わった後に心があつたかくなつた。

それは基としていた快感だけのセックスなんかとはまるで違っていた。

「もうそろそろ。」

時計の針は4時を指していて。後一時間で約束の時間だった。

兄貴に關係するものは何でもそう、気持ちいい。このベッドもそうだ。このまま根っこが生えそうになるくらい素敵だった。だから「行かないと。」

本当に離れられなくなってしまう。

「ずっとこのままこうしていたいなあ。……時間が止まれば良いのに。」

未練がましい俺はもう一度兄貴の匂いを吸い込んだ。

「ここにいても良いんだよ。」

ふざけながら返され、兄貴が俺の代わりに基に話しをつける気がするって事感じた。

「それは、駄目。」

兄貴の優しさにつけ込んだじゃ駄目だよ。

「必ず戻ってくるから。」

その時まで、待っていてくれる？ねえ、お願い。戻って来た俺の事、喜んでね。

基を待つ為に二人でリビングに戻った。もちろんミルクティは冷めているから。

「何か飲み物でも入れようね。」

彼はコーヒーマーカーをセットした。俺は少しでも兄貴と離れるの

が辛くって、その背中に寄り添っていた。

「甘えん坊。」

彼が笑うから。

「うん、そう。」

ってシャツ越しに背中を引っ搔いてやった。

「俺、放つとかれると寂しくって死んじゃうかもしれないよ。だから、ねえ、独りにしないでね。」

すると兄貴は困った顔で振り向いて

「馬鹿な事言っくんじゃない。」

ってたしなめた。それから

「君がいなくなってしまうたら、僕がどうなるか考えて言っているのかい？ 勇利は僕がどうなっても平気って事なのかな？」  
なんて、意地悪を言いながら抱きしめてくれた。

コーヒーが出来上がるまではほんの少し時間があつて。俺たちはもう一度ソファに戻ってキスをした。

空気の入れ替えられたリビングは一瞬肌寒かったけれど、すぐに二人の熱で温かくなった。

L e f t   A l o n e

つつく

## 第二十五話 蜂蜜色の時間（後書き）

できるだけ早く、予定の修羅場も書き上げます！

## 第二十六話 傷（前書き）

暴力シーンがあります。苦手な方は回避願います。

## 第二十六話 傷

何も怖い事なんか無いって思った。兄貴のまっすぐな瞳に俺の姿が映っていて、その唇の端が緩やかに上がる。視線を交わし合う事がこんなに素敵な事だなんて。めちゃくちゃドキドキして、自分の中に眠っていた

“ 女の子のかから ”

がきらきらめいているみたいだった。恋って甘い。そして今の俺は言葉も発せずただ想うだけの人魚姫じゃない。彼は目の前にいて、俺を受け止めてくれる。

「ねえ。」

「ん？」

好き。

「キスして。」

この人は俺を甘やかしてくれる。顎を持ち上げられ、キスをもらい、彼のたくましい背中に腕をまわした。彼に包み込まれる快楽に酔っていた。

最初に気づいたのは冷氣だった。北側の玄関から続く廊下から冷えた空気が流れて来て。それが危険を告げた。

はっと顔を上げると、まだ帰ってくるはずの無い基が啞然とした顔で俺たちを見つめていた。

「お前ら、何やってんの？」

ひどく乾いた声だった。

俺が基を見たのと、彼が俺達に冷たい言葉を投げつけたのはほぼ同時に。

何をしているのか分からないはずが無い。抱き合い、キスをして気持ち確かめ合っていた。それ以外の何者でもなかった。

だからその視線。その視線に体が凍るかと思った。それは子供の頃くそおやじにやられそうになった時にも感じた事が無い感覚だった。逃げようと思っても逃げられない。そう思った。

彼の怒りが怖いんじゃない。それ以上に、追いつめられている基が怖かった。

それは基であって基じゃなかった。

近づく彼からは憤怒の青白い炎が見えるようだった。

俺の舌は凍り付き、言うはずだった言葉もどこかへ消え去って、思わず兄貴にしがみついていた。

「いやっ！」

来ないでくれ！！

兄貴の腕がしっかりと俺を抱きしめ、二人基と向かい合い、

「基に話が有る。」

兄貴は躊躇わなかった。そんな彼を遮り

「離れる。」

聞き慣れたはずの声がそう命じた。

「離れろって言うてんだよ。」

彼は怒鳴るでも無くそう言つと、予想もしていなかった強い力で俺を兄貴から引き離し、よろめく俺を無理矢理向かい合わせに立たせた。

「何やってんだよ、勇利。」

俺の顔を覗き込み、基がこの現状を必死になって否定しようとしているのが分かった。

「しっかりしろよ。お前、俺の女だろう？」

その声は悪ふざけをとがめる小学校の先生のような。俺に言い訳をしろと言っていた。それから、謝れと。

謝れ？

基は何を言っているんだ？

沸々と沸き上がる思いがあった。

俺はお前の女になんかなった事、一度も無い。

俺はお前の所有物じゃない。

俺にだって俺の気持ちがあるんだよ、なあ、基。お前がそれを大事にしてくれなかったただけだぜ。それどころか今まで踏みこじっていたじゃないか。それなのに、何言ってやがる。

ふざけるな！！

俺は渾身の力で基を振り払った。基は意外な顔をした。

俺の中で何か切れた。きれいごとじゃない。俺はお前と別れたいんだ！こんな関係、もう、嫌なんだ！！

「俺はお前のモノなんかじゃない。第一、基は俺の気持ちなんかおかまいなしだったじゃないか。結局抱くのが目的だったんだから。だからいつその事、ずっとダッチワイフのままでもよかったんだ。それなのに、何を今更。恋人みたいなふりは止めてくれ。俺達は愛し合って抱き合ったんじゃない。後悔しないって言ったのは、お前の方だ！！」

俺が壊したんじゃない。お前が壊したんだ！！

俺が好きでお前に抱かれていたと思っていたのか？俺が抱かれた後、どんなに惨めな気持ちになったか、考えた事があるのか？どれほど俺がお前の事、愛せるようになるうと思っただか、考えた事あるのか？でも、駄目だったんだよ。

そりゃ、気持ちよかったさ。でもな、まるで反比例のグラフみたいに俺の中は冷めてったんだよ。感じれば感じるほど、お前じゃ無い事が解るから、お前の事愛してるんじゃないって解るから、どんどん自分が惨めになってったんだよ。こんな事続けている自分が大っ嫌いになってったんだよ。



「畜生！」

そうさ、大嫌いだ！！大嫌いだ！！

「大嫌いだ！！」

腹の底から叫んでいた。

俺達は憎しみあう敵同士みたいに対峙した。俺だって正面から決着つけたかった。

それが、兄貴に後ろから抱きかかえられ少し後ずさった。

“ いけない。”

彼の腕が止める。俺はソファの向こうに押し出され、逃げろって言われてるのが分かった。

俺を追いかける基を兄貴がつかみ、

「よしんだ！」

「放せ！！」

基が肩を回し腕を払う。それから、脇を締めビョータンで拳を固め……。右の肘が下がった。

「止める！！」

叫びは届かなかった。兄貴の心臓の下に突き上げるような拳。鈍い音。彼はそのまま手を留め、押し込むように膝を折り腰がねじれる。それはまるでスローモーションを見ているみたいだった。

兄貴のせいなんかじゃない！！

「俺が決めたんだ！」

俺たちの事にこの人を巻き込むな！

「ふざけやがって！！」

兄貴をかばおうと慌てて止めに入った俺。泣き出しそうな、すがりつくような目が俺を見る。でも、そんなのご免だ！！同情なんかしてやるものか！

お前は自分が何したのか分かってんのかよ！！

強い力を両肩に感じた。つかまれた。ああ、良しさ。でもな、力で何とかするなんて思っなよ。にらみ返す俺に

「なんで……」

彼が言いかけ……でも、それは最後まで聞く事ができなかった・  
……。

ぐわんっ

頭が揺れた。

何が起こったか解らない。

吐きそうだ。吐きそうだ。

ああ、吐きそうだ。目の前、暗いよ。  
気持ち悪い。

涼しい風が目の前をよぎった。

兄貴と視線が合った。どうしてそんな驚いた顔するんだよ。

……俺、今どこにいるの？

頭の上で何か音がして。見上げると、何かが落ちて来た。

何だか見覚えが有る。俺の顔に当たったそれは、前の方に大きくバウンドして。

兄貴、あれっ？血、出ていない？出てるよ、血。ああ、止めないと鼻血だね。頭高くしてね、喉に落ち込まないように。気持ち悪くなるからね。

ああ、吐きそう。

血？この血は俺の血？

ぼたぼたぼた……？

手についてるよ。左？左の頬？血が出ている。でも、痛くないよ、大丈夫。それより……気持ち悪い。

何みんなしてそんな顔するんだよ。これだから男は駄目なんだ。これ程度の血が出たくらいで怖じ気づくなんて。

それより病院へ行かなきゃ。気持ち悪い。何かが変だ。

救急車？そんなの大げさだ。

怪我って言ったって、どうせ顔だろ？お前知ってるじゃん。顔は血管発達してるから、小さな傷でも血が出やすい様にできたんだよ。騒ぐ必要なんか無いんだって。

え？一緒に行く？基が？いいよ。独りでいける。子供じゃないんだからさ。格好悪い。独りの方がいいんだよ。

じゃあな、また。ああ、部屋汚してご免、悪いな。後始末、よろしく。恩にきるよ。

自宅の近くの市民病院に行こう。後で保険証持ってくるのが厄介だから。保険証と言えば俺は今年度までひとり親福祉対象だ。今は3月だからラッキーと言えばラッキーか。医療費が少し安くなる。でも4月1日からはどうなるんだろ。

ああ、嫌だな。また絵里子さんに迷惑かけちゃうよ。

今日は自転車じゃなくてよかったなあ。ふらふらする。

タクシー。ナイスなタイミング。

だからさ、驚かないでよ。たいした怪我じゃない。でもさ、タク  
シーとラッキーってちよつと似てるよね。ははは。  
何、俺、変。・・・酔っぱらってるみたいだよ。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第二十七話 病院と検査と同情と（前書き）

怪我などに関する生々しい描写が有ります。苦手な方は回避願います。

## 第二十七話 病院と検査と同情と

案内のカウンターにいくと可愛い女の人がぎよつとして俺を見た。

『大丈夫う、大げさだなあ、顔の傷は血が多く出るようになってい  
るからさあ。見た目よりひどくないんだよう。』

そう言つて、納得してもらつて。

えらく体格のいい看護師さんにどこかへ連れて行かれた。

受付手続き、やつたつけ？

血がついているからと言われ、代わりに

“ 検査着 ”

とか言う薄つぺらい服に着替えさせられ肩からタオルを被せられた。  
脱いだシャツのボタンが無い事に気づいて欲しくなくて、こつそりと丸める。服の前が嫌になるほど開いてて、

『寒いねすね。』

つてバスタオルを前でかき合わせうつむいた。そんな俺を、側で付き添つてくれている看護師さんが舐めるように見ているみたいで怖かった。

小さな個室で先生が待つていた。穏やかな顔のおじいちゃん先生だった。

『何だかおおごとっぽくつてスイマセン。ちよつと転んだだけですよ。』

俺、呂律が回っていない？そんな事無いよね。それに先生が聞いて来る質問に少し遅れて答えている気がする……。まるで酔っぱらいみたいだ。

先生はあつかんべをさせたり、臉をひっくり返して俺を見た。

頭？打ったかな？意識は、ええと、少しだけ無くなった気がします。気持ち悪いです。いえ、吐いてはいません。ご飯？食べました。

牛乳とパン。朝の6時半かな。それから、ミルクティを飲みました。美味しかったです。

なんだか、泣きそうだ。

「胸の音を聞かせてくださいね。」

そう言われ、バスタオルをそつと持ち上げられ、俺にやんわりと目隠しをした。先生の目に何が映っているのか、俺には見えていないけれど、分かるから。

「違います。」

そう思わず弁解し、聴診器を耳にしているから聞こえないって後から思った。

タオルが降ろされた後も、先生の表情は変わらなかった気がする。それより、傷の手当、しないの？あ、でもやっぱり血、止まってるじゃん。ほら、心配なんか要らない。

「ご家族は？」

その一言で俺はやつと目が覚めて来た気がした。

「大丈夫ですから、私は。母は自宅にいたとは思いますが、でも、忙しい人だから呼ばないでもらえますか。心配かけるのも嫌だし。保険証は後で自分で持ってきます。私、怪我なれているから。」

やつと笑えた。そう、この感じ。いつもの自分がやつと戻ってきた。先生は同情する様な顔つきで俺を見た気がした。それからいろいろな所に電話をかけた。

「検査はしないと。幸いCTの空きがあつて予約を取れたから。少し時間がかかりますよ。それと、他にいくつか検査があつてね。怪我をした女の人には必ずするようにこの病院では決まっている事だから。悪く思わないでくださいね。あなたを守る為だから。」

検査を待つ間に消毒をもらった。形成の医師だと名乗るその人は、顔の傷は浅く縫う必要は無いからセロテープみたいなもので止めておくといい。やつぱりね。

「なにで怪我をしたかは分かるかな？」

まるで答えを期待していない様な声でそう聞かれた。

「ぼんやりと俺の記憶の目の前をかすめて通り過ぎる物が有った。多分、アレだ。リビングの食器棚の上。埃を被り、見捨てられていたインターハイの第八位の盾。」

「プラスチック。」

何の変哲も無いプラスチック。でもあの中には俺たちの3年間が詰まっていたはずだった。

「多分、プラスチックですから。」

ため息と、トキソイドという声が聞こえた気がした。

「まれにケロイド体質という人がいて、治りが思わしくない人がいる。それだけは気をつけないと。」

それからぶしつけなほど俺の軀を見た。

「女性としての栄養状態が悪い人ほどそうなんだよ。傷が熱を持ったら要注意だ。」

後で分かった事だけれど、結局俺はそう言う体質だったらしい。

どうしておしつこの検査なんかするのかとコップを渡され文句を言った。その上初めて内診台つてのに乗せられた。

「大丈夫よ。」

最初の看護婦さんがずっと尽きつきりで手を握ってくれていて。

「たいした事ないのに大げさだなあ。」

でも優しい顔をしたその人は困った顔で俺を説得した。

「ご免なさいね。そうだとは思いつけど、病院の決まりなの。すぐ終わるから、我慢してね。」

体の中に入ってくる金属は、本当に冷たかった。

絵里子さんがやって来たのはCT室から戻る途中だった。その頃にはもうすっかり体調も戻っていて、化粧すらしないでそこにいる母さんに驚いた。連絡するなって言ってたのに。

「遊里！！！」



母さんは抱きついてきた。泣きながらその手に力を込めた。

「大丈夫だよ、母さん。何ともないから。友達んちの階段でこけてさ。」

思いついた言葉をとにかく口にした。少ししてからその嘘は現実味を帯びて自分の中に落ちて行つた。

「なんだか頭ぶつたみたい。でも、もう平気。ピンしゃんしてるよ。念のための検査つて、先生は言つてた。ご免ね、心配かけて。」

こんなの怪我のうちには入らないよ。

「わざわざ来てもらう事無かつたのに。それより仕事、大丈夫？」  
その言葉に彼女は表情を変えた。苦虫を潰したようになって言うのはこういう顔の事を言うんだろつな。でもなぜ？心配いらないつて言つてんのに。俺は大丈夫なんだから。

そう思いながら俺は絵里子さんを抱きしめた。絵里子さんはいつも女の人の香りがする。お化粧の粉の匂いだ。今日はスツピンなのにいつもと変わらない。そう言えば昔からこの香りだった。父ちゃんと3人で行つた水族館でも、小学校の授業参観の時でも。

「心配ないから、母さん。それにしても、腹減つたなあ。朝からずつとなんにも食つてない。今何時だよ。」

“ ミルクティを飲みました ”

その言葉が不意に浮かんた。俺の手のひらで揺れる、甘くて温かい、  
「ミルクティ……」

絵里子さんがびっくりした顔で俺を見つめた。俺は泣いていた。

「ホツミルクが飲みたい。」

ご免ね、母さん。心配かかけたりして、駄目な娘だね。

「ちっちゃくても、怪我は怪我なんだね。へへっ、気が弱くなつて  
るみたいだ。なんだかさ、久しぶりに母さんのホットミルク飲みた  
くなつた。変だね。昨日お赤飯食べ損ねたから、今日は帰ったら作  
つてよ。それなら簡単でしょう。ねえお願い。もの凄く、飲みたい

んだ。」

俺の手を握る絵里子さんの手もとても温かった。

結局俺は一日入院が必要という事になった。

あてがわれたベッドで着替えをした。絵里子さんは先生から話しが有ると言われ、ここにはいなくてかなりほつとした。途中若い看護師の卵だという人が入院のパンフレットを持って来てくれて、ついでにと手伝ってくれて軀を拭いてくれた。本当は独りでやりたかったけど、こびり付いた血は拭き取らないと気持ちが悪いし、でも自分でやるには限界があつた。

20歳ぐらいのその人は好奇心一杯の目で俺の胸元のキスマークを見ていた。その上には基に掴まれた時の跡が痣になって残っている。

病院の服を着るとそのキスマークが必要以上に目立った。襟を掻き合わせる俺に彼女は待つてるように言い、しばらくして何かを手に戻ってきた。

「あなたも、覚えとくといいわよ。」

それから手にしたものをかたかた振った。

「彼氏、激しそうな人だから。」

俺の顔を覗き込むおかしそうな顔に俺もつられて笑ってしまった。

彼女は濃い色のファンデーション、できたら夏用のウォータープルーフがいいって教えてくれた。それを使うと絆創膏より自然に隠せるって。

「でもさあ、それを常備しているお姉さんも、凄いやね。」

俺は軽口を叩いていた。彼女は真っ赤になって、

「馬鹿っ。」

って俺の肩にげんこつを当てた。

「君の彼氏ってどんな人？」

「秘密。いい男だよ。」

俺は都合の悪い事を全部忘れて、兄貴の温かい腕を思い出し赤くな

った。

兄貴の体温、囁き声、抱きしめる腕の心地よさ、見つめる瞳。そしてあの香り。その全てに心が震える。

看護師さんが、

「惚気てる？」

って俺の顔を見て笑った。

それにしてもおかしいの。俺、病院に入院しているよ。しかも、看護師さんとじゃれてるし。

昼の出来事は幻覚だったって思えてきそうだ。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第二十八話 “ 絵里子さん ”

彼女が帰ると入れ違いに絵里子さんが部屋にやって来た。

「先生と話しをしてきたの。CTの結果もレントゲンの結果も異常なしですって。でも、今日はこのままベッドの上で安静にしている様子を見るそうよ。何も無ければ明日には帰れるから。」

彼女は椅子に座らず俺を見下ろした。それからずっと視線を逸らしながら言った。

「お友達の所に連絡しないとね。心配しているんじゃない。」

そうだ、忘れてた。というより、忘れていたかった。もう外は夕焼けで、あれから何時間も立っている。兄貴の怪我が心配だった。そうだ、兄貴の怪我。あれは鼻の奥の血管が切れた時の出血だ。

「電話しなきゃ。」

俺は慌てて携帯を探った。

「駄目でしょう。」

その手を母さんが止めた。

「病院の中は携帯禁止。」

ああ、そうか。忘れていた。

「ちよつと公衆電話行ってくる。」

そんな俺の手を母さんは握った。

「いい、遊里、よく聞いて。」

その声は穏やかだけれどとても緊張している。

「あなたは脳震盪を起こしたの。自分じゃ気付かなかったかもしれないけど、病院に着いても朦朧としていたの。ひどい目に合っているの。あなたはしっかりしているつもりかもしれないけど、本当は違うのよ。」

俺は彼女が何を言いたいのか解る気がした。俺は肩を落とした。

「本当に、何にも……。階段から落ちただけだから。」

必死に言い分けを考えた。絵里子さんが考えている様な事じゃない

よ。俺は別にそんな目に有った訳じゃない。強姦された訳じゃない。でも、それを言う事は出来なかった。

「基の家の階段、足滑らせて一番上から落ちで、がんがんぐっていったから。それで頭ぶったせいで脳しんとう起こしたんだよ、きつと。傷もその時出来たんだし。」

「分かってる。階段から落ちた話しは聞いたから。もう過ぎた事は忘れましよう。そんな事、思い出したくないでしょう。でも、これ以上母さんを心配させないで。言う事聞いて、今は体を休める事だけに集中して。お願いだから。私はあなたの母さんのよ。」

母さんは握る手に力を込めた。俺は答え様が無く、その手にしがみついた。

「どうしてもって言うんなら、私から友達に連絡してあげるから。遊里は今ベッドから出ちゃ駄目。いいわね。」

その声は初めて聞く、母さんの泣きそうな声だった。

そう言えば、俺は母さんが泣く姿見るのは今回が初めてだ。父さんが死んだ時でも、俺の記憶の中の母さんは泣いたりしなかった。ご免ね、母さん。心配かけて。俺、本当に親不孝だよな。

「母さんの言うとおりにする。おとなしくしてるね。」

そんな俺を母さんは柔らかい目で見つめていた。不思議だなあ。母さんこうして話すのが久しぶりな気がする。

「何か、飲み物買ってきたげるから。それまで友達の電話番号と、言いたい事、メモしときなさい。」

そう言う少し鼻をすすり、部屋を出て行った。

母さんが出て行った後こっそり携帯を取り出すと、マナーモードで気づかなかった着信が12件も入っていた。でもその名前は全て基だった。

「今どこ？」

「大丈夫か？」

「心配だ。」

震える声が何度も俺の名を呼ぶ。

『 ゆうり 』

一番小さい音で、布団を被ってこつそりと聞いた。本当は基の声なんか二度と聞きたくなんか無かった。でも、聞かない訳にはいかなかったから。

『 こんなつもりじゃなかった。 』

『 どうすれば良い？ どうすれば良い？ 』

『 付いていけば良かった。俺、心配で死にそうだよ。ゆうり。返事してくれよ。 』

『 声、聞かしてくれよ、頼むから。 』

『 許してくれ。俺だって・・・苦しいよ。 』

『 会って話し、しよう、な？ 謝るから。今までの事のも、全部。悪かった。俺が悪いつてわかってるから。謝らせてくれよ。 』

『 一度だけでも良い、お願いだから会ってくれ。俺の話しも聞いてくれよ、頼むから。 』

『 本気だったんだ。本気で愛してるんだよ。お前の事。だからもう傷つたくなんか無いんだよ。それだけは分かって欲しいんだ。 』

彼がいくら泣こうか俺の心には届かない。歯を食いしばり、唇を噛んだ。

俺が悪いつて、本当は分かっている。あの状況で基を責めるのは間違っている。あいつの気持ち、知ってて。勘違いを放つといてそのままにして来た俺がいけない。その上、兄貴と寝たのもバレている。きっと。それは俺なりの直感だった。だから基はあれほどまで怒ったんだ。俺が浮気をしたって事だけじゃなくて、あの誠実な兄貴を汚したって。

でも、だからこそ兄貴に当たるのはお門違いだ。

基の兄貴を盗った。仲の良かった兄弟の間を引き裂いた。その罪悪感以上に、兄貴に手を出したヤツを許せなかった。

兄貴の事が心配だった。

俺は入院案内の裏の白紙面を出し何度も繰り返し覚えてしまった番号を書いた。

兄貴の一度もかけた事の無い携帯番号。でも、何を言えいいんだろう。

“ 今、病院です。たいした事はありません。後で連絡します。心配はいりません。それより兄貴の怪我が心配です。今晚は携帯が繋がりません。明日、また。”

とでも？  
あれから二人はどうなったんだろう。不意に体が冷たくなっている事に気がついた。

ああ、取り返しのつかない事をした。  
兄貴に会いたい。とにかく会って抱きしめて欲しい。兄貴の無事を確かめたかった。

俺は独りぼっちだ。

どれだけそうして頭を抱えていたんだろう。時間が経っていた。でもまだ母さんは帰らない。兄貴に話したい事がありすぎて、言葉にするのが怖い。

ふと思いついてまだ電源を切っていなかった携帯から基の番号を検索した。

変な話した。兄貴の番号はそらで言えるのに基の番号は電話機に覚えさせている。数字を見れば基だと分るけど、自分ではそれを覚えていない。その上今の俺はあいつと直接話す勇気がなく、母さんに別れを言わせようとしていた。番号を書き写し、デリートし、電源を切り、もうこれっきりと呟やく。

“ こちらの心配はいりません。無事です。それよりも新しい生活を頑張ってください。”

そのメモを帰って来た母さんに渡した。

「これが友達。それと、こっちがその兄貴。」

紙には二人の携帯番号以外に書く事が出来なかった。

「俺が階段から落ちた時、兄貴が受け止めようとしてくれたからさ。絵里子さん、知ってるよね。ほら、時々車で俺たちの事を送ってくれたあの人だよ。兄貴はとっても良い人だから、俺の体の事、心配してると思うから。大丈夫って、俺は平気だって伝えてね。兄貴が悪いんじゃないんだから。」

気がついたら、弁解じみた事を言っていた。

その晩絵里子さんは仕事を休んだ。

「もうそろそろ私も歳だから。」

そして、面会時間ギリギリまでいて他愛の無い話しをし、帰り際、

「ねえ、遊里。母さん今の仕事、辞めてもいいかなあ。」

ってぽつんと言った。

「母さんも、疲れちゃった。遊里にこれまで以上に負担かけるかもしれないけど、いいかな？」

私はぽかんと口を開けていた。それを見て母さんは目を伏せた。

「いいよ。」

俺は心のこもらない声で答えていた。

「母さんがそうしたいなら。」

それからじわじわと言葉の意味が分かってきた。

「俺も少し疲れてきた。家に帰っても絵里子さん、いないし、すれ違いばかりで、なんだかさ、今まで一緒に暮らしていて、一緒に暮らしていないみたいだったから。」

体が震えているなんて。

「母さん、他人みたいだったもん。俺、母さんの事大好きなのに、見捨てられてるのかなって思ってた。たった二人だけの家族なのに……」

俺は初めて母さんに本当の事を言っていた。



「俺、正直言うとね、母さんがいなくて……寂しかった。」  
そんな俺の肩を母さんが抱いた。

「ありがとう、遊里。本当はね、さっきお店に辞めるってお願いしていたんだ。母さん、もう“絵里子さん”は辞めたかったんだ。」

この時初めて俺は母さんと親子の会話をした、そんな気がした。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第二十九話 待ち人

次の日自宅に帰ると赤飯が用意されていた。

「凄い！！」

俺は手を叩いて喜んだ。

卒業式の日はありつかなかった。後で母さんは赤飯を作るのには特別な豆が必要ですぐには手に入らなかった、そう教えてくれた。でも今日の前にあるのは昔よく食べた赤飯そのものだった。

二人取り合って食べた。その塩味が懐かしかった。小豆の硬さも覚えているから不思議だ。

「俺さあ、いくら同じように作ろうとしても、必ず違う味に仕上がんだよなあ。不思議。今度教えてよ、ね。」  
母さんは嬉しそうに笑った。

本当に嬉しそうに笑った。

次の日、兄貴からの電話は来なかった。

握りしめた携帯が温かい。

電話が鳴る事は有っても、あの人の番号じゃない。  
充電していても目が離せない。

そして次の日も。

今日も病院へ行く。一日の半分を使つて。そして明日も……。

一日、一日。それはスローモーションの様に過ぎていく。

頭の方はもう何ともない、でも、傷が治らない。自分でも分る、熱が引かない。抗生剤が万能薬だなんて誰が言っただらう。

火照る。顔が。それから、逃げ場の無い気持ち。これを、どうすれば良い？

自分から連絡する事なんてできなかった。怖かった。あの後二人はどうなったんだろう。兄貴からの電話を待つしか無かった。兄貴がかけてくれる気になるまで。

入院している病室で、俺が退屈しているのを知った同室の人が見せてくれた週刊誌。そこには

“ ヒストリー ”

ってタイトルで連載が載っており。普通の人が事故に巻き込まれ人生がどう変わったか。その事で今までの自分を振り返りどう思っているのか。淡々と、それでいて当事者じゃなきゃ語れない言葉で書いてあった。決して感動で泣いてしまうような文じゃない。でも心に何かが残る事は確かだ。その文末には、文責 木下肇 とあった。そのおばちゃんは、妙に感情のこもった口調で兄貴の文を読んだ。それ書いたの、俺の恋人だよって自慢したかったけど言えなくて。

どうせ

“ 嘘だあ ”

って笑われるって思った。

その事を思い出し、苦笑いがこみ上げて来る。

本当は、嘘、だったのかも知れないって。

あれから丁度6日経ち。病院から帰るバスを待っていて救急車で運ばれて来る人を見た。若い女性で頭から血を流し。側には恋人らしい男に人が付き添って、叫んでいた。

「死ぬな！」

と。

救急隊の人の

“ 交通外傷 ”

という声が聞こえてきて、こんな風に引き裂かれる恋人同士もいるんだって思うと、自分はまだましなのかもしれない、少しそう思った。

だから一度だけチャンスをもらおう。不意に思い立ち、携帯を取り出した。5回。自分に言い聞かせた。5回で出なかったら、もうそれでお終い。

震える手で数字を押して。

言いたい事はひとつだけ。

『 会いたい。 』

それだけで良かった。それで通じなければ、もう諦めようと。

最後にオンフックを押そうとした、その時だ。携帯が鳴りだし俺は慌てた。兄貴？でも違う。見慣れない番号。名前が出ないから知り合いとは思えない。それから聞こえてきた声は基だった。

『 聞こえているんだろう？ 勇利。この前のメッセージ、受け取ったから。俺からもサヨナラ言いたくてさ。俺、もう家出たし。二度と会えなくなる。二度と俺たちの人生は交わらない。哀しいけど、全部呑み込むから。済まなかった。元気で。それだけ。 』

しばらく電話の切れた音を聞いていた。

電話を握りしめたはずみ、画面に落ちた雫で泣いているって気がついて。周りの人が心配そうに見つめていた。

「 目に、ゴミが・・・。 」

そう言っでごまかし、携帯をしまった。

俺は自分が嫌いだ。利己的で、我がままで。

あいつの声を聞いてやれば良かったのに。あいつだけが苦しむ事なんて無かったのに。分かっていた事なのに。最後ぐらい、二人で話さなければいけなかったのに。

週末は母さんの最後の仕事になった。母さんは来週から近くの新聞屋さんで働く事に決まった。朝の3時から7時。休憩をして、12時から4時。広告なんかを折る仕事だ。昼夜が逆になる。もちろん収入は減るけど、春になれば俺もバイトを始める。

「お祝いだね、退職祝い。」

俺は12時で帰って来ると約束していた絵里子さんを、家中をピカピカに掃除し、彼女の好きなチューリップを飾って待った。それからチーズケーキを焼いた。母さんは沢山の花束とプレゼントを抱えて帰ってきた。でもほとんどしらふだった。

「ねえ母さん、チューリップの花言葉、知ってる？」

母さんは知らないと言った。

「“愛情”って言うんだってさ。母さんにぴったりだ。」

二人で懐かしい話をした。俺が保育園に通っていた頃、大好きだった大輔君が引越すと聞いて一日中泣いていた事。小学校に入った年、友達のバレエの発表会を見に行き将来はプリマになるとだだをこねた事。初めての遠足が嬉しくて夜に眠れず、結局寝坊しておやつを忘れた事。何もかも昨日の事のように。

それから母さんは思い出した様に、俺に友達から連絡が有ったかと聞いた。首を振る俺に、

「そうなの。」

と言ったきり、黙ってしまった。

その晩、寝しなにホットミルクを作ってくれた。

Left Alone

つづく

### 第三十話 失ったもの・手に入れたもの

もうすぐ春が来る。

本当はする予定だったホストのバイトは当たり前のようにキャンセルしていた。でも免許が取れしだい車は譲るとオーナーは言ってくれた。

「十分がんばってくれたからね。君の気持ちをみんなが嬉しいと思っていたんだよ。」

昔だったらその言葉を素直に喜べた。でも今の自分は少し変わってしまった気がする。

車の必要がなくなったのも皮肉だった。

母さんの元の職場の人達に挨拶にいく事も考えたけど止めた。

それでも時間は過ぎていく。

教習所だけは契約が有るから行かない訳にはいかない。ただそれだけの生活。

入学後は奨学金の申請をするつもりだ。学校の奨学金と、県の奨学金、国の奨学金。学費免除申請も。その為にはいい成績を取らなきゃいけない。ただ漠然と過ごしてられる日々には限りがあるって知っていた。

毎朝2時半に家を出て行く母さんにいつてらっしやいと言い、それからしばらく寝かせてもらってから起きる。朝ご飯を作り、帰って来た母さんとそれを食べる。それから二人で掃除をして、二人で洗濯物を干した。夕方には一緒に買い出しをして、献立を考える。時々母さんの新しい服を選んだりもした。

「遊里はいらないの？」

って言われて

「学校の雰囲気に合わせてようかなって思ってるから。まだいいや。」  
なんて答えてみたり。

「スカートだったら得意だからつくってあげる。」

そのデザイン画に爆笑した。

「母さんね、こう見えて昔宝塚に憧れてたのよね。」

でもそれ、ネグリジエだよ。

それから毎晩8時には布団に入る母さんにお休みを言った。

確実に新しい生活が始まっている。

母さんの色の抜けたような肌は少し日焼けし、髪も根元の方から黒くなっている。何よりも笑うようになった。それは父ちゃんと暮らしていた頃を思い出させた。

基以外の友達からはたまに連絡が来た。そして電話を受けるたびに落胆する俺がいた。だってそれは本当に聞きたい声じゃなかったから。

京子は俺を責める言葉を吐いた。

『どうして基の事振ったの？あいつ、真剣だったんだから。マジで勇利の事大事にしたかったんだよ。』

どうして京子が知っているか解らなかった。

「基から何を聞いた？」

思わず出てしまった険しい口調に彼女は口ごもる。

『基が、報告の電話、くれないから。』

そう彼女は言いよんだ。

『合格発表の日に勇利に告白するって。だから協力してくれって言われてた。プレゼント選ぶの手伝ってる時、いつか俺達が結婚する事になったら祝辞頼むってあいつ、笑ってたから。きっと上手くいくんだろうなって思ってたんだ。でも基から連絡ないし、勇利も何一つ言っていないでしょう……。そしたら勇利が基の事拒絶したってしか、考えられないじゃん。』

京子の言っている意味は解った。でも解りたくなかった。

「俺が好きな人、基だと思っていたのかよ？」

彼女を傷つけてやりたかった。

「基じゃないよ。あいつの事なんか何とも思っちゃいない。男にすら見えなかった。俺が好きなのは全然違う人だ。だからいらないおせっかい、二度とするなよな。」

友達なんかいらない。車もお金もいらない。ボクシングだって何もかも。捨てると言われたらすぐに捨ててみせる。だから神様、あの人を頂戴。

俺の人生に、あの人だけが欲しい。

俺は高校生活ってヤツにもう未練はない、そう自分に言い聞かせた。

ふと気づくとこれまでそれなりに友達が多かったけど、本気でつながりたいと思うヤツがいない。女の友達もいるけど、親友じゃない。

悲しい。

あんな関係だったって言うのに、親友と呼べるのは誰よりも基ただ一人だった。

もし相談できるなら、この悩みを打ち明けるとしたら、基しかないなんて。

L e f t   A l o n e

つづく



### 第三十話 失ったもの・手に入れたもの（後書き）

この期間に何が有ったかは後ほど出てきます。

Pain の方にはこれからその部分が登場します。  
ある意味ネタバレになります。ご了承下さい。

### 第三十一話 リセット

3月も終盤に入ったその日、母さんは俺の傷の状態を先生から聞きシヨックも受けたようだった。一生消えないケロイドの跡が残ると言われたのだ。

「でもさ、時間が経つと少しは肌に馴染むって言っていたじゃないか。」

顔の傷なんて俺は笑い飛ばした。どうでもいい。鏡さえ見なきゃいいんだから。

そんな事よりもこの不安定な気持ちを母さんに知られたくなかった。いくら待っても兄貴からの連絡は無くって、やっぱ、捨てられたのかなあって。俺、疫病神みたいだもんなって。

アレから兄貴と基が元通りに暮らせていると思えるほど俺は馬鹿じゃない。俺さえいなければこんな事にならずに済んだのに。

その上俺が基に

“ 恋人として ”

抱かれていたんじゃ無い事も多分分かってる。あの頭のいい人が

“ ダッチワイフ ”

の意味を取り違えるはずが無いから。例えバレたとしても、こんなかたちで知って欲しくなかった。さすがに

“ 大人のおもちゃ ”

が弟のお下がりだったら、最低だ。

あいつと寝てもいいって思えた、2年前の俺は子供で。軀はモノでしかないから、こんな軀なんかどうでも良いモノなんだって信じてた。でもそれが過ちだって今は分かっている。

だからその過去を知られたのが怖かった。

嘘でも良いから基とは

“ 恋人として ”

抱かれていた、そう思っていて欲しかった。

そしてあの時の情熱が特別なものなんだって。兄貴だから素直に  
応えられたって事を信じて欲しかった。

あいつに何度も抱かれ、自分の軀がすっかり女にさせられてる事  
くらい気がついていた。嫌だと思っけていても感じてしまう、淫乱な  
んだって。でもやっぱり兄貴は特別で。あの人の腕の中で初めて自  
分が解放された気がした。怖がらなくても良いつて。この人に任せ  
ればいいんだって。だから全てをさらけ出す事が出来たのに。

それなのに……。

何もかもが惨めだった。あの瞬間が素晴らしければ素晴らしいほ  
ど、それは俺を落ち込ませ、何度も番号を押した兄貴の電話番号を  
その最後の通話に切り替える勇気を俺から奪つていった。

もしあの人の声が冷たくて、ほんの少しでも軽蔑の匂いを嗅いで  
しまったら、そんな後悔が目の前をよぎつていった。

病院の帰り道、うつむきながら歩いている俺に母さんは意外な話  
しを持ち出した。

「木下肇さんだったかしら。」

と。

「えっ？」

兄貴の名前をいつ母さんに教えただろう？そう一瞬考えて、ああ、  
そうか。病院から電話をしてもらったんだと思ひ出す。

「兄貴がどうしたの？」

探る様に聞いていた。どうしてここで兄貴の名前が出てくのかまる  
で分からない。もしかしたらあのときの電話がつかなくなくて、兄  
貴に俺の番号を教えていなかった、そう言われる事を期待していた  
のかもしれない。

「あのね」

それはとても言いずらそうに聞こえた。

「その人、遊里の事階段の下で助けてくれようとした人だったわよ  
ね。」

「うん、そつだよ。」

続きが聞きたかった。

「その人がどうしたの？」

「その人ね、私たちの事何度も車で送ってくれた人、だったわよね？」

「そつだよ。」

母さんがその事を快く思っていないって気づいていた。だからその先が不安だった。

「その人がこの前、会いにきたの。」

「えっ？」

思わず歩いている足が止まりそうになり慌てて足を動かしていた。

「な、何だったの？」

会いにきたって・・・俺は会ってなんかいやしない。何があったのか想像がつかなかった。

「でもどうして？兄貴がなんて？」

母さんは少し言いよどみ

「家の近くで会ったのよ。」

と。それから付け加えるかの様に

「凄く心配していた。」

と言った。どうして近くまで来てくれたのに俺には会ってくれなかったのか。その答えを聞きたくなかった。・・・会いたくないからだ。凄く心配していたって言われても、母さんがそう言ってるだけかもしれないじゃないか。それでも

「大丈夫って、言ってくれた？」

必死になって唇の端を持ち上げた。

「俺はこのとおり、ピンシヤンしているから。いらない心配かける必要なんか無いよ。兄貴、善い人だからさ。下手に心配かけると悪いから。」

沈黙が流れ、先に口を開いたのは母さんの方だった。

「母さんね、偶然家の近くで木下さんに会ったのよ。でね、少し話

しをしたの。遊里の怪我の事とか、入院の事とか。彼、こっちが不安になるぐらい心配していたわ。それでね、自分の事を責めてた。未熟だつて。」

「それって、どういう意味？」

あの人に限って未熟だなんて有り得ないじゃないか。

「責任をとるには未熟だつて。」

さらりと言われたその台詞を嘘だと思ったかった。兄貴がそんな見え透いた言葉で俺から逃げようとするなんて。

「そっか。」

続きを話しかけようとした母さんを無理矢理さえぎり

「きつと俺の事を受け止めきれなかったって、そう言う事だね。いのにね、そんな事。悪いの、俺だし。それより基の兄貴って古典的なハンサムだろう。目立つよね。俺、男に産まれてたらあんな風になりたかったなあ。そうそう、ハンサムと言えば、ホストクラブの話し、教えたっけ？年明けにしばらくやっていたお店だけど、そこで傷が治ったら週1で働かないかってさ。顔に傷もオツケーだつて。男って得だよ。傷が有るからハンサムに見えるらしいよ。」

俺はできるだけ明るく見えるように笑った。この時の母さんは

“ 仕方が無いわね ”

って顔でごまかされてくれた気がした。

入学式の前日、目深に帽子をかぶって彼の家の前まで行った。別に隠れていた訳じゃない。傷は塞がったけど、しばらく直射日光に当たると言われていたから。

そこには大きな引越した会社の車が横付けされていて、小学生ぐらいの子供が新しい家だとはしゃいでいた。

その帰り道、もうぼろぼろになっていた兄貴の名刺を捨てた。こんな紙切れを宝物だと思っていた子供の様な自分が嫌いだ。それをコンビニのゴミ箱に突っ込んで、これでいいんだって、自分に言い

聞かせた。もともと縁の無かった関係なんだからって。

つづく

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

### 第三十二話 呼び名

あの春から6年が経つなんて。それは長い様で短かった。時間が経つて事はこういう事なんだと思う。あれほど辛くって、本当に明日が来るのになって思えるほど苦しんでいた毎日が、振り返ってみれば過去になっている。そしてあの思い出は少しずつ自分の傍から遠ざかり、いつしか実際に有った事とは思えないほどになっていた。過去は過去だった。

何しろ今の私は毎日を平凡に暮らしている。あれから普通に学校に行き、卒業し、普通に就職して。職場と自宅を往復しながら時々ジムとスーパーに寄って帰る単調で変化の無い暮らし。

ボクシングに対する情熱は冷めたとまではいかないにしろ、今では情性を帯びつつあり、社会的に孤立してしまいそうな自分をなんとか奮い立たせ外の世界に目を向けさせている、そんな部分が大きかった。

そんな私の気持ちとは裏腹に目の前の男は始終笑っていた。もともと根が明るく、炭酸飲料水みたいな性格で。でも、24と言う歳になってもへらへらしているその姿はむしろ気味が悪く、彼が緊張している事を暗示していた。しばらく天気や行政といった当たりさわりの無い話で時間を過ごした後、彼は思い出した様に「そうそう、俺、こういうものです。」

「ごそこそと内ポケットに手をつ突っ込むと、クリームがかった名刺を差し出した。」

“ 特許部 特許二課 主任 弁理士 木下 基 ”

両手でそれを受け取り、指先で上質紙の滑らかさを感じ彼のステータスの高さに気がついた。きっと彼の

“ 主任 ”

と言う肩書きは実質、そうなのだ。

それから彼は弁理士と言う聞き慣れない職種について教えてくれ

た。

「こう見えてもスペシャリストだぜ。」

基が噛み砕いて話してくれているはずの専門用語のほとんどは理解できず、仕事柄ワイドショーネタにばかり詳しくなった私との生活の違いを見せつけられているようだった。それはアレから二人が歩んで来たはずの道のりそのものなのだろう。私は流され、彼は努力を。物事は結果が全てだ。

「出世株？」

からかうと

「そりゃもう。」

と笑いながら2杯目のビールを口にする。その口元が瞬間素に戻るのを目の端がとらえていた。蛍光灯の明かりの下、名刺から浮かび上がる金色のエンブレムが眩しかった。目の前の基はもう高校生ではない。あの頃の兄貴と同じ、立派な大人だった。

そのくせここまで来ておいて別の話しではぐらかし、肝心な事は何も話しださない基。テーブルの上の焼き鳥は冷め、ジョッキが再び空になるうとしている。私も駄目な人間だけど、こいつもそうだ。私はなんだかおかしくなった。彼は彼なりに勇気を出してここまで来たはずなのに。数年前にやって来た畠山もこんな風にふらりと現れた事を思いす。もっともあいつの場合、あの頃の事を謝り、今の彼女を大切にしたいと、言いたい事だけ言って去ってしまったけれど。

笑ってうつむいてしまった私に彼が不信そうに首をかしげる。いいよ、もう。私から切りだすから。

「名前を替えたんだ。」

見つめている基に自分の名刺を渡した。彼は驚かず

「知ってる。」

と目を落とした。それから受け取ったその長方形の紙をしげしげと眺め、戸惑う様な、困ったような、それでいてほっとした様な表情を浮かべていた。多分、畠山から話しは聞いていたって事は想像が



ついた。彼と会った時、名字が変わる事を話していたから。

でも、私は基に名前が変わったと言ったのではない。替えたと言ったのだ。その事に彼は気づかない。基に認めてもらうまでは『ソープランド山口屋』なんて、ふざけながら貶めていた

“山口遊里”

の名前は

“広川優里”

になっていた。

高校時代、どうしても戸籍上の名前を書かなければいけない書類に本名を書いていると基は名前を変えろと言ってきたものだ。

「俺の女房が“遊里”じゃなあ。いくら親父が付けてくれた名前でも“色里”なんて、さすがにNGだろ。今さ、こういう名前のトラブルって多いから、簡単に改正できるんだぜ。」

軽い口調で話してはいるものの、目は真剣で。その後彼は必要手続きについて色々と資料を探してくれたのだった。

「将来の為に目だけ通しとけ。なんなら俺がお前に名前つけてやるから。」

それから私以上に気合いを入れて勝負運を示す漢字をいろいろと調べてくれたりもした。

あの頃の彼は頼もしい友人だった。

その彼は、

「広川さんかあ。」

まるで老眼かのように名刺を近づけたり離したりしながらしげしげとそれを見ていた。それからひょいと裏返し、英語の表記に少し驚いた様に片眉を吊り上げる仕草。それをほんの少し優越感を感じながら眺めていた。今更だけど、少しぐらい見栄を張りたい気持ちがあるには有った。

「国際的だろう？勤め先の母体がグローバルな会社で、柔道とマラソンの日本代表組織委員会と契約していてさ。会社方針なんだ。」私だってきちんと生活をしているのだと。

「そうか。お前も頑張つてんなあ。アドバイザーかあ。」

でもその表記がただの肩書き職だなんて恥ずかしくて言えなかった。彼はそつと微笑んで名刺入れにそれを仕舞った。それから一息、小さなため息をつくと

「広川さん、かあ。」

とほんの少しえくぼを見せながら眉をしかめ、

「もつといい名前、有っただろうに。」

そんな言葉が漏れた気がした。その意味が辛くて

「木下とか？」

そう切り返しそうになり、口の中で何かをゴニョゴニョと呟いていて。

「ゴメン、忘れて。」

二人同時に同じ言葉を言っていた。

時間が経った。そう言いながら、未だ乗り越えられない事がある。つて。彼の目を見る事が出来ずうつむいた。

それでも、彼の言葉に責める音色はみじんも無く、

『いい名前』

が兄貴の名前だって、直感的に分かった。基があんの状況を受け入れていて、今の彼は私と兄貴が上手くいつて欲しかった、そう思っている事を感じ、何だか頭が痺れている気がした。

もしまた会う事が有ったら、謝ろう。以前に何度か思っていた事が有る。その考えが心の中を浮き沈みしていた。

どれだけそうやっていただろう。ふと我に返り、ああつて。

姓もそうだけど、名前を変えたんだよ、基。その事をじわりと実感し、彼にとって私は過去の人間なのだと気がついた。その事を寂しく思うと同時に心の重荷がとれた気がした。

「あの時は、本気だった。本気で、兄貴の事しか見えてなかった。」  
きっとそれが一番の謝罪の言葉になるんじゃないかって思えたから。基はばんぼんと私の頭を掌で叩いた。それから

「今、幸せか？」

とおずおずと尋ねた。

「ああ。いい家族に恵まれた。」

その時の彼は少し間を置いてから頷いた。

「おめでとう。」

彼が心から祝福してくれようとしている事が解った。悪夢の様な6年前が夢だった、そんな感覚にとられそうになる。

「今日はお前に謝りにきたんだ。ああ、来てよかった。」

基は苦しそうに口元をゆがめそのくせ笑った。

「友達がさ、言ったんだよ、勇利に会いに行けって。ただ悩んでい  
るだけじゃ一生悩み続けるだけだって。でさ、自分と向き合って力  
タ付けろって。俺が本当にお前の事を愛していたって言い切れるな  
らできるはずだって。知ったふりしてさ。俺はそいつと話していて  
気がついたんだ。本当はお前にいくら感謝してもし足りなはずなの  
に、ずっと自分ばかりが辛いと思って恨んでいたんだって。自分の  
気持ちを押し付けるだけ押し付けといて、肝心のお前の気持ちは見  
ないフリして来たんだ。その事に何となく気がついていたけど、認  
めてしまうのが怖かった。でもさ、この歳になってようやくとその  
事に向き合えるようになったんだ。許して欲しい。俺のした事。い  
や、許してもらわなくてもいい。俺が自分のした事が解るようにな  
ったと、それだけ、知ってもらえればもう何も望まない。今更言う  
のもなんだけど、俺たちは誰よりも濃い“青春”って時代を過ごし  
たんだと思うんだ。」

じんわりと滲んでいる瞳を、私から目を逸らそうとしなかった。

「勇利。」

彼が呼ぶ私の名前はあの頃の新緑の様な輝きを含んでいた。

「幸せになれよ。」

L e f t   A l o n e

つづく

## 第三十二話 呼び名（後書き）

彼女の名字代わってます。でも、どこかで聞いた名前じゃないですか？

### 第三十三話 分岐点

そんな彼の姿を、あの頃に憧れていたはずの未来の自分の姿だと思った。いつかきつとなれる、思慮深くて人を思いやれる人間。そうなれた基を羨ましいと思うと同時に、自分の現実を直視させられた気がした。私はあの頃から百々巡り（どうどうめぐり）で変化が無く。心のどこかで基と兄貴を恨み続け。その感情を醜いと思いつつも消せずにはいた。だからこそ、謝るのは本当は自分なんだって、反省しなければいけないのはこっちだって突きつけられた気がした。「相変わらず、基は阿呆だなあ。」

目頭が熱くなるから、それをぐつと堪えた。

始めようとしなければ始まらない関係だった事を彼は知らない。それを許したのはむしろ私。私は間違いを覚悟で道を進んだ。その事を彼は知らない。

一年生の寺島亜由美ちゃんが私に声を掛けてきたのは私たちが二年の11月を少し過ぎた頃だったと思う。

彼女は基を好きだと言った。私に基に釣り合わない、だから別れて欲しいと。

こういう女の子は以前から多かった。がさつな男女で、成績も下から数えた方が早い母子家庭の奨学生は遠慮しろと面と向かっていつてくる子もいたほどに。

私達は別に付き合っている訳じゃないから好きにしろと言うと、

「じゃあ、私、告白しますから!!」

ほとんどの子がそう言うって食い下がった。その後の事なんか興味が無かった。

でも、その子は違った。

「付き合っていないのに寝るんだ。凄い。えちとも?」

私は肩をすくめただけだった。なんとでも言えればいい。どうして知

っているのかなんて聞き返す義理も無い。見た目の彼女はいわゆる高校生らしくて可愛い女の子。男子に人気がないとは到底思えなかった。グロスは透明、マスカラは控えめ。キメの細かい肌にピンクのほっぺ。すんなりと伸びた足とペニーローファー。基の隣に腕を組んで歩く彼女を想像し、何となくそれも悪く無い気がした。派手じゃない所が彼に気にいられる確率大だった。

彼女は基がごく普通に男の性欲を持っている事を知っている。

私は

“ダッチワイフ、お役御免”

悪くない。

その時の私は笑っていたんだと思う。啞然とする彼女にこう勧めた。

「自分は今の所“女房”だけど、君には“愛人”の選択も有るよね。」  
と。

「本妻お墨付き、なんてどう？基がその気になれば入れ替わるなんて簡単だろ？その為にさボクシング部の女子マネにならない？そこで自然に落としてみたら？その方が可能性上がるんじゃない？俺は止めないよ。」

彼女は真っ赤になって、受けて立つと言った。

その後彼女は入部し、雑用を真面目にこなしながら少しづつ基との距離を詰めていった。それでも彼が私を抱く事には変わらず、彼女がイライラしているのは明らかだった。

だからその背中をそっと押した。

「ま、みんなの前で告ぐるくらいしてみれば。」

12月30日。恒例の初詣の集合時間が連絡網でまわったその日の事だ。気の強い彼女なら私の前で告白すると思った。私が嫉妬で見苦しいマネをしても後の祭りだと。

案の定彼女は初詣の帰り際、基と仲のいい部員が残っているその場で告白した。もちろん私もいる。

基は

“えっ”

て顔をして一瞬私の方を見た。というか、見た気がする。彼女が告白を始める素振りを見せた時、私はさりげなく幸治の隣に行き新年の練習会の話しを始めていた。そして彼女の告白にさもびっくりした顔を見せ、幸治と顔を見合わせた。いかにも基本人には興味が無いとも言つように。それからみんなと一緒に冷やかした。

彼は一度視線を落とし、ご自慢のえくぼを作り、その場で彼女にOKの返事をした。

みんなで基の肩を叩いた。もちろん私も。それから二人を残して帰った。

お似合いの二人は上手くいくはずだった。そのはずが彼はなんだか日増しに疲れていくようだった。挙げ句に

“女つてどうしてあんなに面倒なんだよ”

と愚痴までこぼし始めてしまった。

「何贅沢言つてやがる。亜由美ちゃん取られて地団駄踏んでる男がどれだけいると思つてんだ。仮にも“彼女”なんだから手間暇かけて可愛がったげなきや。」

すると彼は

「ボクシングする時間が削られても平気なのかよ。」

と恨めしそうに呟いた。私はしれつと言つてやった。

「基なら大丈夫、タフだから。それよりなんだよ“手間ひまかけるほどの価値のない女”が好きなのか？このぐうたらめ。」

二人きりの部室で笑い飛ばしてやった。

後で考えるとそれは辻褄が合わなかった。私は基に“もっと可愛がって欲しかった”

と言つていたとも取れる訳だ。あの時の私達の間係を

“血の通わない人形”

と定義していたのは私自身だったはずなのに。

それでも基が本来の切れを無くしている事は気がかりだった。私は昼休みに亜由美ちゃんを呼び出し少しクリームをつけた。基のペースが落ちていると。

正直、彼女は女子マネとしてかなりがんばっていたと思う。自分の頭を使う訳ではないつまらない雑用もきちんと手を抜かずに行っていたし、基とつき合っているからと言って部活中にそれを持ち込む事はほとんどなかった。だからむしろ私の中の彼女の評価は高かったのだ。

それでも

「本妻としてはそこそこ、気になる訳よ。」

彼には全国で活躍してもらうつもりだったから。

彼女は私を睨んだきり何も言わなかった。風の強い日で彼女の長い髪が宙を舞っていた。

そんな3月のある日、彼女は突然マネージャーを辞めた。

誰にも何も言わず。

暗黙の了解で基と彼女が別れたらしいとみんなが知っていた。

彼は悩んでいた。私は手を出すべきじゃない、もう手を離れた事だ。そう分っていたからその問題には触れず、以前の様に馬鹿話をしながら一緒に下校した。

部の休みだったその日、久々に夕焼け空を見ていた。いつになく茜色が空一面に広がっていて、その時基が言った。

「やっぱ俺、ボクシングに集中している方がいいわ。」

何を言いたいのかピンと来た。だからすぐに断ろうと思った。もう十分義理は果たしたはずだと。それなのに私は、

「そつだな。」

と言って額面通りに受け取った様に見せかけ誤摩化した。それから後は二人黙りこくって分岐になる基の自宅まで歩いた。彼は立ち止まり

「誰にも負けたくない。勝ちたいんだ。」

別れ際の玄関でそう言った。射抜く様な眼差し。殺し文句だ。その



事を二人とも知っていた。基は私を落とすつもりで矢を放ち、私は逃げればいいものをただ呆然とその言葉を胸に受けた。

彼は立ち尽くす私の手を引いた。

私の心の中に基からボクシングを奪うモノに対する嫉妬が有った。その事はよくわかつている。だからこそ

“彼にボクシングを続けさせる事ができるのならば……”  
誰かが心の中で囁いた。

“今までだってやって来た事。引き換えにするのは容易い”

それが悪魔だったと気づいたのは、基の部屋で後ろから抱きしめられた時だった。

窓から空を眺めているとゆっくりカーテンが閉められて。彼は私の首筋に唇を這わせ言葉にならない何かを呟きながら、以前より長く服を着たまま寄り添っていた。

もう逃げ出せなかった。

息を詰めるようにジーンズが降ろされ、しゃがみ込みながら尻から膝の裏、くるぶしへと口づけが落とされていく。背中からまわった手が俺の眼下でシャツのボタンを外していき、ブラの外れた胸元をそっと包んだ。

基はため息をついた。

私は基自信すら気づいていない彼の想いをひしひしと感じとっていた。

“悪魔の囁き”

それは分岐点だ。私はその選択を間違えた。もし彼を本当に大事に思うなら、それは決して受け取ってはいけない気持ちだったのだ。私に応えなければいかなかった基は、恐ろしいほどのペースで自分を取り戻し、あのスランプが嘘のようだった。

でも契約はそれだけじゃ終わらないって本当は分かっていた。

今回は私自身、確信犯だった。二人で傷付く道を選んだ。

「どちらか一方が悪いなんて関係じゃなかったはずだ。お前だけじ

やない。私だつて悪かった事、知っているだろ。私の方こそ謝んなきやいけないくらいなのに。」

この6年間抱え続けた謝罪の言葉だった。あの頃の私たちは幼く、未成熟で、目の前にある事しか見えずにいた。でも今ならよくわかる。責任はファイフティファイ。

「知らなかっただろうけど、私は基が傷付く事知っていて関係を持ったんだよ。お前、いいヤツだから割り切れなくなるだろうなってそれでもインターハイに行つて欲しくつて焚き付けてたんだから、今思えばこっちの方がひどいヤツだよ。」

彼の人の善さにつけ込んだのはこの私。ひたすらに真つすぐな基を知っていて、彼が壊れる予感から目を逸らしたのだから。

「基に会えて良かった。このままだとずっと罪の意識持ったまま生き続けていくとこだった。基に悪い事したつて。基にしこりを残させて、嫌な思い出ばかり作つてしまつて。今さ、本当にいい男になった基見て、感動してる。基も幸せそうで良かった。」

私は初めて基の前で涙をみせてしまった。

あの人以外の事で泣く事があるなんて。この6年間、考えた事が無かった。

「会いにきてくれて、ありがとう。」

涙を隠す事も忘れ、彼の大きくてしっかりとした手を握りしめていた。

またいつか会えたらいい、そう私たちは微笑んだ。

彼は別れ際紙袋に入つた小箱を取り出し

「3年間のお礼。」

そう言つてえくぼを見せた。

「勇利は甘いもの嫌いだつて覚えてるけど、たまにはいいだろ？このチョコ、凄く美味いんだぜ。騙されたと思って食べてくれ。」  
緑のラッピングの上には、はなかなか口にする事が出来ない有名ブ

ランドのロゴが入っていて

「うわっ、金持ち。」

私は少し驚いた。あの頃の私は彼の前で甘い物を口にした覚えがほとんど無い。それは選手だけが減量していてトレーナーの私が好き放題していたらフェアじゃないって思っていたからだ。彼はその事を私が甘いものが嫌いなんだと誤解していて、そう言う物を勧められ困っている私の代わりに断りを入れてくれさせたものだった。それなのに今の彼は

「チャレンジしてみなよ。以外と好きになるかもよ。」

そう言つて箱を差し出す。人は“変化する”と言つ事を言いたいに違いない、そう思った。

「美味そう。」

受け取つたその箱は以外と重さが有り、手の中にずっしりと響いた。

「ガキどもと一緒に頂くわ。御馳走さん。」

「うわっ、それ子供に食わせんのかよ。もったいねえー。」

彼はあきれた様に笑い、

「じゃあな。」

と手を振つた。

酔いも冷めつつある中、独り歩きながら空を仰いだ。星の見えないう濁つた空。それでもどこか懐かしい。

基は過去にケリをつけにきた。それが出来た彼を羨ましいと思うと同時に、言葉の端に見え隠れしていた女性の姿に安堵した。心の奥では、今でも彼は私にとつてとても大切な友人で。そんな彼の幸せを無条件に喜べる自分が嬉しかった。

基があの人のお話をあえてしなかった事にも気づいていた。何しろ兄弟だから、全くの音信不通とまではかないだろう。だからそれはきつと、私に対するある種のいたわりなんだろうと言う事はうすうす感じた。多分、あの中の人であの人で幸せになっているのだ。

それ故に、彼は自分の気持ちの整理と一緒に、私の背中を押してくれたんだと思う。彼の勇氣に感謝したい。心からそう思う。だから

らその一歩を、踏み出そう。

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

つ  
づ  
く

### 第三十三話 分岐点（後書き）

基に誤解されている事をすっかり忘れているお馬鹿さんゆつりでした。

それも、分岐点です。

### 第三十四話 前進

その帰り道、決心を固めた私は6年間一度も押した事のない携帯番号を押していた。彼が出るなんて期待はしていない。それどころか、他の人が持ち主になっていて迷惑をかける事だけは避けたくてそのくせ1度だけ、どうしても押してみたい番号だった。だからオンラインブックを押した直後、私は早口で言いきった。

「兄貴の事、今でも好きです。きつと、一生好き。でももう諦めます。他の人と一緒になります。」

呼び出し音が続き、言い終わったはずなのに切る事が出来ず。電話の向こうで人が出る気配に慌てて携帯を閉めていた。

「馬鹿みたい。」

でもそれは、私なりの前進のつもりだった。

その晩お父さんは深夜勤だった。母さんは交番勤務の広川さんと4年前に再婚したのだ。

あの頃母さんが仕事を変えてから二人で話しをする事も多くなつて。その時、昔父ちゃんの死を知らせにきた広川さんの話しになった。実はあれからもずっと面倒を見てくれていたのだと。母さんが仕事で遅くなる時には彼がいる交番で時間をつぶしていた事なんかを話すととても驚いて、ぜひ礼を言いたいと言った。それが縁だった。広川さんは6年前に奥さんを亡くし、男独りで小さい子供二人を育てていたのだった。

今では5人の家族で広川さんの家にひしめき合って暮らしている。そこは古いながらも庭付きで。母さんはガーデニングと称し家庭菜園を広げ、最近パッチワークにはまっている。それからガキどもが毎晩の様におかず争いを繰り広げ、朝飯の為に早起きをしていた。そんな二人が寝付いた22時、私はお風呂に入って落ち着いた後母さんに言った。

「笹川さんの話し、受けようかと思うけど、どう思う？」

彼女はこたつ越しに身を乗り出し私の手をしっかりと握り何も言わずに頷いた。

母さんの反応を見て自分の選択が間違いじゃないって思った。そう、これがいい。そう思う。

広川さんと再婚してからの母さんはよく

“女の幸せは結婚だ。”

と言うようになった。二人きりでくつろぎながらお茶を飲みながら過ごしている、そんな夜は特に。

「私じゃ無理だって。」

多分湯呑みから立ち上がる湯気のせいで左頬の傷が浮き上がっているに違いないと意識しながら私は答える。

すると時母さんは決まって瞳を逸らす。私もうつむく。母さんが心配してくれているってのはよくわかつている。

「これでもいいって人がいたら、そのとき考えるよ。」

実のところ母さんが思うほどこの傷は悪さをしていなかった。でも彼女にはそう思っていてもらった方が便利だった。恋人なんていないから。

専門学校に通い始めの頃、確かにこの傷に負い目は有った。誤摩化す為に慣れない化粧をしたほどだ。でも次第に人の目も気にならなくなり、ノーメイクでコンパに出るほど図太くなった。そう、意外なほど傷を気にしない男の人も多いのだ。何しろ、絵里子さんの娘だ。素は良い。

今時カレカノがないのは不自然な事なんだろう。その気は無くてもとりあえず付き合ってみて少しづつ好きになってくれれば良いと言われ、そんな何人かと付き合った事も有った。早く兄貴の事を忘れたかった。センスのいい男もいれば、話しの上手な男もいた。キスの上手い男も。でも、駄目だった。男の仕草一つ一つに兄貴を思い出し、抱きしめられるたびにこの人じゃないと心が軋み、それ

以上の関係に進む事が出来なかった。

相手が私を好きだと言えと言うほど罪悪感を覚え、こんなにいい人なのに愛し返せない自分が嫌になった。

「僕の名前は、元晴。はじめじゃない。」

最後に付き合った人の言葉が心に残る。

その彼はボクシング部の後輩だった。ほとんどの連中とは縁が切れていたが、菊池とは部の相談事で連絡を取る事が多く、大学に進みアマチュアボクサーをしている彼の応援にだけは行っていた。その彼が一つ階級を上げてチャレンジをしたときの事だ。

「初戦勝つたらつき合ってください！！先輩！！」

大勢のギャラリイの中で叫ばれたから期待に応えてやった。

「1R KOで勝ってこい！！」

でそのとおりになった。

「済みませんねえ、先輩。僕とつき合う事になっちゃって。」

周りがかちやかすものだから、自然に断れない雰囲気になって、だからとおつきあいを始めた。

彼は気さくで、面白く、何より性格が合った。

でも始まりがそんなんだから、別れ際に軽くキスをするだけのプラトニックな付き合いが半年も続いた。その彼がある時真顔で

「誕生日に欲しいものが有る。」

と言った。

夜景の綺麗なホテルにチェックインし、おどおどする私の手を引いてバーまで連れて行かされ

「こういうところ、緊張する……。」

「あなたのそう言う所が好きなんです。」

菊池はおかしそうに笑うと高過ぎるスツールに腰掛ける私を支えてくれた。

そしてもういい加減踏み出そうと思い進んだ関係の先に兄貴がいた。



その最中に瞳を閉じながら兄貴の名前を呼んでいた。  
今まで上手くやって来れたんだから何とかなると思ってたのに・  
・。

ショックだった。

ご免なさいを呟きながら私は泣きじやくっていた。

菊池の腕の中にいながら思い描いたのは兄貴以外の何者でもなく、  
あの腕のぬくもりや肌の匂いは色鮮やかに私の中に生きていた。

そしてその時の私は、あろう事が泣く事であの人の事を思い出そ  
うとさえしていた。

「昔の人だから。もう、忘れたい人だから。」

忘れなければいけないから。強引でもいいから他の男に抱いて欲し  
かった。自分を塗り替えて欲しかった。

菊池はそんな私をシーツごと包み、服を着る様に言った。

「忘れられない人がいるって事、知ってた。」

その言い方は嫌になるほどあの人に口調に似ていた。

「忘れさせてみせるって思っていたけど、駄目だったね。でも、な  
んだか諦めがつかしました。良いんですよ、その人の事、忘れない方  
が良い。その人はあなたにとって本当に大切な人なんだから。むし  
る忘れるべきじゃないんだ。」

彼の背中越し、コンドームをまとめる、パチンって音が今でも心に  
残っている。

もう恋なんてできないと思った。

その気持ちは今でも変わらない。

後で聞いた話だけでも、母さんと父さんは見合い結婚だったら  
しい。

「初めて会った時、こんながさつな人は勘弁って、本気で思ったの  
よ。」

母さんは昔を笑った。

「でもあの人、しつこくつてね。負けちゃったのよ。」  
俺の記憶の中の父さんと母さんはいつも笑っていて、本当に幸せだった……。

だからそう言う選択も有るんだって初めて思えた。愛せなければいけない、なんて事は考えなくて。

期待とか希望ではなく、何も無いまっさらな所から作る関係が。

L e f t   A l o n e

つづく

## 第三十四話 前進（後書き）

電話の向こう？そりゃ、兄貴がいたんですよ

### 第三十五話 仲人ばあ

笹川さんとは長い付き合いで、兄貴と交番で会ったあの夜に大騒ぎしていたあの女性だ。その後繁華街で偶然会くわし、ＢＬと勘違いされて

『肇ちゃんの恋人なの?!』

と根掘り葉掘り聞かれたのが縁だった。会社を辞め独立した都合でどうしても写真を撮らせて欲しいと言われインターハイまでついて来た事もある。他にも面白いからと誰にも内緒の約束でコスプレ写真まで撮らされ、挙げ句に雑誌に掲載までされていた。それでも悪意の無い人柄のせいなのか、憎む気にはなれず。数年前にこの近くでオフィスをかまえる様になってからは一緒にお酒を飲む事も時々有った。

彼女は年上で優しくって話を聞くのが上手で、何も言わないけれど恐ろしく勘の良い人だと思った。それでも会うと何となく気持ち安らぐ人だ。

でも1年前のあの夜はそれだけじゃなくて、ミドルトンと書いてある見覚えのあるアイリッシュウイスキーが目の前に有ったのがいけなかったんだと思う。底の分厚いロックグラスも。それにやたら暗いピアノの曲が

“ たった独り、独りぼっち ”

としつこいぐらい私に畳み掛けてくるようだった。

「話、聞いたげるよ。」

察しのいい彼女がさりげなく話しかけるから。

「ちよつとね。」

なんて愚痴ったりした。

「昔好きだった人がそれよく飲んでたなって。結局全然上手くいかなくて、すぐ別れちゃったんですけどね。若気の至りってヤツかな。その人はとびつきり大人で私は子供だったから。自分ばかり

本気になっちゃって後先見えなくって。好きになればなるほどその人には迷惑かけるばかりで最低だったんですよ。その頃の気持ち、今でも引きずってるかな、なんてね。もう踏ん切りつけてもいい頃だとは思うんですけど。駄目ですね。」

「優里ちゃんが好きだったってんだから、よっぽど良い男だったのね。」

冷やかすから

「勿論。」

って答えていた。

「優しくって、我慢強くって。」

温かくって、穏やかで。厳しいけどいつでも公平で。私のありのままを受け止めてくれた人。

私が口をつぐんだから、もうそれ以上は聞いてこなかった。この人は人の心の内が見える人だから。こぼれそうになる涙を堪え

「誰が良い人いたら紹介してくださいよ。」

そんな事ではぐらかした私の肩を

「任せなさい。」

と数回叩き、お酒をついでくれた。

そして馬鹿な私は気がついていて。私は笹川さんの中にさえ兄貴の面影を探しているんだと。

その週末、今まで撮った写真を元に仲人ばあ（彼女が言った）を趣味にしているから見合いをしてみないかと彼女が連絡くれた。ただ私に限っては新しく写真を撮り直すという。さすがに10代の頃の写真じゃ詐欺だったし、話を聞きつけた母さんがとにかく乗り気だったのだ。

「キレイに撮ってもらいなさいよ。」

と。なにしろ言い出したのは自分だし、結局二人の懇願に負けて笹川さんに見合い用の写真を撮ってもらった。髪を結って、ピンクのスーツ着て。その上オプシオンだと言われトレーニングウェアの写真も撮らされた。

「優里ちゃんスタイル良いから受けるわよ。」

なんて、ある意味危ない発言だ。

ヒットするはずが無い、そう思っていたのに、ニコニコした笹川さんがやってきてお勧め物件あり、なんて言うからピンときた。

「傷の写っていない角度の写真を見せたとか、修正加えちゃったとか、ないよね？」

彼女は目に見えて動揺し口ごもった。嘘のつけない可愛い人だと思いい、私は思わず声を立てて笑ってしまっていた。

それ以来、見合いは断り続け彼女もさりと流してくれていた。

そのはずが、数日前にどうしても進めたい話があると突然自宅まで押し掛けて来たのだ。

傷の事も家柄も何もかも問題ないと言う。母さんは諸手を挙げて喜んだ。

相手は30代のサラリーマンで、初婚。真面目だけが取り柄のあまり面白みのない男だと笹川さんは説明した。大酒は飲むけど、ギャンブルは好まず、多分借金も無い。タバコも吸わない。女遊びの噂も聴いた事が無く、すこぶる健康。ただ長男だけれど、面倒な家ではないらしい。年収も十分すぎるほど有った。でも私にしてみればいいよもって怪しい。彼女の挙げた条件はあまりに出来過ぎだった。

「写真はね、忙しくて用意ができなかったの。」

嘘くさいと思った。彼女が

“写真を忘れる”

なんてあり得ない。笹川さんは早口にまくしたてた。

「大事な事言い忘れてたわねえ。彼ね、シンガポールに赴任決まって6ヶ月後には向こうなのよ。だから誰でもいいとまでは言わないけど焦ってんの。話がまとまったら忙しくなるけど、ご免ね。」

何となくそれだけじゃない気がした。含みのある彼女の言い方に大きな問題があるに違いないと思った。でもそれでこそ私にふさわしいのかもしれない。たとえ女装癖が有っても、体毛が一本もなくて

も驚かない覚悟をした。

そんな私の心を察して、笹川さんが言い放った。

「この私が信頼できる人間なの。傷の事をとやかく言う様な、けつの穴の狭い男じゃないから。だから優里ちゃんは今私を信じると思っ  
てちょうだい。」

この言葉は効いた。

その見合いを受ける、そう返事をした。私が笹川さんに電話をしている時の母さんは目をぎゅっとつぶり、何かを祈っているようだった。

「じゃあそう言う事で。もしご先方様が私と会ってそれでいいって言うのなら、そのままお受けしようと思います。私の仕事の事とか  
かまいません。辞めてシンガポールについていきます。笹川さんが  
信頼できるって言うくらいの人だから、間違いないでしょう。信じ  
てますからね。」

そう言った瞬間、母さんは私に向かって、いや、電話向こうの笹川  
さんに向かってかもしない、両手を拝むように摺り合わせた。

そんな母さんに、

「あのね、」

私は思い切って話を始めた。

「本当はね、ずっと好きな人がいたんだ。」

それからあの悪夢なの様な日の事をかいつまんで話した。

つき合っていた基よりも、その兄貴の事をもっと好きになっ  
てしまった事。兄貴も同じ気持ちでいてくれた事を知って有頂天になり、  
抱いてほしいとせがんだ事。避妊しなくていいと言いだしたのは自  
分で、彼は産んでほしいと言った事。

「若かったから、一生一度の恋だつて溺れてた。結婚するとかしな  
いとかじゃなくて、私を本当に理解してくれる人がいるってことが  
嬉しかった。」

それから兄貴と寝た事が基にばれ、もみ合っているうちに怪我をし

た事も。

「嘘ついててご免ね、本当。怪我したのは私かもしれないけど、でも悪いのはむしろ私だったから、弁解なんか出来なくて。子供っぽい言い訳だけど、あの人の事守らなきゃって思ったのかもね。」

そうしたら母さんは聞いた。  
「今の優里の気持ちはどうなの？」

と。  
「消せない。」

迷わずに答えていた。母さんが兄貴の事あまり良く思っていない事知ってたけど。

「結局別れる事になってしまったけど、あの人は私にとって人生最大の贈り物だったって思う。色々有ったけど、でもやっぱり出会えた運命に感謝してる。だから、もう十分。十分すぎるほど十分。もう若くはないしこれから新しい生き方をするつもり。それにね、母さん。実はその人からはとっても良いもの、もらったんだよ。」

私はとっておきの話をした。  
「名前替える時、どうして “優しい” の “優” にしたのって聞いたでしょ？それね、その人が私に言ったからなんだ。私には “勇ましい” の “勇” より “優しい” の “優” が似合うって。」

母さんは少し息を詰めたみたいだった。

「その人、本当に善い人だったのね、優里。あなたの事、愛していたのね。本当にあなたの事を見ていてくれたのね。」

私は大きく頷いた。兄貴が、そして兄貴を愛した自分が誇らしかった。

今更兄貴を想ってもしようがない。あの人にはあの人にふさわしい人がいる。兄貴にはピアノの先生をやっているようなどこかの嬢さんがよく似合う。今頃は出世してニューヨーク支部にいますと言われても驚かない。10代の怖いものが無い時代なら向こう見ずな



恋もできる。でも今の私はそこまで夢を見る事はできなかった。

私は私の人生を歩こう。

結婚なんて、契約だ。見合い結婚ならお互い相手にいらない期待を抱かなくて済むから、愛されない、愛せないなんて嘆く事は無い。

そして何よりも、これは母さんにできる最大の親孝行になるかもしれないのだから。

L e f t   A l o n e

つづく

第三十五話 仲人ばばあ（後書き）

はい、先が見えて来ました

ハッピーエンド      ハッピーエンド

### 第三十六話 お見合い

まだ3月にもなってもいらないと言うのにその日は異常なほど暑かった。日差しが強く、風もなく、ホテルの中は効きすぎた暖房でムンムンしていた。

私は慣れない振り袖のせいもあつて既に気持ちが悪くなつていて「遅い！！」

笹川さんもかなりイライラしていたと思う。約束の時間を1時間以上過ぎていたにも関わらず、相手からの連絡は無く、先方が持つているという携帯は2つともつながらない。今回は当人二人だけの見合いと言う事でセッティングされているから、他には連絡の取り様が無いらしい。勤め先の会社に問い合わせると、急に仕事が入りどこかに出かけたと言う。この昼食用の個室もこのままでは使われずじまいだろう。

「ごめんね、優里ちゃん。」

笹川さんが済まなそうにしているから何も言えなかった。

着物に負けないように簡単な化粧はしていた。傷はそのまま見えるようにしたい、そう言う私に、笹川さんは頷いて軽いメイクをしてくれた。そのグロスもはげて、唇がかさかさに渴く。

この日は大安吉日の土曜日で、ホテルの中は結婚式日和らしく着飾った男女でにぎわっていた。

着物の着付けは笹川さんがしてくれたのだけれど、更衣室が芋洗いのように込んでいて足の踏み場がなかった。結局一部屋押さえる事になってしまうほどに。

「まあ、いいわ。今晚あたり泊まりたいって思ってたところだから。ここのエステは最高なんだからね。それに、もし優里ちゃんがめでたく結婚したらあいつにホテル代払わせるんだから。」

彼女はいかにもお金持ちらしく、唯一空いていたエグゼクティブデラックスルームなる物を躊躇わずに取ってしまった。ゴールドのダ

イナカードをちらつかせアーリーチェックインのゴリ押しも忘れずに。

「それにしても、遅い！！ねえ、優里ちゃん、少し気分転換に散歩にでもいかない？」

彼女に誘われ立ち上がった瞬間、吐き気がこみ上げてきた。着物自体も苦痛で、その上トイレにも行けないからと、ほとんど何も飲まずにいたせいだ。それに、昨日の夜は眠れなかった。

昨夜布団に横になった時には、顔も知らない見合い相手の事を考えていた。多分スーツを着て現れるだろう、とか、眼鏡をかけていて小さくお辞儀をするタイプの人じゃないだろうか、だとか。そのはずが、油断するとあの人の事ばかりが繰り返し頭に浮かんできてしまい、どうしても振り払う事が出来なかったのだ。

何度も頭を切り替えようとした。

見合い相手の年収ははつきりとは聞いていないが、私の3倍以上は有るというから、普通に考えて贅沢な暮らしが出来るだろう。無理をして贅沢をする必要は無いけれど、空想するのは悪くない。例えば、車。その人は高級車に乗っているのだろうか。下手をすると品川ナンバーのベンツかもしれない。そう思いながらクスリと笑った。どうせならプリウスがいいな、と。

食べ物好みはどうだろうか。私が作るものでいいって言うくれるだろうか。洋食は苦手だけれど我慢してくれるだろうか。でも、もし少食だとがっかりしてしまうだろう。どんぶりに盛られた煮物を「美味しかった。」

と言って平らげてくれる人がいいと思う。

タバコを吸う人だったらどうしよう。キスする時に苦い味がするのは嫌だな。そう考えながら、深く息を吸い込んだ。そうすればあの人の香りが戻って来るかとも思っている自分の行動に嫌気がさした。

結婚する訳だから、必然その人に抱かれるだろうし、その人の子供も産む事になると思う。その事を不意に怖いと思った。今の私は

14の私ではない。早まったかも知らない、そんな言葉が渦になつて舞い上がり、

「ここまで来たのだから。」

そう言つて自分を鎮めた。5年後の私を相手にしてくれる人はいないかもしれないけれど、今だったらまだ何とかなるはずだといひ聞かせ、買い手がいるうちに売り切つてしまわないと母さん達に悪い気がした。いつまでもこの家にいる事なんか出来ないから。

そんな思いを抱え夜を過ごした。

振り袖の派手な柄は花に蝶にかぶと虫の様なふしぎな模様。帯にはトンボがとまっていた。笹川さんに言わせると、昆虫は良縁のシンボルなのだそうだ。こんな私にはふさわしくなかったけれど。

「大丈夫？」

彼女はうつむいた私を心配そうに覗き込んできた。

「慣れない事するのつて、やっぱり無理があるんですよ。」

なんとか笑う事で、彼女の顔がほっと緩んだ気がした。

「でも少し休んだ方がいいわね。よかったら部屋に戻らない？もう、こうなったら、着物、脱いじゃいましょう。」

彼女らしい反応におかしくなる。もう少し着ています、そう答えたかったけどさすがに辛かった。このまま吐いてしまひそれで最低だった。胸元から上がってくる感触をぐつと堪えたその時

「我慢しない。」

笹川さんが怒つた声を出した。

「優里ちゃん絶対限界きているから。」

それから私の肩を抱いた。

「もう、戻ろう、ね？」

従うしかなかった。私は目の前のコップの水を一気に飲み干し、お代わりをもらった。

「ご免なさい、お願いします。その方が良さそう。」

待つのは辛かった。立ち上がった私に笹川さんはカードキーを渡した。

「とにかく先に部屋に帰って休んでいて。一応ヤツはこのレストランに来る事になっているから、彼が来たら部屋に連絡するようスタッフに伝言頼んでくるわ。すぐに済むから追いつくわね。」

　広いホテルで、レストランから部屋に向かうエレベーターまではかなり歩く必要が有った。私は冷や汗が出そうになりながら、ゆっくりと足を進める。

　その途中には鏡が飾ってあって、ふと横を見た瞬間、見知らぬ私が見映った。その人は疲れていて、そのくせどこかほっとした表情をしていた。そう、私のどこかに、この縁談が流れた事を喜ぶ気持ちが有ったのだ。

「馬鹿だなあ。」

　思わず呟き、首を振っていた。

　今日の出がけに練習をして来た。見合い相手に気に入ってもらえる様にと。それは

“ 笑顔の作り方 ”

　と言うヤツで、ずいぶん昔にテレビでやっていたのを覚えていた。口の端を持ち上げ、目尻に少し力を入れ。にこやかに。そんな自分に向かって言っただけだ。

「そんな感じ。頑張れっ。」

　それは数年前の事。もしかたあの人に会う事が有ったら、動揺なんかしないで笑い返してやろう、そう思って練習した仕草だった。

　フロントに飾られたカサブランカの華やかすぎる芳香が、そんな進歩のない私を惨めな気持ちにさせてくれた。

　気を取り直してエレベーターに向かったその時、視線を感じた。何だか急に心臓が速く動き出したのが分かり、胸元を押さえ振り向いたそこに彼は立っていた。

　懐かしい顔。でもさすがに6年の年月は彼を変えていた。少しやせた顎と、目尻には小さなしわ。その人はほんの少し目を見開き、そのくせためらわず真っすぐに私に向かって歩いてきた。

「勇利。勇利なのか？」

疑いと確信を含んだ不思議な声色。低く響くその声は間違いなく兄貴のものだった。

あれほど練習していたはずの笑顔は、肝心な時にどこかへ隠れてしまっていた。

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

つづく

### 第三十七話 紙一重

「ご、ご無沙汰しています。」

彼を正面から見ることができず、どう反応していいのか分からなくつてとつさに頭を垂れた。兄貴のため息の様な深呼吸と、沈黙。それが何を意味しているのかなんて分かりはしない。ただ、彼が躊躇わず一直線に私の所まで進んで来た事が怖かった。どうして私の事を見つたりしたんだろう。どうして気づかなかったフリをしてくれなかったんだろう。どうして声なんかかけて来たんだろう。どうして……。今更何だと言うのだ。古い知り合いですって顔で過去を忘れ挨拶でもしたいのか？そんな思いがぐるぐる回り、話す言葉が見つからず立ち尽くしていた。逃げ出せるのなら逃げ出したい。振り向いてしまった自分の馬鹿さ加減を罵った。先を急ぎ行かなければいけないって思ってもらえる口実を必死に探す私に

「ずいぶん綺麗になった。」

彼の言葉は表面だけで滑っていった。

「あれから元気になっていたかい？」

それは私たちの間には何も無かった様な落ち着いた口調だった。独りで苦しんでいた自分が限りなく馬鹿に思えた。

「はい。おかげさまで。」

愚にもつかない社交辞令。

“おかげさま”

なんて無いのに。

「僕はまだ未熟だ。”彼はそう言ったの。”

母さんの言葉を思い出した。

じりじりと顔の怪我が治るのを待ちながら、会いたくて、会いたくて、でも会いたいと言い出す勇気がなくて、悶々と彼からの電話



を待ち続けたあの日々を。捨てられたかもしれない、捨てられたかもしれない。捨てられたんだ。秒単位で悩んでいたあの切り刻まれていく様な時間の流れを。のど元を過ぎると熱さを忘れるというけれど、そんなの嘘だ。込み上がって来る気持ちは現実で、胃の周りがギュツて締め付けられて、目の前が白くなりそうだった。

そのくせ

「それならばよかった。」

彼の声は軽かった。そのはずが。再び訪れた沈黙は重く、おもり錘を足につけ水の底へと引きずり込まれていく気分だった。もうここにいたくない。逃げようとする私を兄貴の一言が止めた。

「話しがしたいんだが。」

それは誘いと言うより懇願のように聞こえた。でも私は首を振っていた。時間が癒してくれない傷もある。私のそれは乗り越えたかのように見え、ぱっくり口を開けていた。誰が好き好んで塩をすり込むと言っのだろう。

「どうして？ せっかく会えたのに？」

私は二度と会いたくなかった。あの時の事を謝ろうとしているならむしろ聞きたくなんか無い。

「結婚しますから。」

もし母さんに言った言葉の本当の意味が

“責任をとるにはまだ未熟だ”

だったとしても、今更蒸し返して欲しくなかった。

「こんな私でもいいって言ってくれる人があるんです。そのお話で今日ここに来ました。ですから、もう、あなたとはお会いする気はないんです。」

慇懃で無礼で冷たく言い放った。自分の声が自分の声じゃないみたいに響く。微かに身体を硬くした兄貴の横をすり抜け行き過ぎようとした私の腕を強い手がかんだ。

「待って。」

その悲痛な声に涙が出そうだった。間近で見上げるすぐ目の前には

この6年間毎晩のように夢見た顔が有った。

独りにして！

心が暴れた。兄貴といると壊れそうになる。本当は今でも好きで好きで忘れられないのだから。愛しているからこそ、どうして捨てたのかとなじりたくなる。

あの時私を抱いた直後、一生待つと、私が基ときつちり別れるまでいつまでも待つと言ったその唇が恨めしい。この人は信じられる人だって、今でも信じている自分がいて。違うと言いつけながら、それでも無垢な子供の様に信じてしまう自分が哀れだった。だから許せと言われても許せない。愛と憎しみは表裏一体だ。逃げる覚悟の私を

「行かせない。」

凍り付いた表情の兄貴が抱きしめた。その力は強かった。

ただでさえ気分が悪かった。その上、兄貴に会ってショックだった。胸元から何かがせり上がり、足下がふらつく。嘘をつかれるのはもう嫌だ。

どこかで聞き覚えの有る声が

「早く部屋へ。」

そう言った。私は倒れかけたらしい。意識はすぐに戻ったけれど、なんだか訳が分からないうちに兄貴に抱えられ部屋まで戻った。不思議な事にこんな時だって言うのに兄貴の香りを覚えていて、少し汗ばんだその匂いのあまりの生々しさに、これは現実じゃないかもしれない、そんな風に思えてしまった。そう、これはあの春の日の続きかもしれない。本当の私は保健室で寝ていて、短い時間で堕ち込んでしまう悪い夢の中にいるんだ。

それを引き戻したのは

「もう、我慢し過ぎなの、優里ちゃんは。」

そう言う心配そうな声だった。とっさに

「大丈夫です。」

返事をする、

「だから!!」

笹川さんが顔を歪めたのが見え

「もう、無理するのはやめなさい。」

その声は諭す様に聞こえた。

つづく

L  
e  
f  
t  
  
A  
l  
o  
n  
e

### 第三十八話 プロポーズ

無理なんてしていないから。ただ、お着物が辛いだけだから。

何だか自分の体じゃないみたいに怠くて、兄貴の首に手を回し両脇で支えてもらいながら着物の帯を外してもらった。立って外さないと何本ものひもを使っている都合上絡まり易く上手く脱げないのだと言う。私は倒れない様に必死で体に入力を入れていた。

それでも疲れきっていた私はどうしようもなく兄貴の胸に顔を埋めた。懐かしい香りが体中に広がる。どうして私はこの人じゃなきゃ駄目なんだろう。

兄貴は昔から特別だった。兄貴の腕の中にと自分が情けないほど弱くなる。いつだってこの人は私の痛い所を突いてくる。その度に心臓を掴まれ、心が震えた。それは確かに痛いんだけど、包んでくれる兄貴がいる事を知っているから、安心して痛みに身を任せる事が出来た。

兄貴の心臓の音がする。こんなに近くで感じている。その事で胸がつまり再び涙が沸き上がりそうになる。

「優里ちゃん、今日のお見合い相手の人、その人だから。」

笹川さんが呟いた。うつむく私にもう一度、

「お見合いの相手、その人だから。」  
そう言った。

彼の指がぴくんと動き私の背中を擦った。私はもう涙を止められなかった。彼のスーツを汚し、それでも涙を止める事ができなかった。

帯が解けても身動きが取れず、両手で顔を覆ったまま。着物が弛み胸の締め付けも無くなったと言うのに、微かだったはずの目眩は勢いを増していた。

どうしてこの人じゃなきゃ駄目なんだろう。

いつしか泣き疲れた私は眠りに落ちた。それは多分、兄貴の腕の

中があまりに心地よかったせいだと思う。

ゆっくりと頭を撫でる手がある。それから背中も。

彼と別れてから時々見る夢だった。疲れ過ぎて眠れない夜や、ふとした明け方に。優しい手が私を撫でる。まるで

“ いいこだね。”

って諭す様に。

“ 安心しておやすみ。”

と。守護霊みたいを守ってくれるその手を捕まえたい、本当に欲しいのは安らかな眠りじゃなくて抱きしめてくれるその腕なんだ、そう思うのだけれど、あまりの心地よさに負けいつも夢の世界に堕ちてしまう。

目が覚めたときどこにいるのか解らなかった。真っ白い壁、夕焼け。ベッドに腰掛けたワイシャツの背中が

「 起きた? 」

そう囁いた。ひどく掠れた声。風邪でも引いているかのようだ。

「 声、変。何か温かいもの飲んだ方がいいよ。」

無意識のうちにそう言っていた。ああ、そう言えばこの人の声は良く響く低音だった。記憶の声と現実がつながる。

「 暖房のせいだから気にしなくて大丈夫。それよりも、」

ためらいがちに、でも一息で彼は言った。

「 結婚の件、お願いしといたから。」

その意味を理解できなかった。

「 勇利は相手さえ承知したらそのまま結納するつもりだったと聞いているよ。だからそう言う事だ。君を捨ててしまった事をずっと後悔していて、今日会ってその事が身にしみた。だから。」

彼は小さなひと呼吸をおいた。

「 君が休んでいる間に絵里子さんに電話でそう話した。勇利の事を

もらい受けたいと。絵里子さんも納得してくれた。」

決定的な一言を聞いた気がする。やっぱり捨てられていたんだって。でもそれ以上に自分の知らない所で人生が決まってしまった事が悔しかった。私の人生なのに。

それに兄貴に謝って欲しい訳じゃない。結局悪いのは私だったんだから。ましてや……。

「もうすぐ勇利は僕の嫁さんになる。妻になる。二人で暮らすんだ。毎日僕の為に料理して、ベッドを暖めて、キスをする。」

そう話す彼の口調はちつとも嬉しそうじゃ無かった。この人は確かに兄貴で、何を話しているか分っているはずなのに、言ってる事は絵空事みたいだった。

「いいよ、そんな事しないで。」

傷のせいだ。この傷を見て責任を感じたんだ。現に私の顔を見ようとしてもしないじゃないか。

「勇利に決定権は無いんだよ。もう大人同士で話しは決まってしまったんだから。」

その淡々とした口調が悲しく、情けなさで涙があふれた。ああ、また泣いている。私はこの人を縛りたいんじゃない。それなのになぜこの人は間違った選択をするんだろう。同情なんかまっぴらだつて言ってるじゃないか！！

兄貴が好きだった。もし全くの他人と新しい生活を始めるのなら、夢なんか抱かなくて済む。でも、兄貴は違う。無い物ねだりをして、そのくせまた失うのかとおびえて暮らすなんてごめんだ。

だったらいつその事何もない方がいい。独りで生きてくから。放っておいてほしい。

その事を伝えたかった。一緒になんかなれないと。そのくせ肝心の言葉は出てこなくて、ただ泣くだけで、喉が詰まった。

u  
u  
<

### 第三十九話 P a i n

彼の進もうとしている間違った道を引き返して欲しい、そう言いかけたその時、丸まっていた背中が不意に振り向き、

「辛い。」

と言った。震える唇が、

「辛い。」

と。

「勇利が泣くのが辛い」

と。それは初めて見る兄貴の弱い部分だった。強くてたくましいと信じていたその人が、かすれた声で私を呼んだ。

「勇利、お願いだから泣かないで。」

突然、その言葉がまっすぐに心に落ちて行く。この人は本当に辛いのだ。私の為に心が弱くなってしまう、辛いのだ。私が隠しているはずの気持ちをこの人にだけは吐露してしまう様に、この人はそんな私の全てを飲み込んでくれていたんだ。だから、辛いんだ。

どこにこんなに水が有ったのかと思えるほど涙が湧き上がる。この涙は兄貴の為だと思う。兄貴が辛いのが辛い。

私も兄貴の感情を飲み込み、二人はまるで一つの人間の様だった。その胸に手を伸ばそうと動きかけた瞬間彼の体が降りてきて、まるで宝物の様に包み込まれ、

「なあ、頼むよ。俺だつて、俺だつて幸せになりたいんだ。」

その感情の波に飲まれた。私は兄貴の一番柔らかくて傷つきやすい内側に守られていた。この世でたった一つ信じられるもの。それが、この人だ。

不意に

“絵里子さんも納得してくれた。”

たった今兄貴が言ったその一言が心に浮かび上がってきて、全ての謎が解けたようだった。簡単な話した。母さんだ。



以前から母さんが兄貴を警戒していた事ぐらい知っていた。それにあの時受けた検査がレイプ検査だったことぐらい気づいてた。痕跡だって残っていたはずだ。それを聞かされた母さんは必死で私を守ろうとしたに違いない。たとえ私が合意の上だって言っただとしても兄貴はずっと年上で。怪我の上に避妊していないと分かったら騙されていると思ったとしてもおかしくなかったから。

きつとあの時母さんは兄貴を私に近づけない方がいいと考えたんだ。だから電話番号も教え無かった。それなら兄貴から連絡が無かった事も納得できる。全てのつじつまが合っていた。私から連絡がない事で兄貴は家まで会いに来たに違いない。そこで母さんと会って話しをしたんだ。そしてその時、母さんは彼が二度と私に近づけないように釘を刺したんだ。

“本当に愛しているというのなら、身を引くべきだ。”

そんな感じで。だから兄貴は私から離れる以外なかったんだと思う。優しい人だから。

「愛している。愛しているから、一緒にになりたい。俺だって、幸せになりたいんだ。」

彼の声がこだました。

そう、この人は私を愛していたから、二度と会えなくなったのだ。私はほんの少し笑った。先を越されて負けてしまった気がする。

私の方がもっと、もっと愛しているのに。私もあなたを愛している。私だって、あなたじゃ無いと幸せになれない。

この完璧なひとが、私の肩で泣いていた。

その晩彼は目を腫らした私を

“初めてのデート”

に誘ってくれた。本当にこれは

“初めて”

だった。記憶が有って、歳月が有って。温め続けたものが有ると言うのに、私たちはまだ告白もしていない恋人同士みだった。

笹川さんが着物の代わりに手配してくれていたラベンダーブルーのワンピースに着替え、私たちは歩いて少しの観覧車に向かった。空を漂う15分の間、私たちは何も言葉を発しなかった。そのくせつつぺんでは触れるだけの優しいキスをくれた。

並んで歩き、兄貴はただ微笑んで私の指を弄ぶだけ。時々もつと近づきたそうな素振りを見せては止め、体を引いては恥ずかしそうに目を伏せた。

レストランは週末という事も有ってどこもかしこも込んでいて入れそうにない。私は食欲が無かったけれど、兄貴が、

「仕方が無いから、今日は部屋で食べよう。」

と頼んでくれたルームサービスは思いのほか美味しかった。この人というからだ。私は彼の差し出すお茶を受け取りながらそう思った。食事の後、兄貴はお風呂にお湯を溜め私に入るように勧めた。今晩は帰らない手はずになっている事を感じ、無性に甘えたくって、考える事を放棄して湯船につかった。シンクの横には着替えにとパジャマの用意までされていた。

妙に疲れを感じベッドについた私を、彼は布団ごしに撫でるように優しく叩いた。それは私が眠りにつくまで続いた。降り注ぐそれはまるで慈雨のようだった。

明け方、私は隣で眠る彼に手を伸ばしていた。懐かしい香り、懐かしい感触。たった一度の事なのに、その何もかもを鮮明に覚えている。だからその胸に顔を埋めその全てを確かめた。

「兄貴……。」

思わず漏れてしまった呟きに、薄目を開けた彼が囁いた。

「はじめ。」

なんだかおかしかった。私は笑いを噛み締めながら、彼の名前を呼んだ。

「肇、肇。」

言葉が転がるように飛び出した。

「他の事なんか、どうでもいい。」

恨みも、苦しみも、悲しみも。兄貴以外の事なら全部捨てられるから。私は彼のパジャマの下に手を添わし、ぬくもりを感じた。

「他の事なんてどうでもいいから。」

それから彼の軀にしっかりと自分を巻き付けた。たった一つ。兄貴だけが欲しい。彼は私の目を覗き込み

「お帰り。」

を言った。

『ただいま。』

その言葉を言いたかったけど、言葉にできなくて、そのまましがみつく手に力を込めた。

彼は何も聞かずに私の中に小さなビクバンを残した。

私はその原始的な感覚に酔いしれた。この人を思う時に感じる恋の痛みとも少し違う、胸元に向かって昇って来る歓びに、自分が女だと強く感じた。

自宅に帰ると、母さんと父さん、それからガキども二人が待っていて。兄貴は私よりも少し前を進みまるで盾になろうとしているかのように振る舞った。一通り挨拶が終わった後、それまで神妙にしていた弟達はやいのやいのと騒ぎ始め、どこで覚えてきたのか耳を塞ぎたくなる様な露骨な質問にみんな慌てた。

「仕方ないなあ、こいつら、黙らせてきます。」

私は二人の首根っこを掴み、玄関に向かった。

「ケーキ、買ってこよう、な。」

それから弟達に耳打ちした。

「父さんが一緒だったら、たくさん買ってもらえるかもなあ。こういう時の父さんは太っ腹だから。」

お決まりのように弟達は狭い家の中で

「父ちゃん！！！」

を連呼し始め、広川さんが慌てて飛んできた。

「ねえ父さん、一緒にケーキ買いに行こうよ、ね。」

私はとっておきの笑顔を取り出した。広川さんは女の子が欲しかったらしく、その分私に甘い。

ほんの少しだけ、母さんと兄貴に時間をあげたかった。あの二人が密約を交わす時間を。6年前、何を話し合ったかは知らないけれど、多分二人とも私に知られたくないと思っている事だ。だからそれを隠すお手伝いをする。

過ぎた事をとやかく言う気はなく、もちろん誰も責める気なんかない。兄貴も母さんも私の事を想っていたからした事だって分かっているから。

「姉ちゃん、でっかいケーキがいい!」

「でっかいケーキ!」

ガキどもがショーケースに向かって叫ぶ。

「じゃあ一番大きいのをお願いしようか。」

父さんは迷わずそれを指差した。

「優里はチョコプレートが大好きだったよな? ちょうど良いんじゃないか?」

私は28cmというあり得ない大きさのケーキに目を見張っていた。

「これ、本当に食べれんのかなあ。」

疑う私にお店の人が苦笑いをしていた。

「だいじょーぶ だいじょーぶ」

その拍手のついたコーラスに他のお客さん達が笑っている。

「ご家族、仲がいいんですね。」

白髪のおばあちゃんが声をかけて来た。

「ええ、そうなんですよ。」

父さんが胸を張った。

「とっても仲がいいんですよ。それにね、娘の結婚が決まりましたね。」

そう言っただけ私の方を少し見た。

「もう一人、家族が増えるんです。」

その横ではきらきらと目を輝かせた弟達が期待に胸を膨らませ私を見上げていた。

帰った私に兄貴は

「ありがとう。」

と小さな声で囁いた。

私にはその理由が分った。

みんなでケーキを分けて食べる。みんなで分ける。独りじゃない。みんなで分ける。

「そっちがでかい！」

「じゃんけんだ！」

「姉ちゃんは大から小さいのだね！」

そのちやぶ台の下で、笑っている彼の手が私の手をそっと包み、独りじゃないと教えてくれた。

L e f t   A l o n e

エピソードへ

## エピソード

### エピソード

妊娠に気づいたのは肇さんの方が先だった。

「遅れている気がするから調べてもらおう。」

そう言ってお腹をなでられ笑い飛ばした。絶対あり得ないって思ったからすぐに検査薬を使った、そのはずなのに。疑いもしなかった目の前でピンクの+の印がくつきりと浮き出て来て、呆然としている私に彼が

「おめでとう。」

を言う。

取り乱しているのは私だけ。

肇さんが報告したら、父さんは頷きながら彼の肩を叩き、母さんは赤飯の用意を始めた。見合いから1週間後には入籍していたけれど、とりあえず挙式までは自宅で暮らすつもりだったから、心の用意ができていなかった。何もかも。まごつく私を尻目に肇さんは図々しくも私の部屋で暮らすようになってしまった

「離れているのは嫌だ。」

と駄々をこね、毎朝あの騒々しいちゃぶ台で一緒にご飯を食べ、夜中にこっそりやって来てはむくみ始めた足を揉んでくれた。

「もうすぐこの子に君を盗られると思うと、少ししゃくだな。」

そんな事を呟きながら、寝ている私のまだ平らなお腹を擦ってる。

夜中にふとした拍子で目が覚めて、左手に絡んでいる彼の指を感じものすごく安心する。銀色の指輪が二つ並んでいて、彼は相変わらず時々だけ寝言を言う。

「むにやむにや。」

もうすぐ転勤で忙しくなる。お式の用意だって大変だ。それなのに肇さんは平気な顔で笑っている。

「愛してる。」

まるでそれが全てかのように。私はその腕の中で丸くなる。

あのうるさいガキどもは私が妊娠したと分かったとたん豹変し、妙にかいがいしく家事をするようになった。

こうやって幸せが増えていく。

披露宴の出席の返事もほとんど集まり、沢山の祝辞が書き込まれていた。その中の一枚には、彼女も同席させたいから席を作れと書かれている一言も有り。私たちはそれを笑った。

「やっぱりあいつは尻に敷かれているんだ。」  
そう言う肇さんの表情にしこりは無かった。

私は独りじゃなかった。取り残されたと思ったのは、自分しか見えてなかった所為だって今なら分る。独りが良い、なんて、嘘だ。

F i n

L e f t   A l o n e

## エピソード（後書き）

今までお付き合い頂いてありがとうございます。  
やっぱり ハッピーエンド が一番



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5694d/>

---

Left Alone

2010年10月9日19時56分発行